

# 2020年度（第70回）学生生活実態調査結果報告書

東京大学学生委員会

学生生活調査WG

## 目次

調査の概要.....	1
表1 学生生活実態調査実施状況一覧表 .....	2
表2 2020年度(第70回)学生生活実態調査回収状況一覧 .....	3
留学生対象版調査概要 .....	4
<b>I. 基本的事項 (回答者の特性)</b>	
1. 性別.....	5
2. 入学時の科類.....	5
3. 現在の所属 .....	5
4. 現在の学年 .....	6
5. 出身校 .....	7
6. 現役・浪人等.....	7
<b>II. 入学・進学・学業</b>	
7. 東大受験時の入学希望度 .....	8
8. 入学の動機.....	9
9. 進学の決定(内定) .....	11
10. 卒業後の進路 .....	13
11. 大学院進学理由 .....	15
「II. 入学・進学・学業」の分析 .....	17
<b>III. 就職</b>	
12. 就職希望職種 .....	18
13. 就職希望職種選択理由 .....	21
「III. 就職」の分析 .....	23
<b>IV. 不安・悩み</b>	
14. 不安・悩みの程度 .....	24
15. 悩みの相談相手.....	26
16. メンタルヘルスの状態 .....	28
「IV. 不安・悩み」の分析.....	30
<b>V. 新型コロナウイルス感染症の影響</b>	
17. オンライン授業満足度 .....	31
18. コロナ収束後の希望授業形態.....	34
19. 活動制限による影響.....	36
「V. 新型コロナウイルス感染症の影響」の分析.....	41
<b>VI. 大学への要望</b>	
20. 大学への要望・期待.....	42
「VI. 大学への要望」の分析.....	44
<b>VII. 生活費の状況</b>	
21. 収入・支出・預貯金.....	45
22. 授業料負担.....	52
「VII. 生活費の状況」の分析.....	53

<b>VIII. 通学・住居</b>	
23. 居住地	54
24. 居住形態（自宅／自宅外）	55
25. 居住形態（自宅外選択者への設問）	56
「VIII. 通学・住居」の分析	57
<b>IX. 奨学金</b>	
26. 奨学金受給の有無	58
27. 奨学金の役立て方	59
28. 奨学金不受給理由	60
「IX. 奨学金」の分析	61
<b>X. アルバイト</b>	
29. 過去1年間のアルバイト実施状況	62
30. アルバイトの種類	64
31. アルバイトの時間	65
32. アルバイトの収入	66
33. アルバイトの目的	67
34. 現在の暮らし向き	69
「X. アルバイト」の分析	71
<b>XI. 家庭の状況</b>	
35. 高校時代の居住地	72
36. 家族構成	74
37. 生計維持者	75
38. 父親の職業	76
39. 母親の職業	77
40. 世帯収入	78
「XI. 家庭の状況」の分析	80
総合分析 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限が学生に与えた影響	81

## 調査の概要

### 1. 調査票の作成

2021（令和3）年2月に学生委員会学生生活調査WGで調査内容の企画立案を行った。

### 2. 調査の期間

2021（令和3）年3月上旬～3月下旬

### 3. 調査の対象及び抽出率

学部学生。基本調査、留学生を対象とする調査ともに悉皆調査。

### 4. 調査の方法

基本調査、留学生を対象とする調査ともに、悉皆調査。

### 5. 調査の内容

I. 基本的事項、II. 入学・進学・学業、III. 就職 IV. 不安・悩み、V. 新型コロナウイルス感染症の影響、VI. 大学への要望、VII. 生活費の状況、VIII. 通学・住居、IX. 奨学金、X. アルバイト、XI. 家庭の状況、XII. 具体的記述

## 報告について

1. 学部学生を対象に調査を行った。基本調査と留学生調査は別々に実施し、特に比較が意味を持つと思われる項目について、両者の比較分析を行った。集計結果の分析に当たっては、学部間・年度間・男女間などの相違に注目し、特異な数値傾向の把握に努めた。
2. 「学生生活実態調査結果報告書」については、調査票、単純集計表、及びクロス集計表を省略した。省略した集計表等については、ホームページに別ファイルとして掲載した。
3. 2009年度までは、2分の1程度の具体的記述を原文のまま報告書に記載していたが、個人が特定できる可能性があること、さらに、報告書掲載の基準が恣意的になりやすいこともあり、2009年調査より具体的記述は報告書に掲載しないこととした。ただ、このことは具体的記述を無視するとか軽視することを意味しているわけではなく、それぞれの具体的記述は学生委員会学生生活調査WGで検討するとともに、担当理事によっても検討され、大学の施策の改善に役立てられている。
4. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。

## グラフと表について

1. 今回、本文に掲載した経年変化のグラフと表については、1986年調査までさかのぼって取り上げた項目がいくつかあり、「表1」に1986年以降の調査の実施状況を表示した。
2. 文中に掲げたグラフと表については、それぞれの年の比較を見やすくするため「無回答」及び「非該当」を除いた比率で作成している。ただし、時系列の場合には、2007年までは無回答を含んでいる。また、個々の数値を四捨五入しているため、合計が100%に満たないものと100%を超えるものがある。
3. 複数回答の設問については、回答者数（非該当及び無回答を除く）を分母にして百分率（パーセント）を算出している。そのため、パーセントの合計は100%を超える場合がある。
4. 平均値の算出は、非該当及び無回答のものを除く該当者平均を求めた。
5. 作表の説明変数として用いた用語の定義は、次のとおりである。
  - 「全体」……………回答者全員の比率を示す。
  - 「文科系」「理科系」……………在籍する学部により二つの系に区分したものを示す。
  - 「本郷」「駒場」「弥生」………学生が主に通学するキャンパスを示す。

表 1 学生生活実態調査実施状況一覧表

回数	調査年月	対象学生	抽出率	対象者数	回収率	調査方法
				人	%	
第36回	1986年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,385	72.6	郵送自記式
第37回	1987年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,432	73.9	〃
第38回	1988年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,459	70.9	〃
第39回	1989年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,480	78.5	〃
第40回	1990年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,504	63.1	〃
第41回	1991年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,530	62.2	〃
第43回	1993年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 10	1,593	64.8	〃
第44回	1994年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	2,005	60.6	〃
第45回	1995年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	2,011	64.0	〃
第46回	1996年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	2,004	60.9	〃
第47回	1997年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	1,990	60.2	〃
第48回	1998年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	1,964	60.3	〃
第50回	2000年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	1,917	54.4	〃
第51回	2001年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 8	1,900	49.6	〃
第52回	2002年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,749	37.2	〃
第53回	2003年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,700	40.6	〃
第55回	2005年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,534	38.7	〃
第56回	2006年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,455	32.8	〃
第57回	2007年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,406	43.0	〃
第58回	2008年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,506	45.2	〃
第60回	2010年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,419	42.6	〃
第62回	2012年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,346	45.3	〃
第64回	2014年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,337	44.0	〃
第66回	2016年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,325	36.6	〃
第68回	2018年11月	学部男子・女子	男・女 1 / 4	3,359	35.9	〃
第70回	2021年 3月	学部男子・女子	悉皆（全数）調査	13,394	12.6	Web

(注)「休学者」「外国人留学生」は、対象学生から除かれている。1992年調査は「外国人留学生」を含む

表2 2020年度(第70回)学生生活実態調査回収状況一覧

学部名	男子			女子			全体			
	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	対象者数 (人)	回収数 (人)	回収率 (%)	
前期課程・教養学部	5,212	674	12.9%	1,177	243	20.6%	6,389	933	14.6%	
後 期 課 程	法学部	700	65	9.3%	212	25	11.8%	912	90	9.9%
	医学部	413	22	5.3%	104	18	17.3%	517	40	7.7%
	工学部	1,834	179	9.8%	189	27	14.3%	2,023	206	10.2%
	文学部	544	60	11.0%	213	40	18.8%	757	100	13.2%
	理学部	573	78	13.6%	57	6	10.5%	630	86	13.7%
	農学部	441	29	6.6%	140	31	22.1%	581	61	10.5%
	経済学部	593	31	5.2%	139	12	8.6%	732	44	6.0%
	教養学部(後期)	298	42	14.1%	142	31	21.8%	440	75	17.0%
	教育学部	131	13	9.9%	92	17	18.5%	223	31	13.9%
	薬学部	118	17	14.4%	72	8	11.1%	190	25	13.2%
	小計	5,645	536	9.5%	1,360	215	15.8%	7,005	758	10.8%
合計	10,857	1,210	11.1%	2,537	458	18.1%	13,394	1,691	12.6%	
2018年度(第68回) 調査	2,724	898	33.0%	635	296	46.6%	3,359	1,206	35.9%	

※性別に関して、「その他」の選択者及び無回答者は合わせて23名見られたが、全体の回収数(人)には含めた。

## 留学生対象版調査概要

### 調査概要

従来の学生生活実態調査の対象に含まれていなかった、留学生を含む全学生を対象とした調査を行うため、2018年度（第68回）調査から、留学生を対象とした調査を同時に実施している。2020年度（第70回）調査は、学部留学生を対象とした、二度目の実施となる。

質問項目は、基本調査との共通項目と、留学生を対象にした独自項目から構成されるが、本報告においては、共通項目部分について、留学生と国内出身学生との比較を中心に報告を行う。留学生版調査全体については、別途「留学生対象調査報告書」として、国際化教育支援室においてとりまとめ、報告を行う。

### 実施方法・時期

調査は、東京大学社会科学研究所のシステムを利用し、日本語・英語版のオンライン調査（悉皆調査）として実施した。学生への周知は学務システム（UTAS）上での告知と学部・研究科などを通じて行った。なお、基本調査は、従来郵送調査で実施されてきたが、70回調査はオンライン調査に移行、同時期に行った。

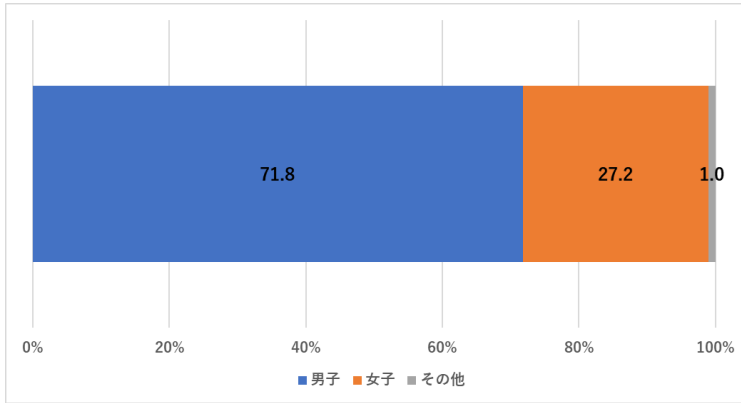
### 調査対象・有効回答数

主に「留学」の在留資格を有する、学部正規課程在籍者（交換留学生・研究生・休学者等を除く）。なお、在留資格「特別永住者」「永住者」「定住者」「日本人・永住者・特別永住者の配偶者」等は、基本調査の対象に含まれる。

調査を実施した2021年3月に在籍した、調査対象学生は282名であり、有効回答数は、98名であった。なお調査の実施時点においても、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための入国制限により、日本への入国ができていない学生がおり、回答者には国外在住者も含まれる。詳細については、「留学生対象調査報告書」を参照のこと。

# I. 基本的事項（回答者の特性）

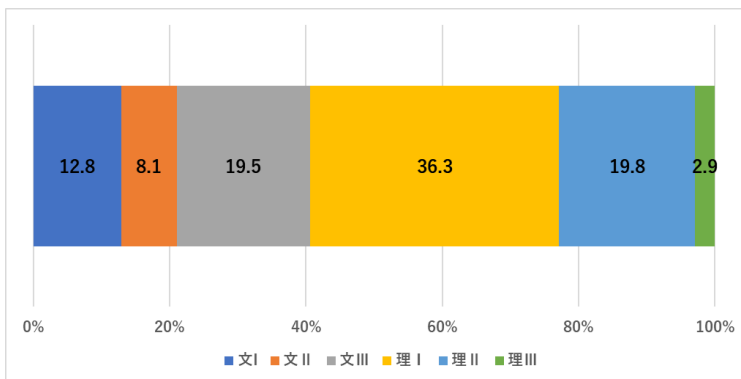
## 1. 性別



回答者の性別は、男性が71.8%、女性が27.2%で在籍者比率（男性81.1%、女性18.9%）と比較して、女性回答率が高い。

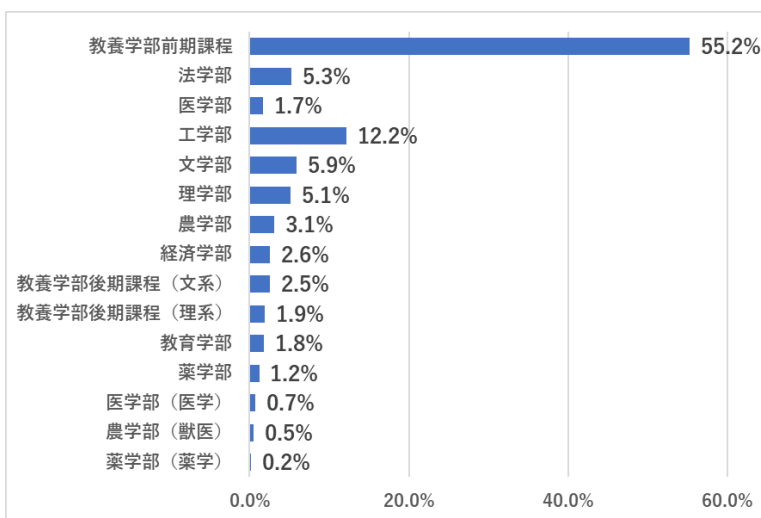
留学生の回答者は、男女比が半々であり、概ね在籍者の比率を反映していた。

## 2. 入学時の科類



入学時の科類は理Iが最大であるものの、全学の構成比とほぼ等しい。

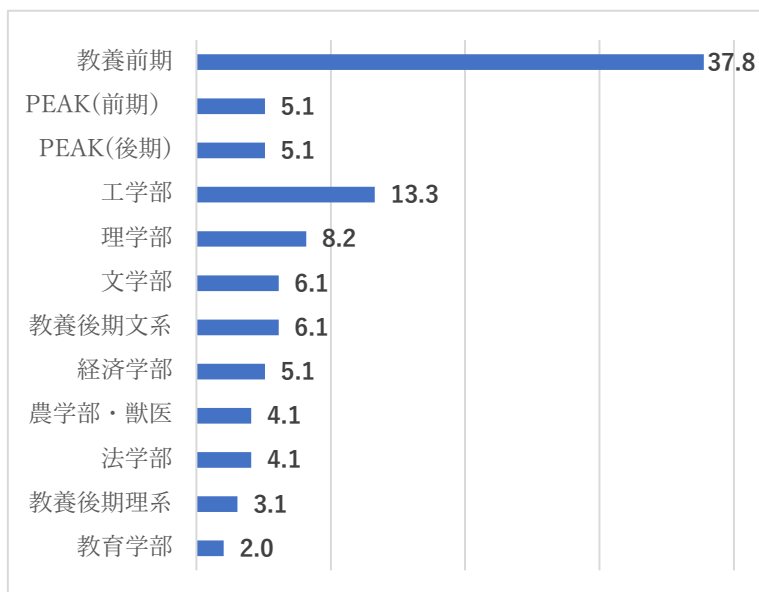
## 3. 現在の所属



現在の所属は教養学部前期課程が55.2%で最も多く、全学構成比と比較して5%ポイント程度多い。それ以外は全学構成比と概ね等しい。

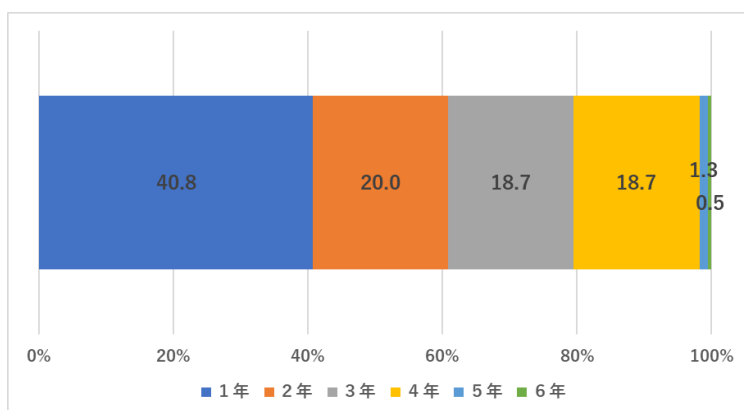


### 【留学生 現在の所属】



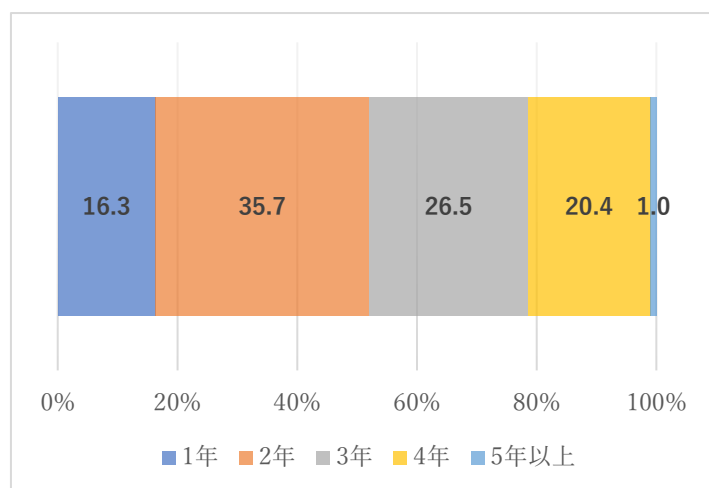
留学生の回答者のうち、約半数弱が、前期課程(前期課程・PEAK プログラムの前期課程所属者)であり、後期課程の学生においては、工学部の学生の割合がもっと高かった。前期の学生の在籍比率は51.8%、工学部在籍者は12.8%であり、概ね、在籍者の比率を反映した回答といえる。また在籍者の比率として考えると、PEAK 在籍者の回答割合が高い。

### 4. 現在の学年



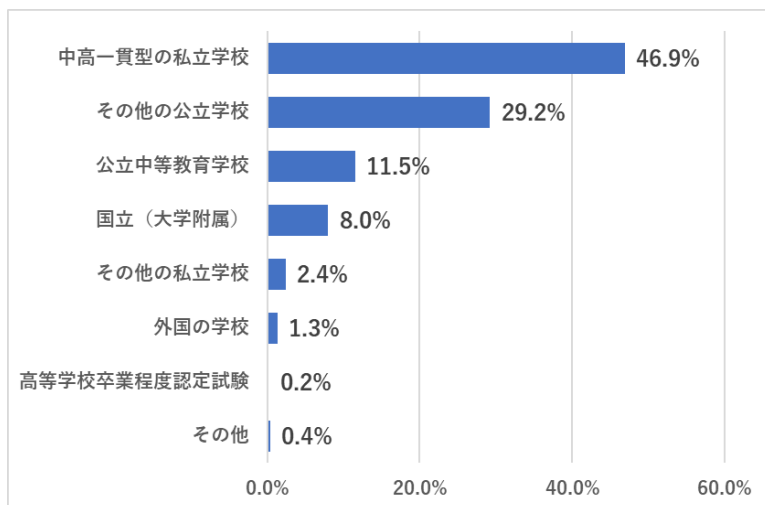
前回調査と比べて1年の割合が16.7%ポイント高く、3年~4年の割合が合わせて13.8%減少している。2年生は3.6%ポイント程度の減少である。1年生の高さが見て取れる。

### 【留学生 現在の学年】



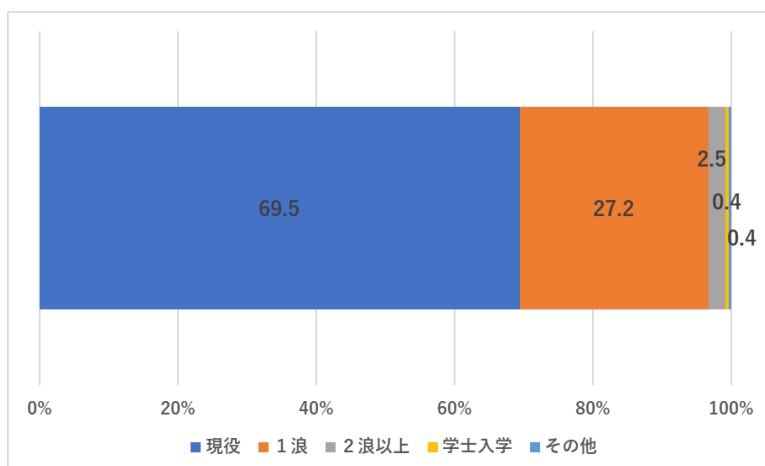
1年生の回答は16.3%であり、基本調査の結果と比較すると、1年生の回答が少ない。新型コロナウイルス感染症の影響で、出入国に制限がかかったことの影響がみられる。また、1年生の数が少ないことから、前期課程学生の回答比率が低かったが、それ以外は概ね在籍者の比率を反映していた。

## 5. 出身校



出身校は「中高一貫型の私立学校」が前回調査の53.8%と比べて9.1ポイント減少した。それ以外は全体的に微増しているものの、前回調査と概ね等しい。

## 6. 現役・浪人等



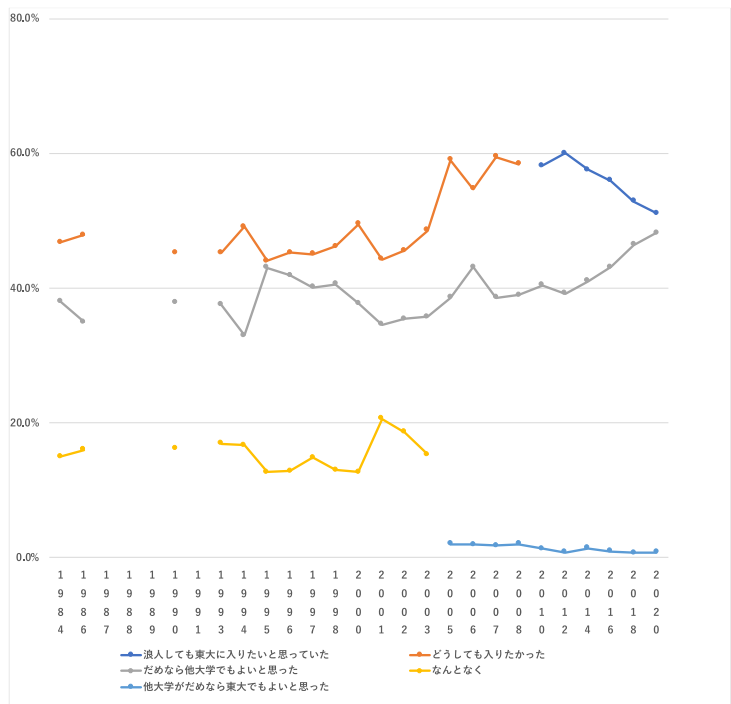
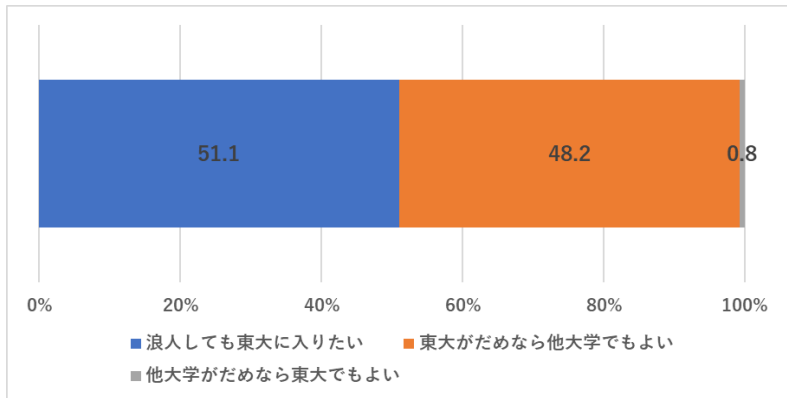
現役・浪人は前回調査の現役69.7%、1浪27.7%とほぼ同程度の割合となった。

## Ⅱ. 入学・進学・学業

### 7. 東大受験時の入学希望度

- 「浪人しても東大に入りたい」過半数を占めるものの、減少傾向を維持

7. 東大を受験する際に東大に入学することをどの程度希望していましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

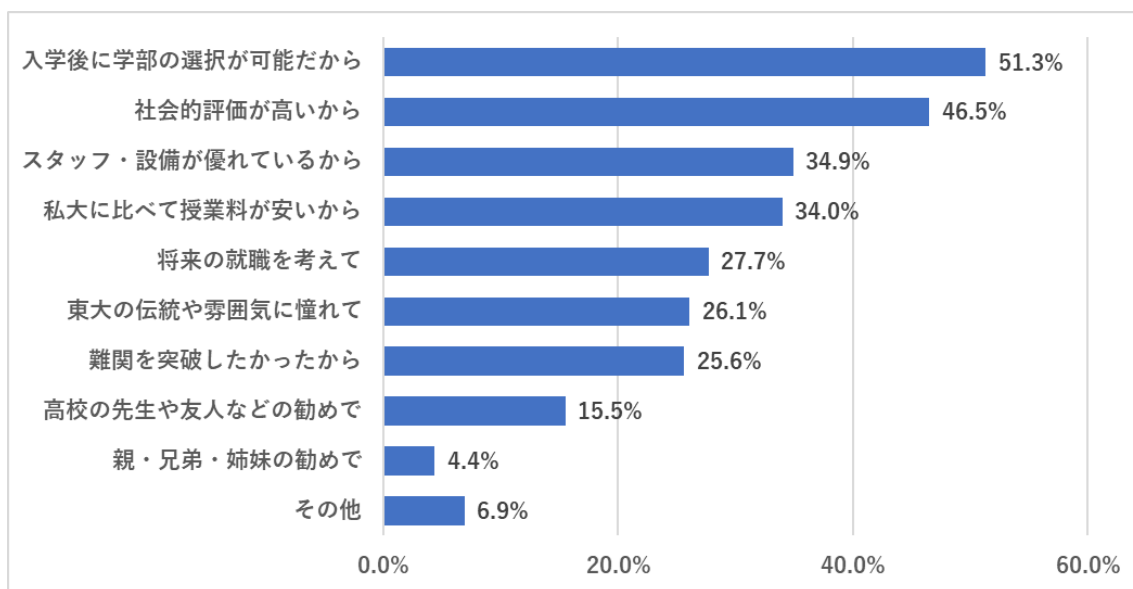


「浪人してでも東大に入りたい」と思っていた層は51.1%と過半数を占めるものの、2012年以降その割合は減少傾向にある。対して「東大がダメなら他大学でもよい」が48.2%で、2012年以降増加傾向にある。

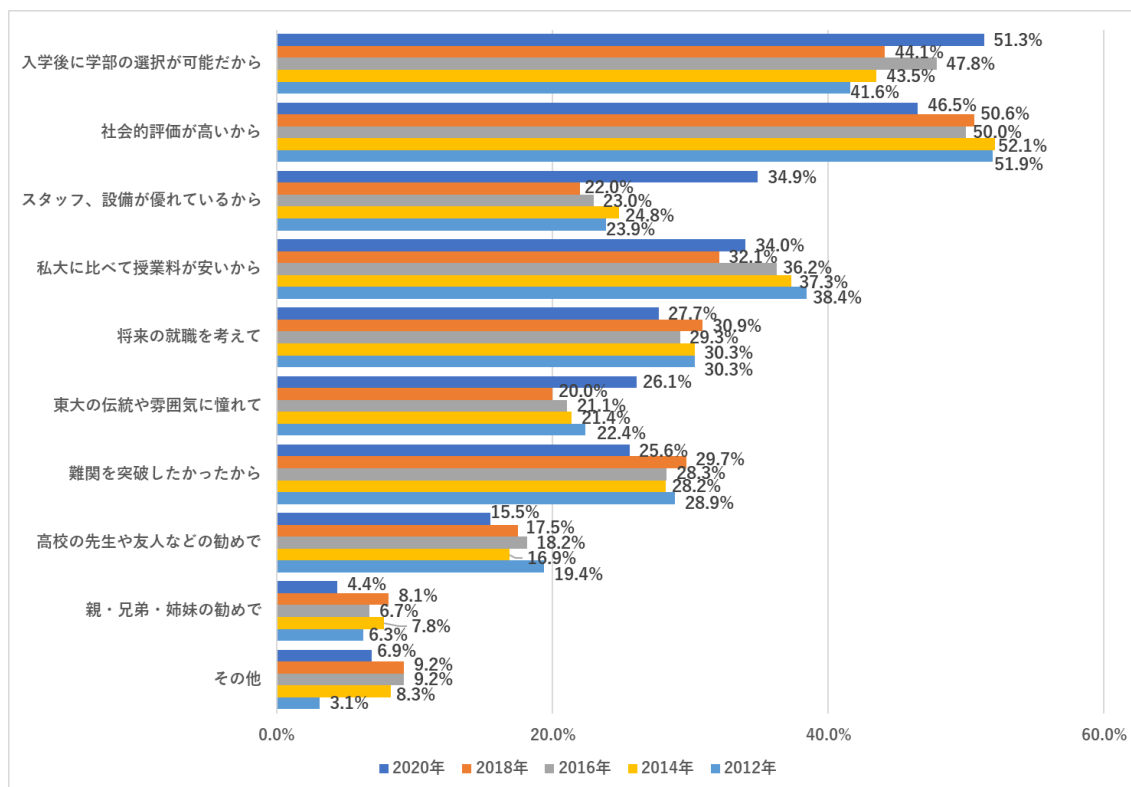
## 8. 入学の動機

- 入学動機上位3項目「入学後に学部を選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」「スタッフ・設備が優れているから」
- 2012年以降初めて「入学後に学部を選択が可能だから」と「社会的評価が高いから」の順位が逆転
- 「スタッフ・設備が優れているから」は前回調査と比較して12.9%ポイント増加

8. 東大入学の動機は、どれにあたりますか。主にあてはまるものを3つまで選んでください。



## 東大入学の動機（基本調査）

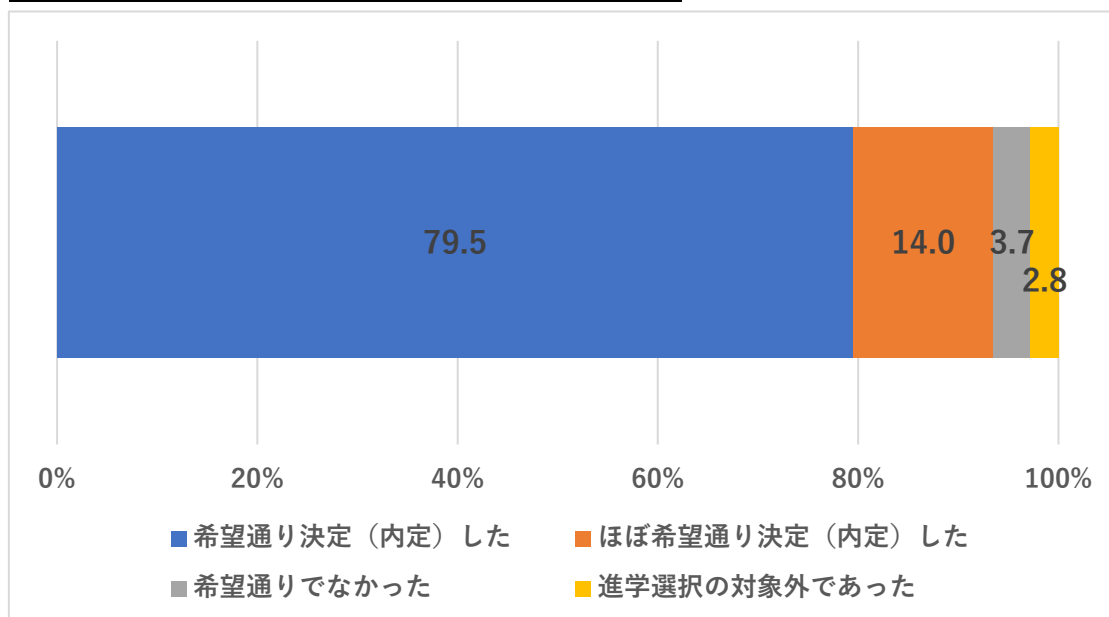


東大入学の動機は「入学後に学部を選択が可能だから」が51.3%で最も多く、「社会的評価が高いから」「スタッフ・設備が優れているから」と続く。上から「社会的評価が高いから」「入学後に学部を選択が可能だから」「私大に比べて授業料が安いから」という理由であった前回調査と比べて、社会的評価の高さと学部選択の順位が入れ替わっているほか、「私大に比べて授業料が安いから」という理由が上位3項目から抜け落ち、「スタッフ・設備が優れているから」という理由に変わっている。2012年以降「社会的評価が高いから」という理由は減少傾向にあり「入学後に学部を選択が可能だから」という理由は増加傾向にあったものの、「入学後に学部を選択が可能だから」が「社会的評価が高いから」を上回ったのは2012年以降初めてである。また、「スタッフ・設備が優れているから」は前回調査と比較して12.9ポイントと大きく増加している。

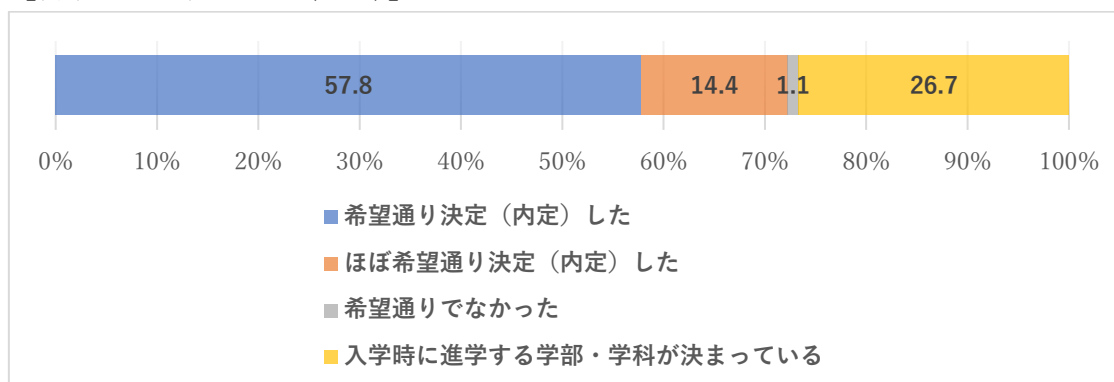
## 9. 進学の内定

- 9割程度が進学先を「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」、1995年以降から同様の傾向

9. 【進学内定者】及び【後期課程学生】にお伺いします。進学の内定（内定）は、希望通りでしたか。あてはまるものを1つ選んでください。

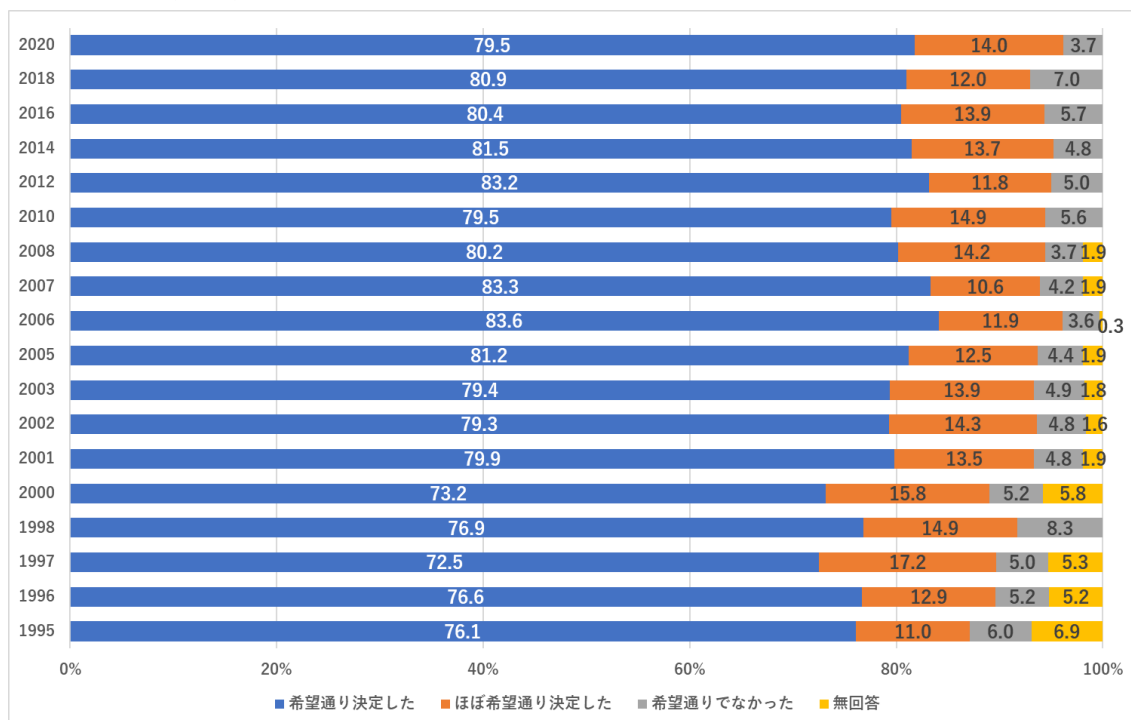


【留学生 進学の内定（内定）】



留学生のうち、26.7%は、入学時に進学する学部・学科が決まっていたが、残りの学生の大半は、おおむね希望通り、進学先が決定・内定したと回答した。

## 進学の内定（内定）基本調査

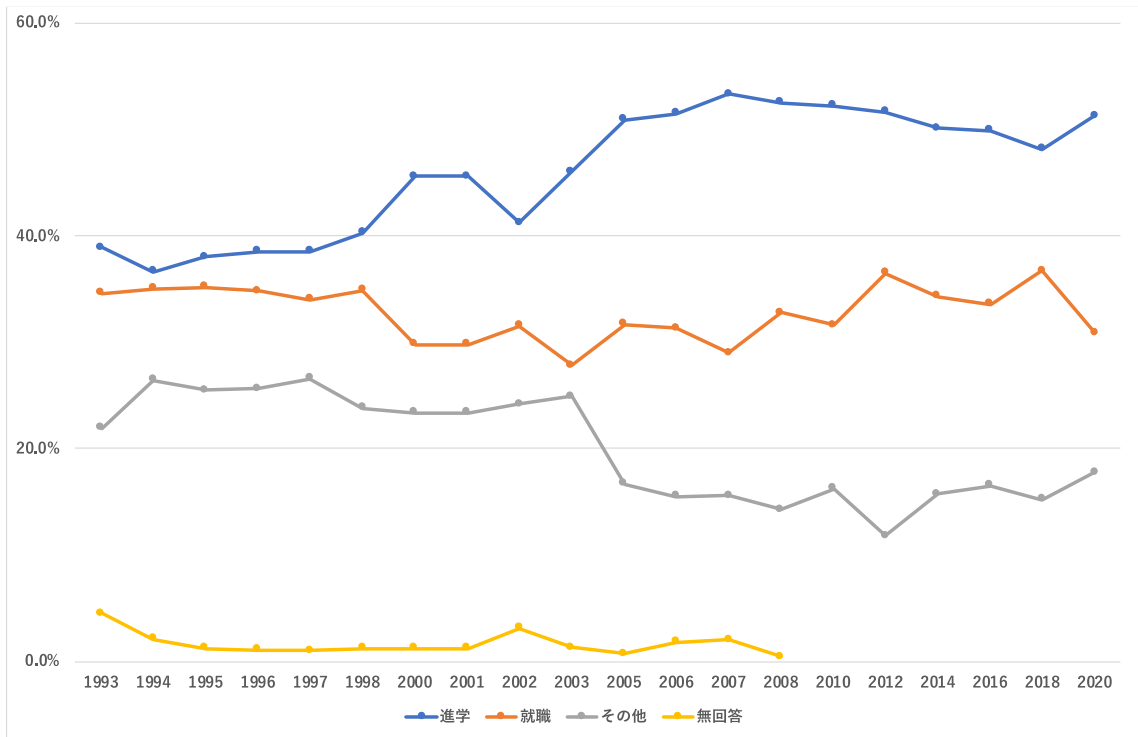
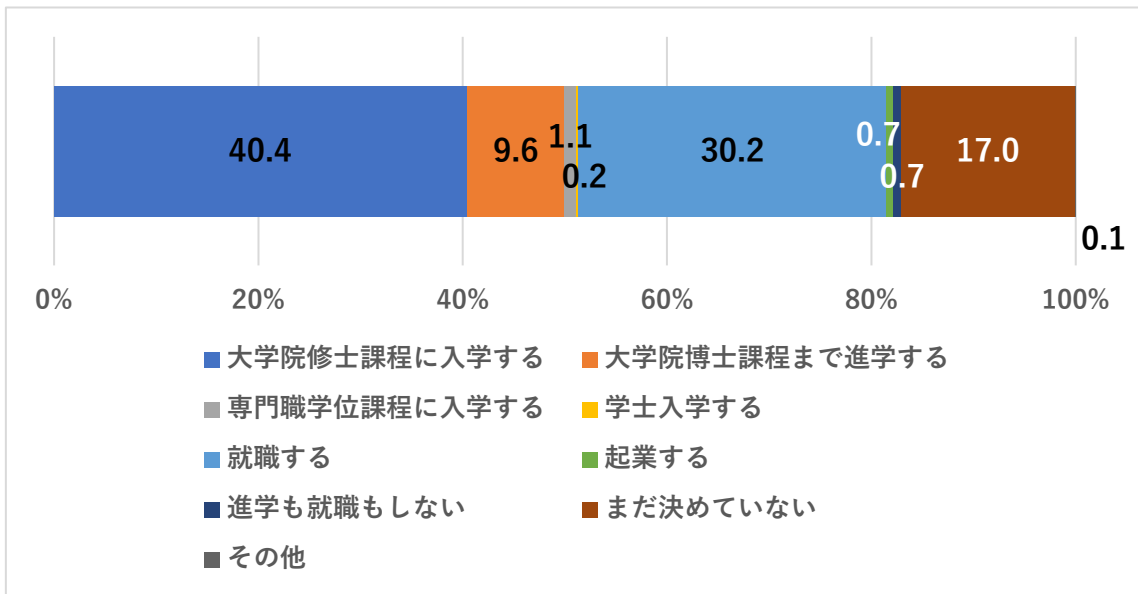


進学の内定は 79.5%が「希望通り決定した」で、「ほぼ希望通り決定した」も含めると 93.5%となる。目立った時間的変化や傾向は見られず、1995 年以降大多数が進学先を「希望通り決定」ないし「ほぼ希望通り決定」している。

## 10. 卒業後の進路

- 進路上位3項目「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」
- 進学が減少傾向から一転して増加し、就職が減少

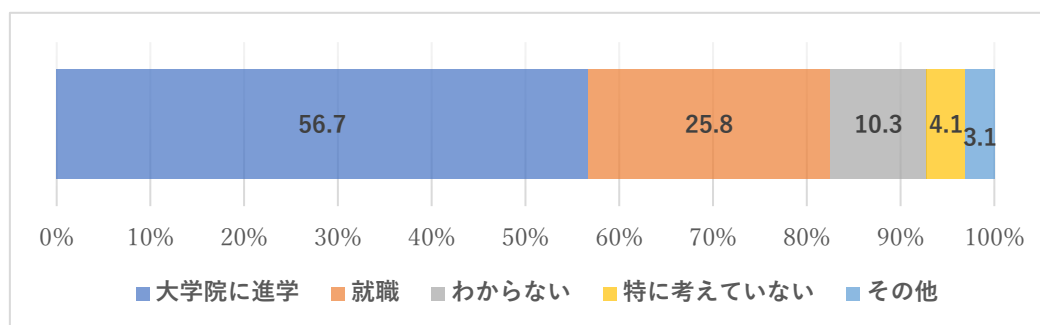
10. あなたは、学部卒業後は、どのような進路を予定していますか。あてはまるものを1つ選んでください。





卒業後の進路上位 3 項目は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」で、前回と同様の順位である。ただし、時系列で見ると今回調査では進学と就職との差が大きく開いていることがわかる。2007 年以来一貫して微減傾向であった進学は今回調査で増加に転じ、また一貫はしていないものの微増傾向にあった就職は減少した。なお、2012 年以降増加傾向にあったその他は今回も増加が確認された。

#### 【留学生 卒業後の進路】

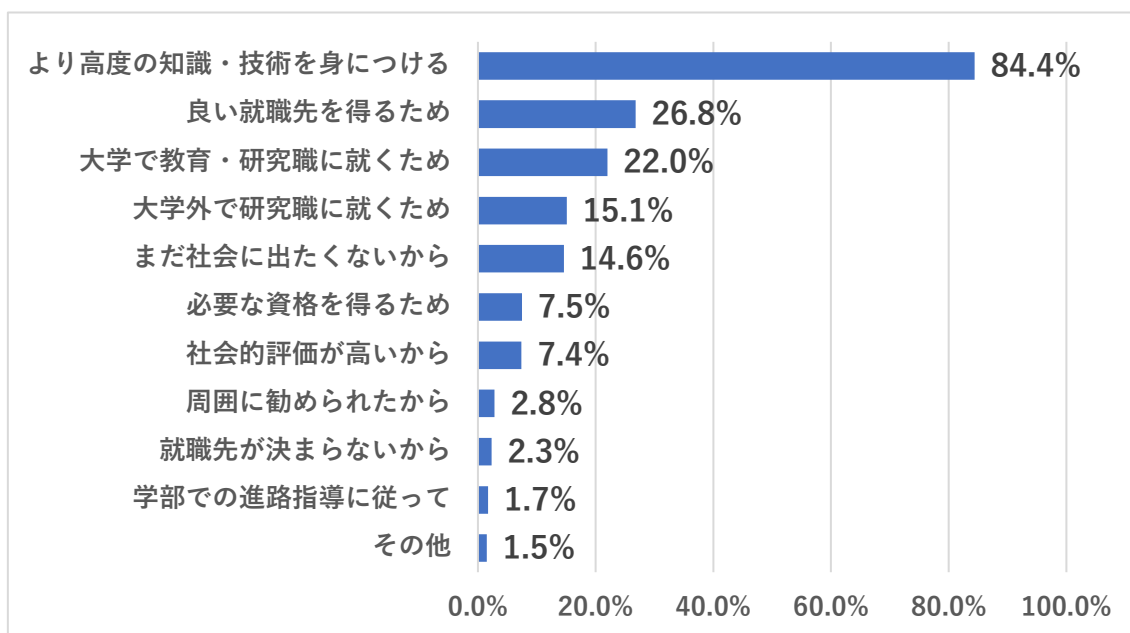


基本調査と選択肢は異なるが、留学生の卒業後の進路予定としては、大学院進学希望が 56.7% と最も多く、半数を超える学生が大学院進学希望である。また、大学院進学希望者のうち、進学を希望する大学としては「東京大学」67.3%、「日本・出身国以外の国の大学」30.9%、「出身国の大学」1.8%であり、「日本国内の他大学」を選択した学生はいなかった。

## 11. 大学院進学理由

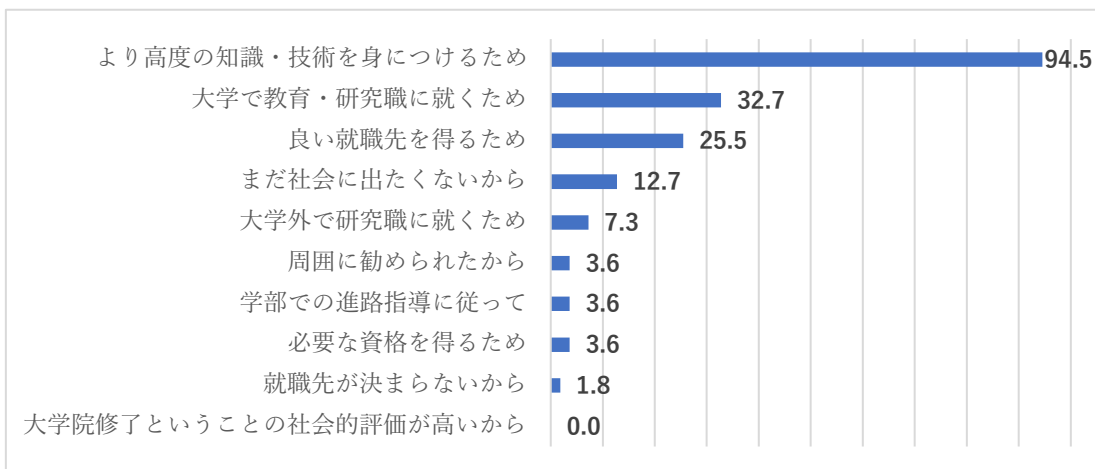
- 大学院に進む理由上位 3 項目「より高度の知識・技術を身につける」、「良い就職先を得るため」、「大学で教育・研究職に就くため」
- 「より高度の知識・技術を身につける」、「大学で教育・研究職に就くため」を選択した者が前回調査と比べて増加

11. 大学院に進む理由で、あてはまるものを2つ選んでください。



大学院に進む理由上位 3 項目は「より高度の知識・技術を身につける」（今回調査 84.4%、前回調査 76.0%）「良い就職先を得るため」（今回調査 26.8%、前回調査 27.2%）「大学で教育・研究職に就くため」（今回調査 22.0%、前回調査 15.7%）と続く。前回調査と比べて「より高度の知識・技術を身につける」ことを理由として挙げた者は 8.4%ポイント多く、また「大学で教育・研究職に就くため」が 6.3%ポイント増加している。さらに、前回調査で 3 番目に選択されていた「まだ社会に出たくないから」（今回調査 14.6%、前回調査 22.4%）と「大学で教育・研究職に就くため」の順位が逆転しており、より高度の知識・技術を身につけ、大学で教育・研究職に就くために大学院を希望している者が多いことがわかる。

### 【留学生 大学院進学理由】



大学院進学希望を選択した 55 名の留学生が、その理由（2つ選択）として挙げた項目の 3 項目（「より高度の知識・技術を身につけるため」「大学で教育・研究職に就くため」「よい就職先を得るため」）は、基本調査結果と重なるが、留学生の方が、大学での研究・教育職を得ることを理由として挙げる学生の割合が高い。

## 「Ⅱ. 入学・進学・学業」の分析

入学、進学選択、進路等について調査を行った。入学生の過半数が浪人をしてでも東京大学への入学を希望しているものの、近年は減少傾向にある。また、入学理由として「入学後に学部の選択が可能だから」、「社会的評価が高いから」「スタッフ・設備が優れているから」が挙げられ、前回調査から「入学後に学部の選択が可能だから」と「社会的評価が高いから」の順位が逆転した。このような結果が今回の調査に限った一時的なものか、注視する必要があるが、社会的評価だけでなく、進学選択などの東大特有の制度やスタッフ・設備などの資源に魅力を感じるものが多いことが示されている。その後の学部選択も概ね希望通りになっている。

卒業後の進路希望は「大学院修士課程に入学する」「就職する」「まだ決めていない」と回答した者が多く、概して進学が就職よりも多いものの、近年はその差が縮まっていた。しかし、今回調査では進学が増加に転じ、就職が減少に転じたことで、進学と就職との差が大きく開いた。新卒採用の方法の変化や景気変動が学生の選択に与える影響を注視していく必要がある。また、大学院進学理由も「より高度の知識・技術を身につける」、「大学で教育・研究職に就くため」の割合が大きく増加し、「まだ社会に出たくないから」の割合が減少しており、より高度の知識・技術を身につけ、大学で教育・研究職に就くために大学院を希望している者が多くなったことがわかる。

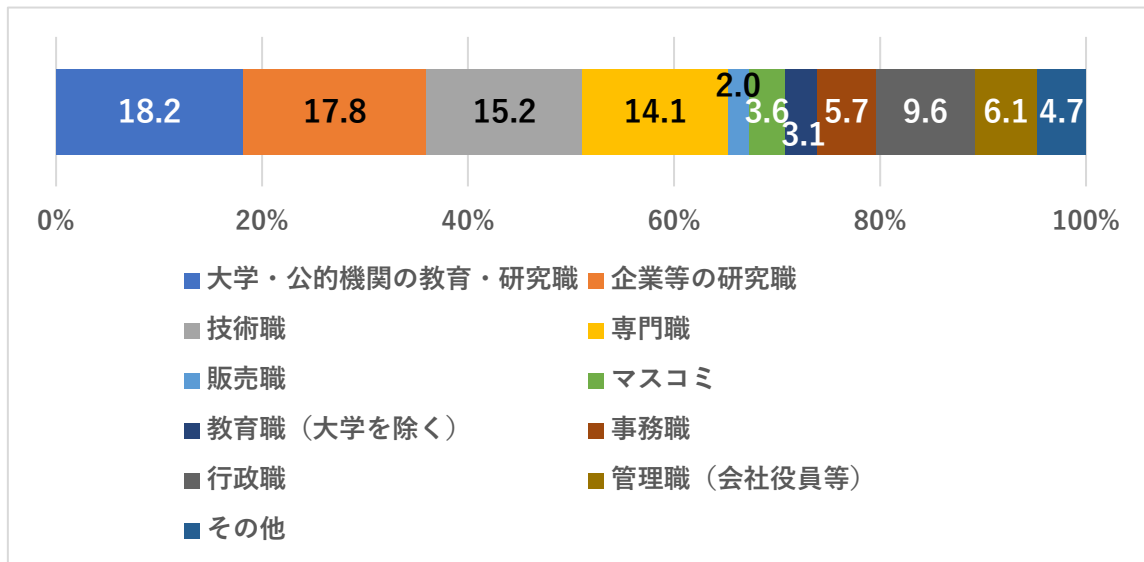
また、留学生の卒業後の進路希望や大学院進学理由等は、日本人学生等と大きく変わらない特徴を示した。

### Ⅲ. 就職

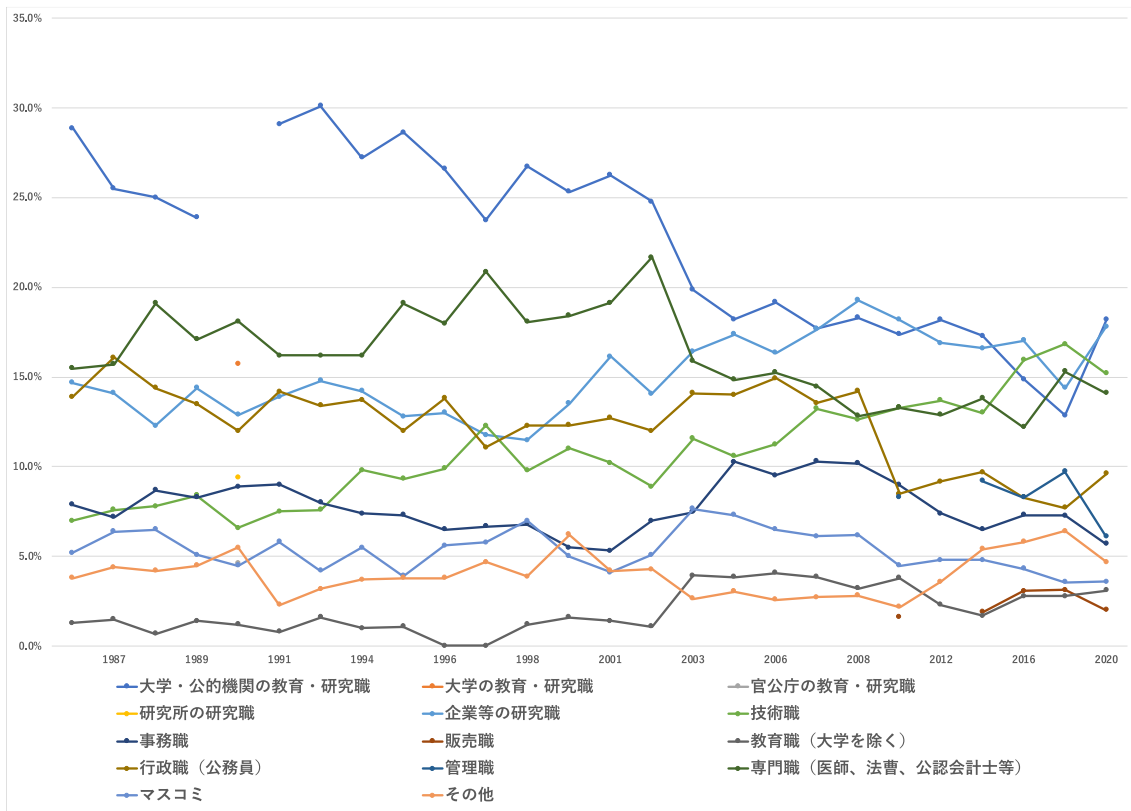
#### 12. 就職希望職種

- 全体的な就職希望職種上位3項目は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「技術職」
- 「大学・公的機関の教育・研究職」「企業等の研究職」の希望割合が減少傾向から一転して増加
- 一方で「事務職」「専門職」「管理職」は減少

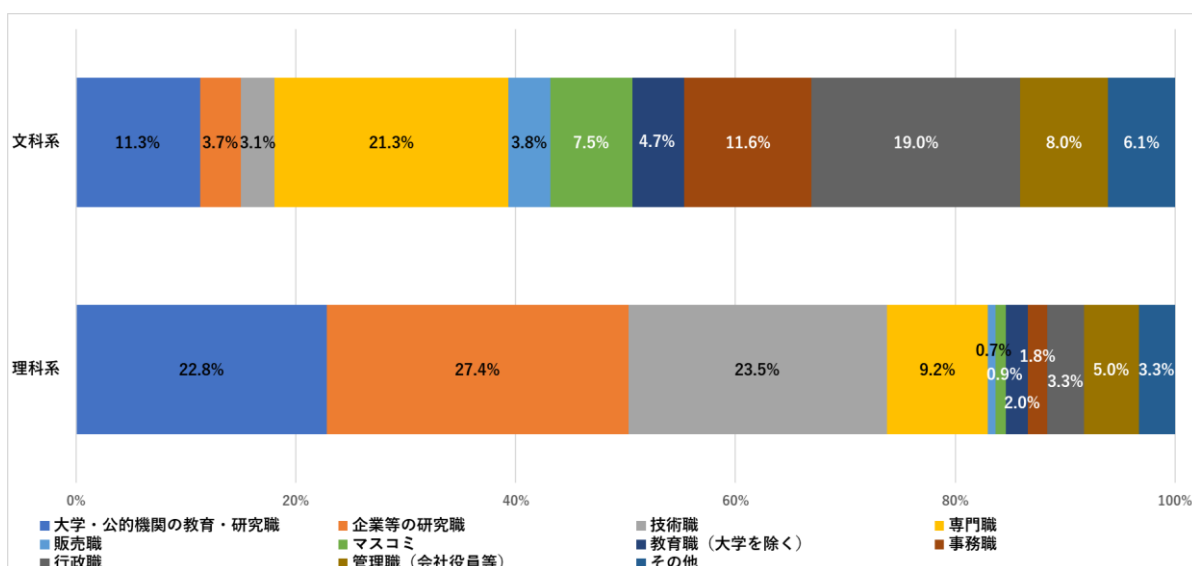
12. どのような「職種」に就きたいと思っていますか。あてはまるものを1つ選んでください。



研究者を志望するでは「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」が合わせて36%を占め、前回調査の27%より大幅に増加した。

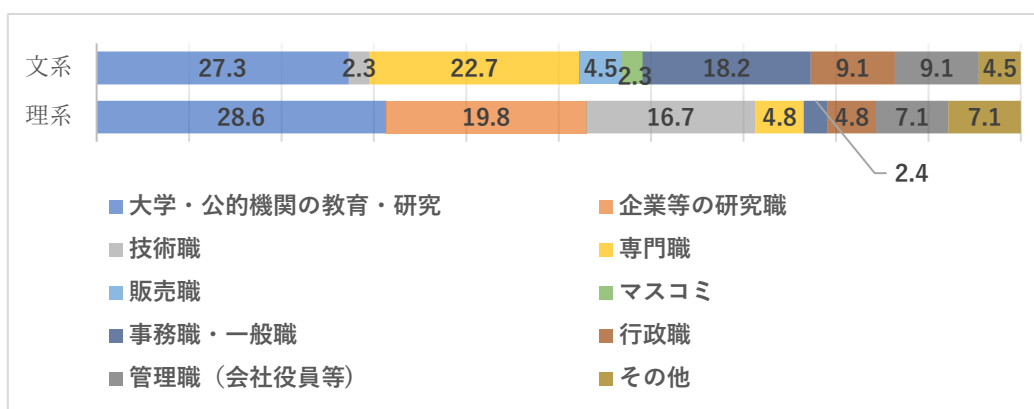


時間的变化を確認する。1987 年以来減少傾向にあった「大学・公的機関の教育・研究職」と「企業等の研究職」が大きく増加に転じたほか、「行政職（公務員）」も増加しており、より高い専門性が要求される職業への志向が高まっている。これは、大学院へ進学を希望する学生の割合の増加傾向とよく一致する。それに対して「技術職」「専門職」「管理職」は減少に転じている。



文科系の上位3項目は「専門職」(前回調査 18.9%、今回調査 21.3%)、「行政職」(前回調査 14.8%、今回調査 19.0%)、「事務職」(前回調査 15.2%、今回調査 11.6%)であったが、10%程度は「大学・公的機関の教育・研究職」を希望していた。一方、理科系の学生は大学院への進学率が高いため、研究職等の専門性の高い職種への志望が高くなる傾向があり、上位3項目は「企業等の研究職」(前回調査 23.4%、今回調査 27.4%)、「技術職」(前回調査 27.7%、今回調査 23.5%)、「大学・公的機関の教育・研究職」(前回調査 16.3%、今回調査 22.8%)であった。

### 【留学生 就職希望職種・専門別】

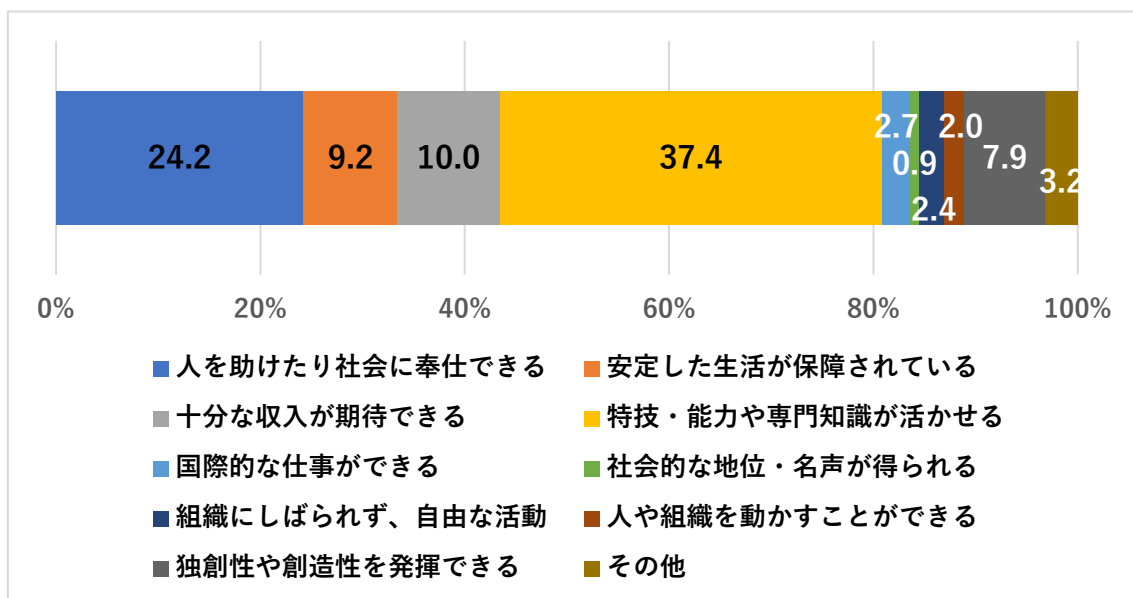


文系・理系別に就職希望職種をみると、文系留学生は、文系日本人学生等よりも、研究職志向がみられる。理系は、企業等の研究職を希望学生が、日本人学生等よりも少ない。全体的に、大学での研究者志向が強いのが、留学生の特徴といえる。

### 13. 就職希望職種選択理由

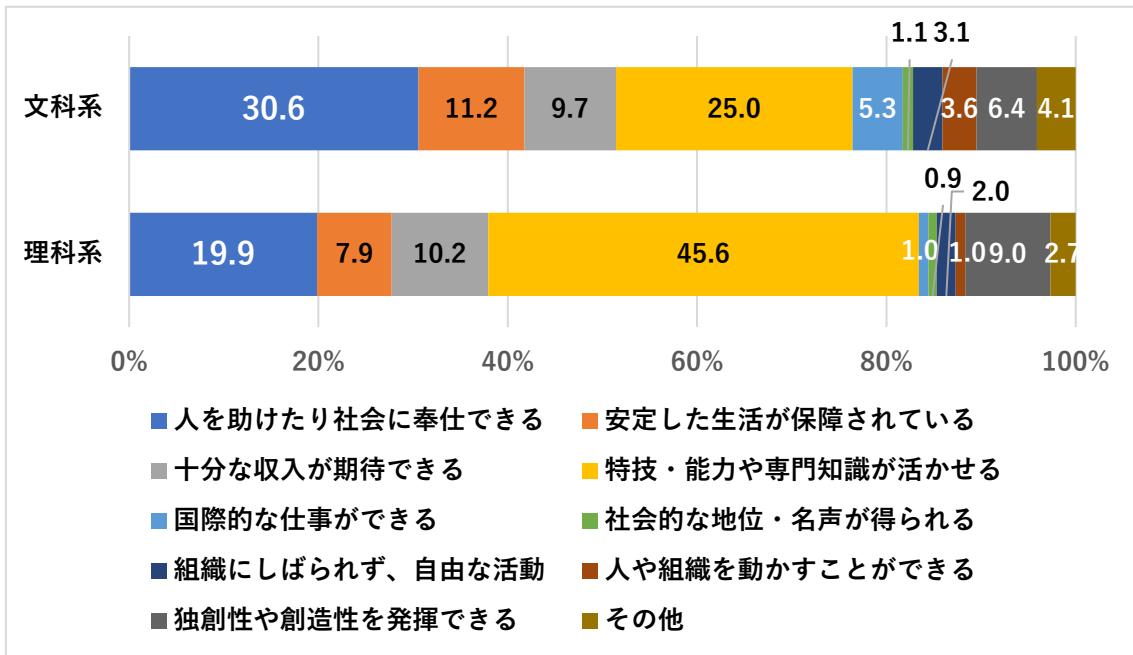
- 就職希望職種選択理由の上位3項目「特技・能力や専門知識が活かせる」、「人を助けたり社会に奉仕できる」、「十分な収入が期待できる」
- 理科系では「特技・能力や専門知識が活かせる」、文科系では「人を助けたり社会に奉仕できる」が最も選ばれた

13. 問12で答えていただいた「その職業に就きたい」と思っている理由は何ですか。あてはまるものを1つ選んでください。



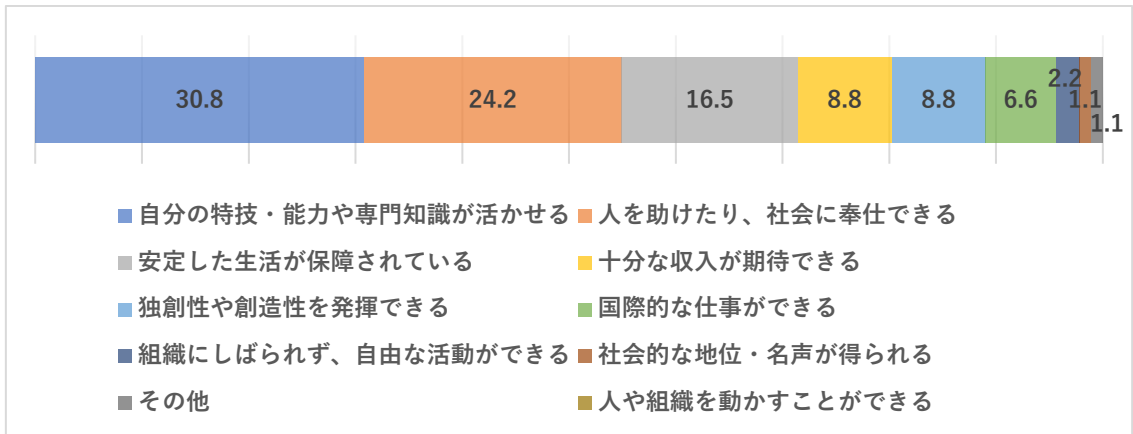
希望する職業に就きたい理由の上位3項目は「特技・能力や専門知識が活かせる」（前回調査 36.2%、今回調査 37.4%）、「人を助けたり社会に奉仕できる」（前回調査 17.4%、今回調査 24.2%）、「十分な収入が期待できる」（前回調査 12.7%、今回調査 10.0%）であった。前回調査と比べ「人を助けたり社会に奉仕できる」を選択した割合が6.8%ポイント増加している。一方で「社会的な地位・名声が得られる」「人や組織を動かすことができる」といったリーダーシップ志向の割合が非常に低かった。





文理間で就職希望職種を選択理由に差がみられた。文科系の一番の志望理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」(30.6%)である一方、理科系は「特技・能力や専門知識が活かせる」(45.6%)であり、大学で学んだ知識をすぐに活用したいという傾向が読み取れる。

【留学生 職業に就きたい理由】



留学生がその仕事に従事したい理由は、「特技・能力や専門知識が活かせる」「人を助けたり社会に奉仕できる」「安定した生活が保障されている」であった。基本調査の結果同様、「社会的な地位・名声が得られる」「人や組織を動かすことができる」といった理由を選択した学生は少なかった。

### 「Ⅲ. 就職」の分析

就職希望職種とその理由を尋ねたところ、職種は「大学・公的機関の教育・研究職」、「企業等の研究職」、「技術職」が挙げられた。「大学・公的機関の教育・研究職」「企業等の研究職」は1991年以来減少傾向にあったものの、今回調査では増加に転じたことが本年度の特徴的な点である。理科系だけでなく文科系でも10%程度は「大学・公的機関の教育・研究職」を希望していた。

文科系の第1の職種選択理由は「人を助けたり社会に奉仕できる」であり、理科系の第1位の理由は「特技・能力や専門知識が活かせる」であった。一方で、どちらにおいても「社会的な地位・名声が得られる」「人や組織を動かすことができる」といったリーダーシップ志向の割合が非常に低い傾向にあり、先行きが見通せない時勢で安定志向の選択がなされている感がある。

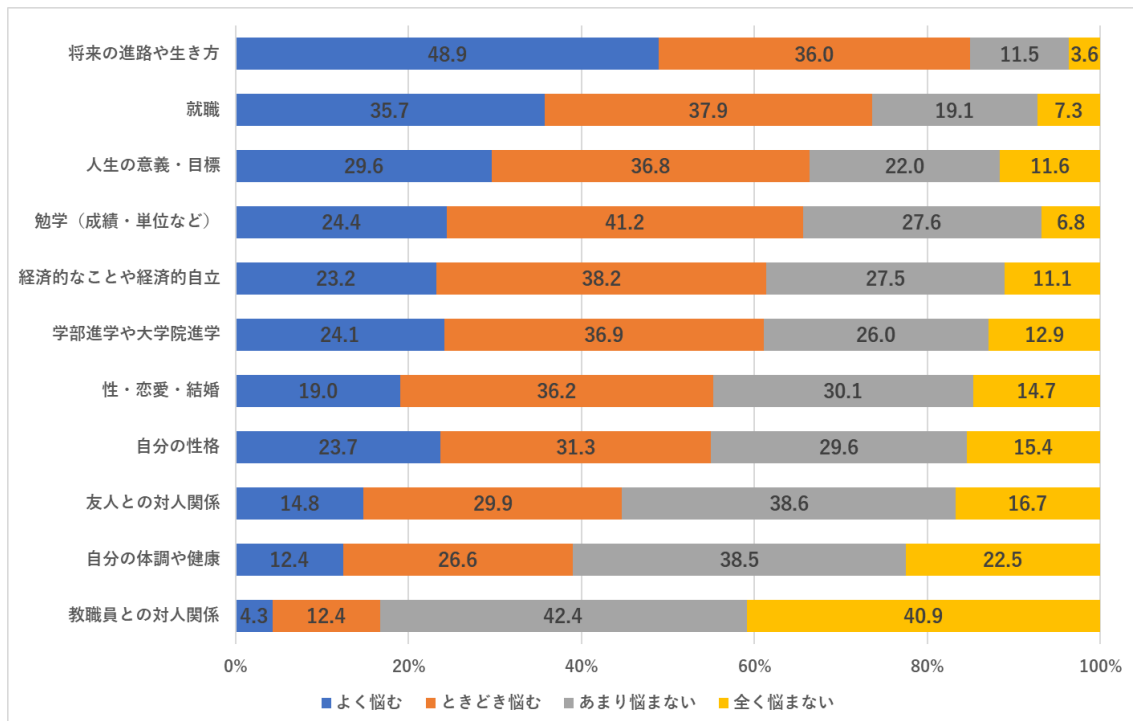
留学生の就職希望は、概ね日本人学生等と重なるものの、留学生の方が大学の研究職を希望する学生が、文系・理系ともに多い傾向があった。

## IV. 不安・悩み

### 14. 不安・悩みの程度

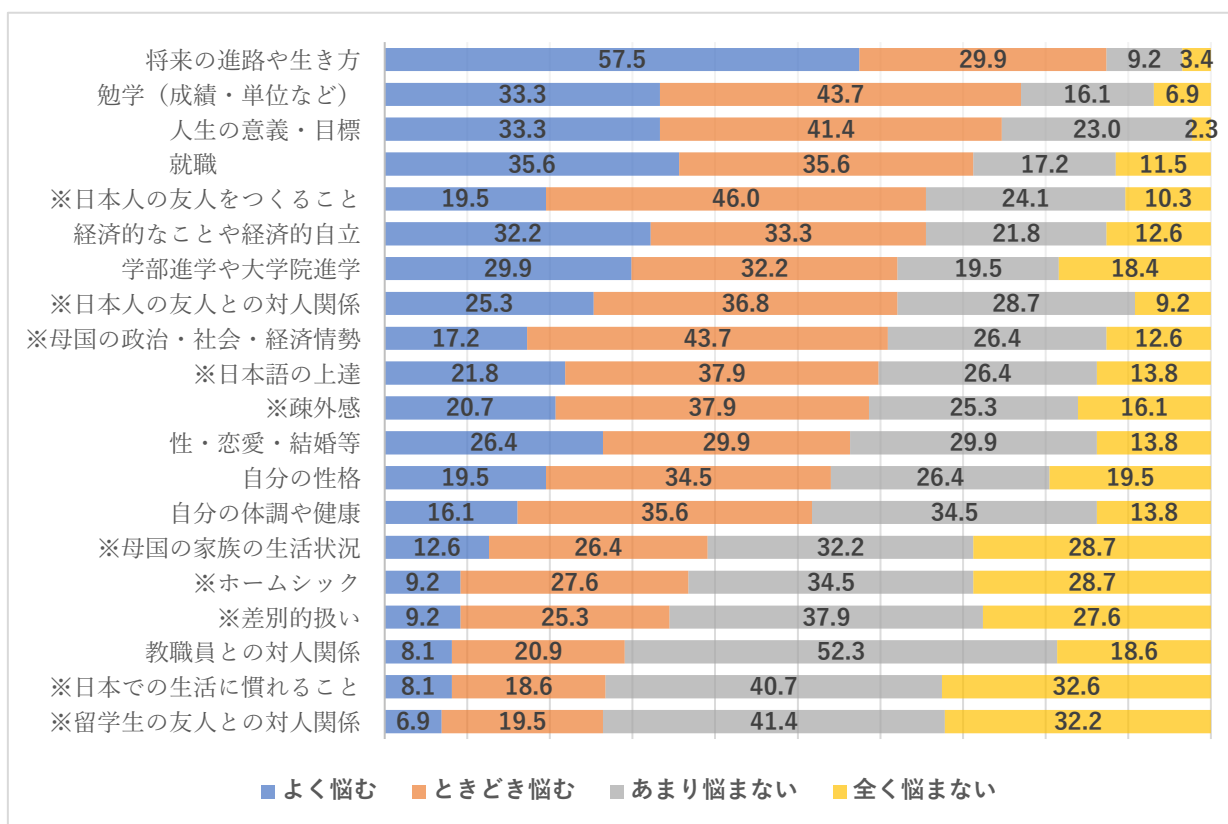
- 不安・悩みをもたらす上位3項目「将来の進路や生き方」、「就職」、「人生の意義・目標」
- 「人生の意義・目標」は前回調査より増加

14. 現在の学生生活の中で、次の各項目について、どの程度悩んだり不安を感じたりしていますか。



悩みや不安に関して、「よく悩む」「ときどき悩む」の合算値が多い項目は「将来の進路や生き方」（前回調査 81.2%、今回調査 84.9%）、「就職」（前回調査 72.0%、今回調査 73.6%）、「人生の意義・目標」（前回調査 59.4%、今回調査 66.4%）などが挙げられた。「人生の意義・目標」が前回調査より 7.0%ポイント増加している以外は、概ね前回同様の傾向である。逆に「教職員との対人関係」、「自分の体調や健康」、「友人との対人関係」などは悩むことが少ない。ただし、12項目のうち8項目は半数以上が「よく悩む」「ときどき悩む」と回答していることには留意が必要である。

## 【留学生 不安や悩みの程度】



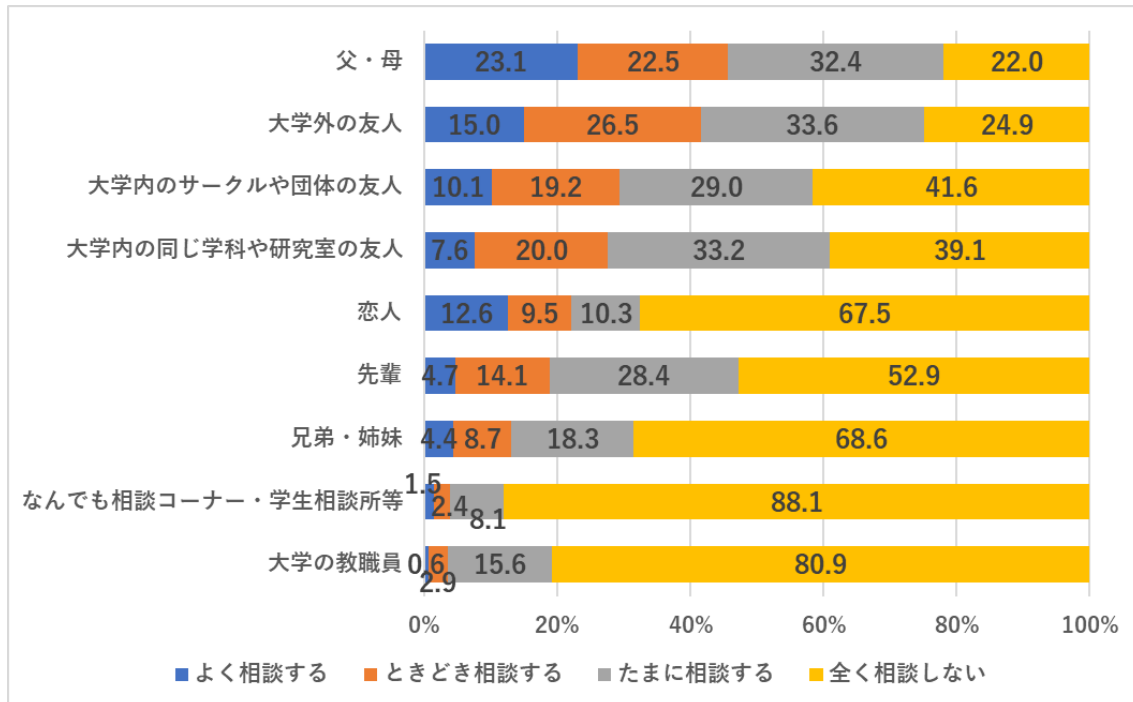
## ※留学生独自項目

留学生の回答のうち、最も不安や悩みの頻度が高かったのは、「将来の進路や生き方」であり、9割近くが、「よく悩む」「ときどき悩む」と回答した。将来に関わることなどが悩みを中心となることは、日本人学生等とも共通しているが、「勉学」に関しては、留学生のほうがより頻繁に、悩んでいる結果となった。教育のスタイルの変化や異なる言語環境に適応しながら学習を進めていくため、より学業の負荷がかかりやすいことを反映しているといえるだろう。留学生独自項目に関しては「友人をつくること」と「日本人の友人との対人関係」が上位に入った。友人作りは、「よく悩む」内容ではないものの、「ときどき悩む」学生が46%となっており、留学体験を構成する重要な要素となっていると考えられる。

## 15. 悩みの相談相手

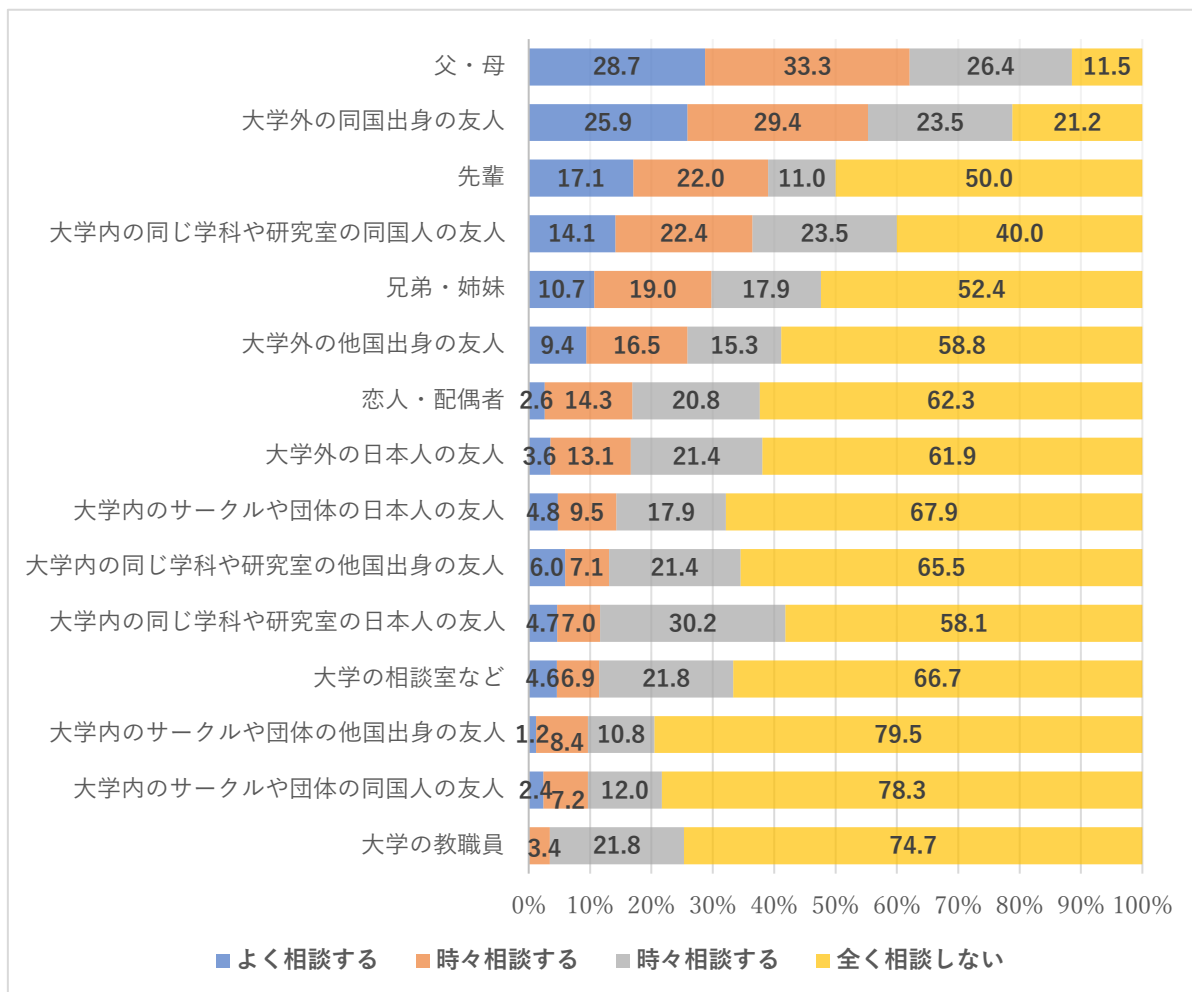
- 悩みの相談相手「父・母」、「大学外の友人」、「大学内のサークルや団体の友人」
- 「大学外の友人」が前回調査より増加、「大学内のサークルや団体の友人」が減少

15. あなたは、不安や悩みを感じたとき、だれと相談したり、話し合ったりしますか。



不安・悩みを「よく相談する」「ときどき相談する」相手は「父・母」（前回調査 44.0%、今回調査 45.6%）、「大学外の友人」（前回調査 36.1%、今回調査 41.5%）、「大学内のサークルや団体の友人」（前回調査 36.7%、今回調査 29.3%）が上位 3 項目を占める。「大学外の友人」が前回調査より 5.4%ポイント増加し、「大学内のサークルや団体の友人」が 7.4%ポイント減少している。

## 【留学生 悩みの相談相手】

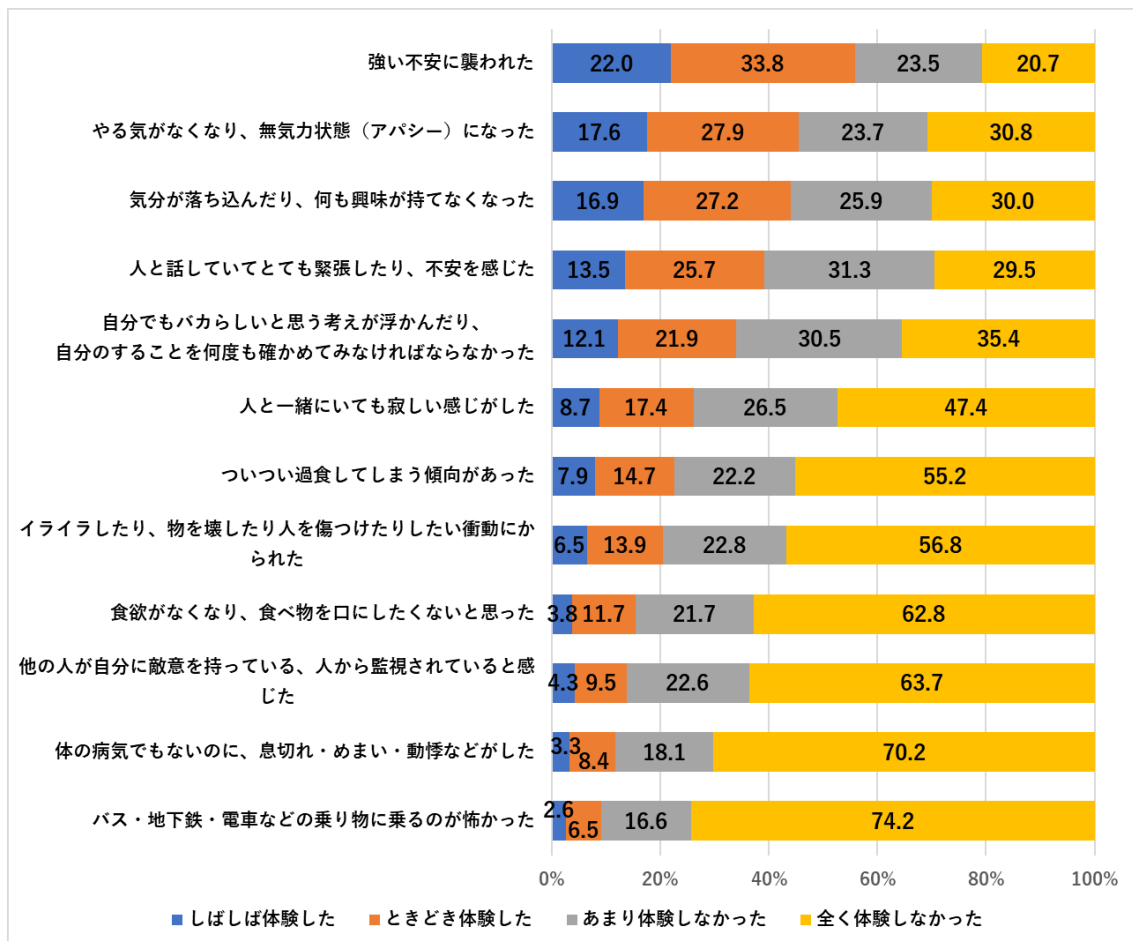


悩みの相談相手は、家族や親しい友人が中心となる点は、日本人学生等と共通している。大学の相談室を頻繁に利用する学生は限られると考えられるが、日本人学生等の 88.1% が相談施設には「全く相談しない」のに対して、留学生は 66.7% であり、「時々相談する」学生までを含めると、3 割強の学生は、相談施設を利用していることになる。また、身近な相談相手の中でも、同国人や他国出身の友人のほうが、日本人の友人よりも頻繁に相談する傾向はかねてからみられるものの、特に 70 回調査において強まっており、「大学内の同じ学科や研究室の日本人の友人」に「よく相談する」「時々相談する」と回答した学生は、前回調査の 28.7% から、11.6% へと減少した。コロナ禍で通学が困難になったことや、一部学生は入国が遅れた/できなかったことなどによって、日本人学生との関係形成や関係の維持が進まなかったものと考えられる。

## 16. メンタルヘルスの状態

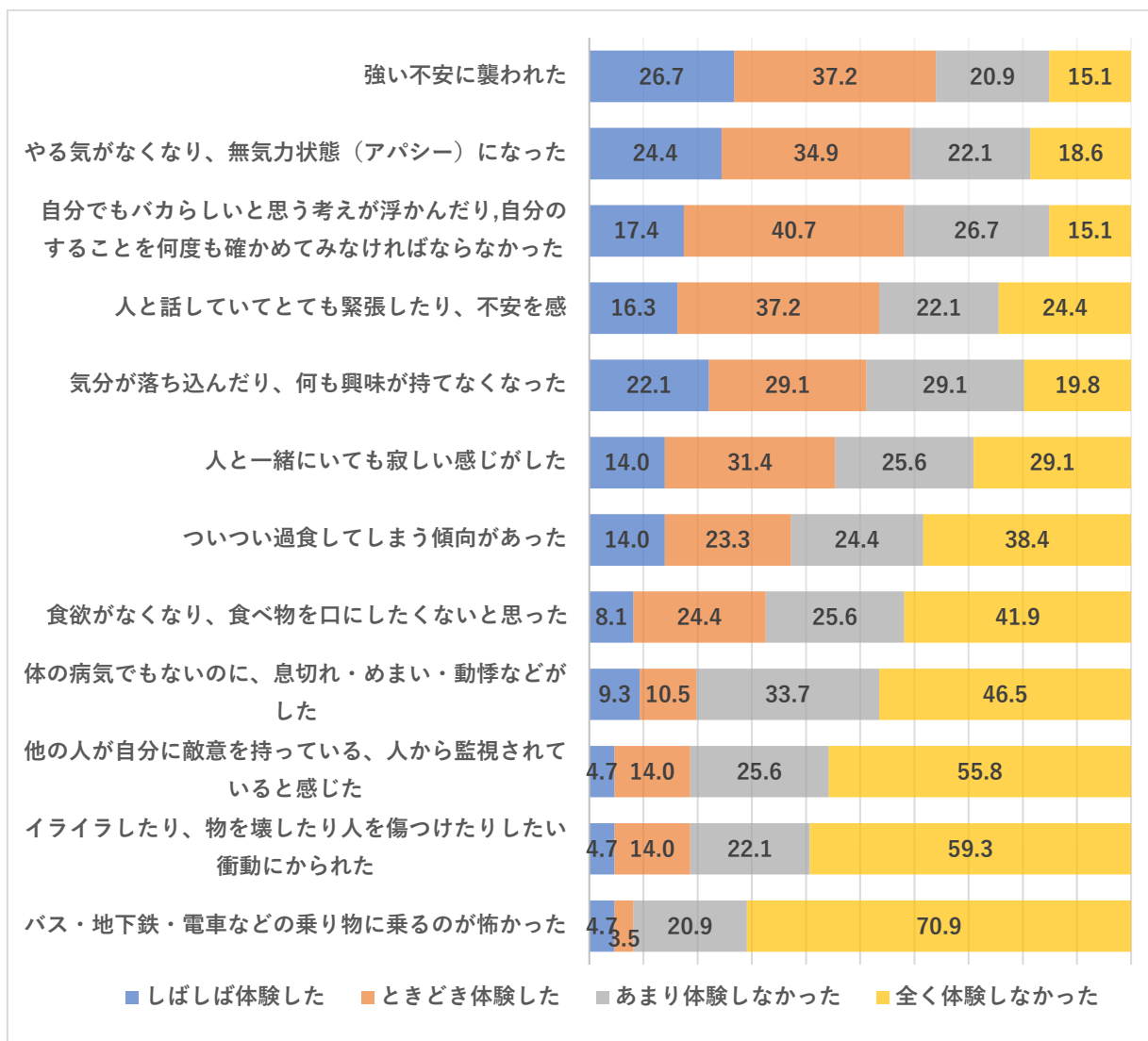
- 心の悩み上位3項目「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」
- 上位3項目は前回調査より9～10%ポイントの増加

16. あなたは、最近6ヶ月の間に次の項目について、体験したり悩んだりしましたか。



メンタルヘルスの不調を「しばしば体験した」「ときどき体験した」と回答した項目として、「強い不安に襲われた」（前回調査 46.6%、今回調査 55.8%）、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」（前回調査 35.4%、今回調査 45.5%）、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」（前回調査 35.0%、今回調査 44.1%）が挙げられた。上位3項目のすべてで、前回調査と比べて体験した割合が増加している。「強い不安に襲われた」者は前回調査より9.2%ポイント、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」者は10.1%ポイント、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」者は9.1%ポイントそれぞれ増加している。なお、上記項目以外に5%ポイント以上の増加が見られる項目はない。

【留学生 メンタルヘルスの不調】



6 か月の間に体験したメンタルヘルスの不調として、日本人学生等の回答と比較すると、ほとんどすべての項目で、留学生のほうが高い頻度で、不調を体験していた。さらに、70 回調査は、新型コロナウイルス禍での調査実施であったが、前回調査と比較すると、「しばしば体験した」「ときどき体験した」と回答した学生の割合は、「強い不安に襲われた (58.1%→64.0%)」「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった (48.8%→59.3%)」「人と話していても緊張したり、不安を感じた (41.9%→53.5%)」「食欲がなくなり、食べ物を口にしたくないと思った (19.8%→32.6%)」と増加がみられる。なお「気分が落ち込んだり、何にも興味が持てなくなった (50.6%→51.2%)」に関しては、前回から大きく増加しているわけではないが、半数の学生が不調体験を報告している。



## 「IV. 不安・悩み」の分析

不安や悩みを感じる項目は「将来の進路や生き方」、「就職」、「人生の意義・目標」などが挙げられ、短期的・長期的な人生の歩みに関する悩みを抱えていた。また、12項目中8項目では半数以上が「よく悩む」「ときどき悩む」と回答しており、多くの学生が悩みを抱えていることがわかる。また、悩みの相談相手は「父・母」、「大学外の友人」、「大学内のサークルや団体の友人」が挙げられ、相談施設や大学の教職員よりは身近な友人や両親に相談する傾向にあることが分かる。前回調査と比べて、「大学外の友人」が増加し、「大学内のサークルや団体の友人」が減少しており、学外の人間関係に頼る傾向が顕著になっている。

心の悩みは、前回調査と比べて大きく増加している項目が見られた。「強い不安に襲われた」、「やる気がなくなり、無気力状態（アパシー）になった」、「気分が落ち込んだり、何も興味が持てなくなった」を経験した割合は前回調査と比べておよそ10%ポイントの差が見られる。

本調査が行われた2020年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、授業がオンラインへ移行し、課外活動も大きく制限されるなど、学生生活が大きく変化した。悩みの相談相手に関する回答からは、学内での対人関係の構築・維持が難しくなり、援助資源としての学内の友人関係が乏しくなったことが見てとれる。また、例年は大きな変化が見られない心の悩みについても、前回調査と比べて悪化している項目があり、コロナ禍の中で学生のメンタルヘルスが悪化したことを示唆していると考えられる。

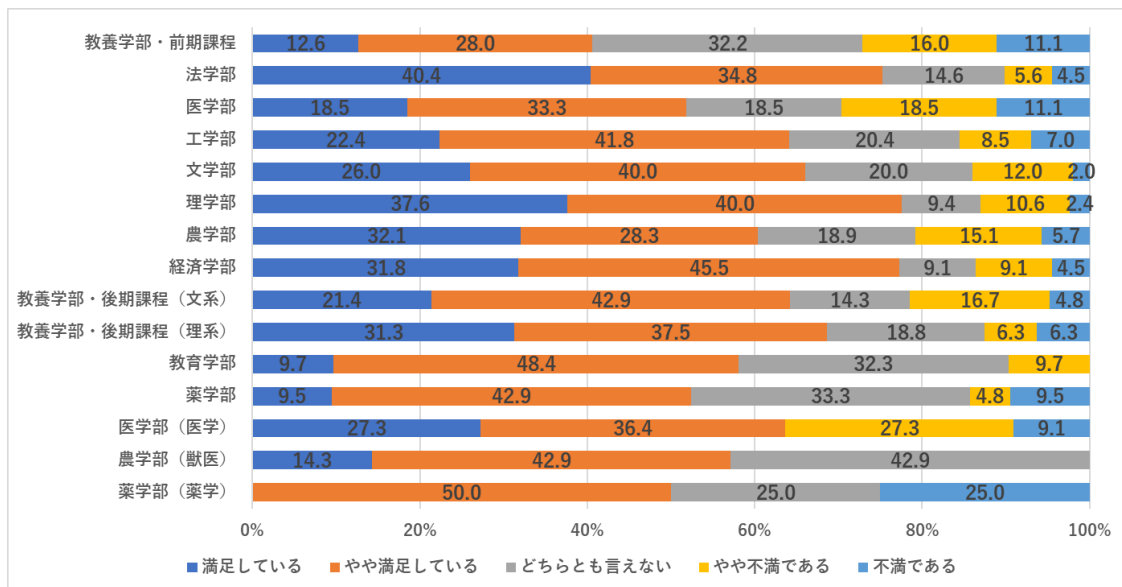
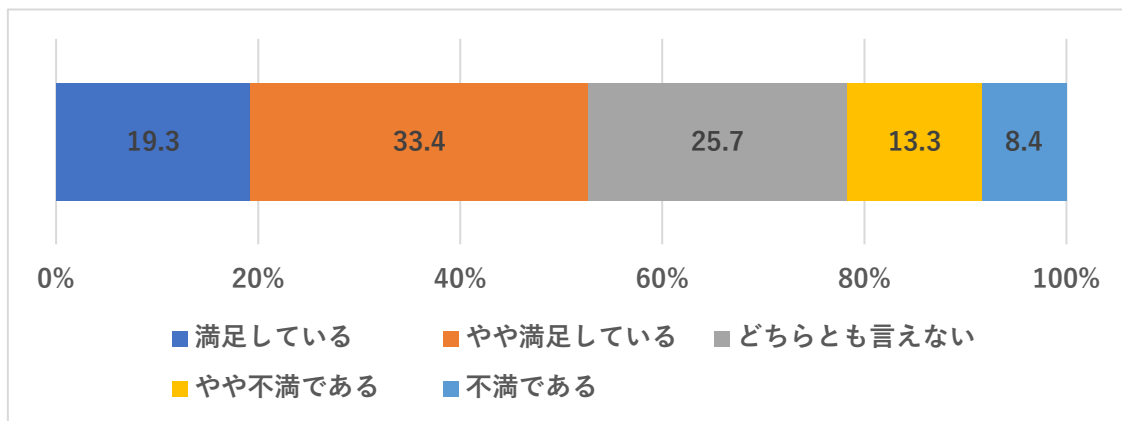
また、こうした影響は、特に留学生により強く生じている。これまでも、留学生のほうが日本人学生等よりも、メンタル不調の体験頻度が高く、社会的資源が不足する中で、将来に向けた準備をしながら、学業のプレッシャーに対峙する留学生活は、ストレスの高いものであると考えられる。加えて、感染症拡大防止のための出入国の制限や、情報の不足する中で感染の拡大等、さらにキャンパスで人間関係を深める機会を失ったことなどは、留学生のメンタルヘルスに強く影響を及ぼしたことが考えられる。

## V.新型コロナウイルス感染症の影響

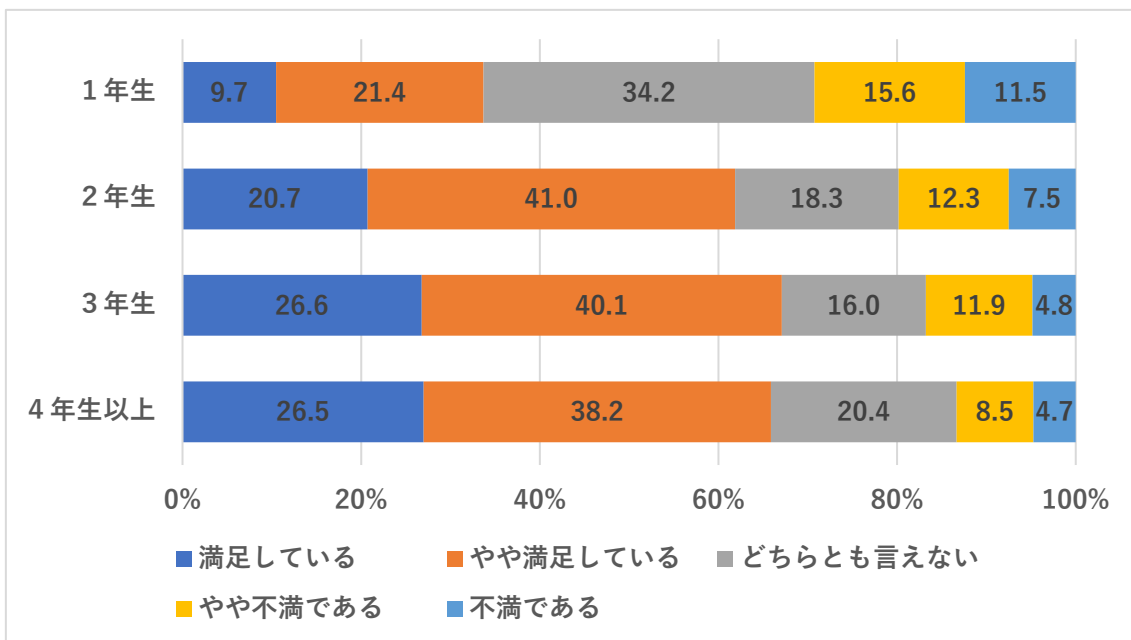
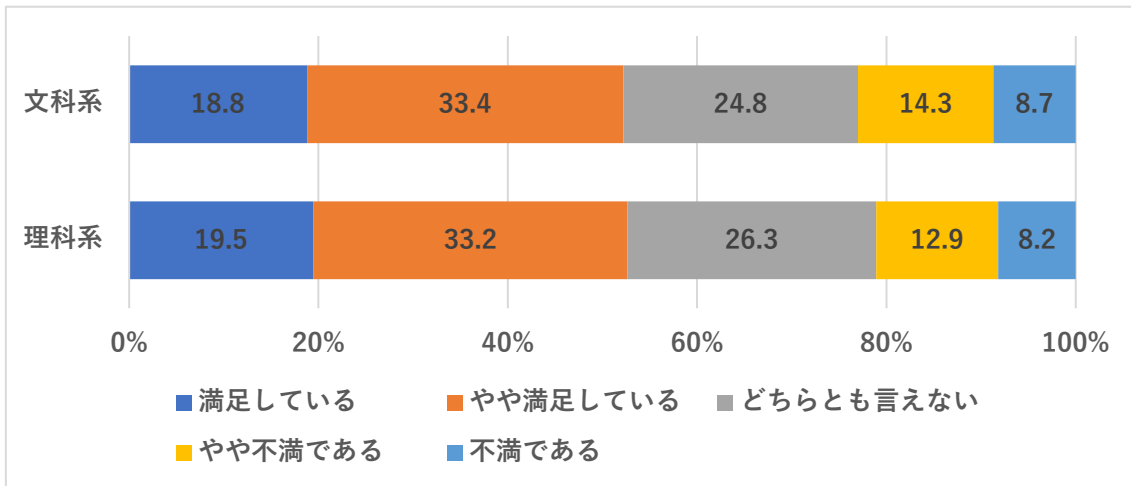
### 17. オンライン授業満足度

- 半数以上はオンライン授業に満足
- 1年生の満足度が低く、2年生以上と30%ポイントの差

17. オンライン授業に満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。

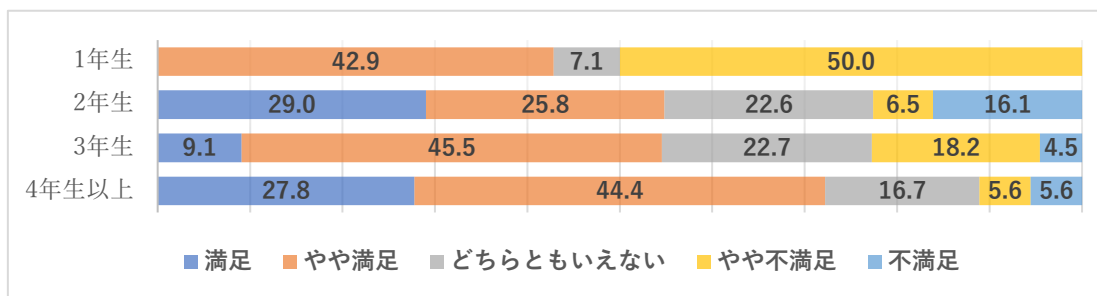


教養学部・前期課程を除き、いずれの学部でも半数以上はオンライン授業に満足している。しかし、教養学部・前期課程では満足度は40.6%と50%を下回り、「やや不満である」「不満である」の合計値は医学部を除いて27.1%と最も高い。ある程度の対人交流を経験した上でのオンライン授業は受け入れられているものの、後述するように新入生の満足度は低い。



文科系と理科系で満足度に大きな違いは見られないものの、年次では違いが見られる。2年生から4年生以上は「満足している」「やや満足している」の合算値はそれぞれ61.7%、66.7%、64.7%であったものの、1年生は31.1%と、30%ポイントの差が見られる。ただし、たしかに不満度（「やや不満である」「不満である」の合算値）は2年生以上に比べて高いものの、「どちらともいえない」が34.2%と、2年生以上と比べておよそ15%ポイントの差がみられる。

### 【留学生 オンライン授業への満足度】

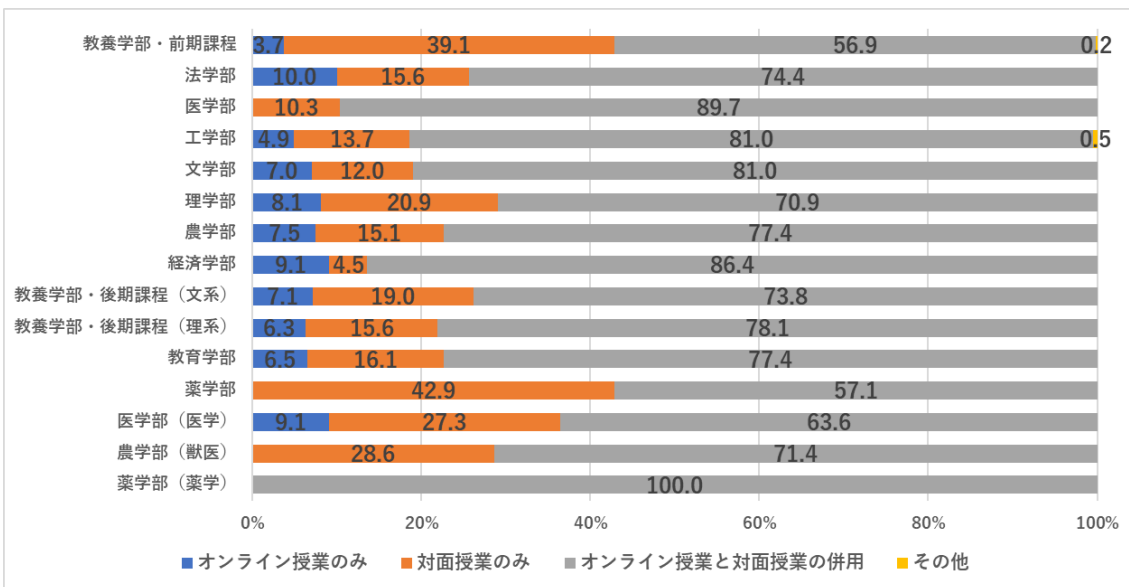
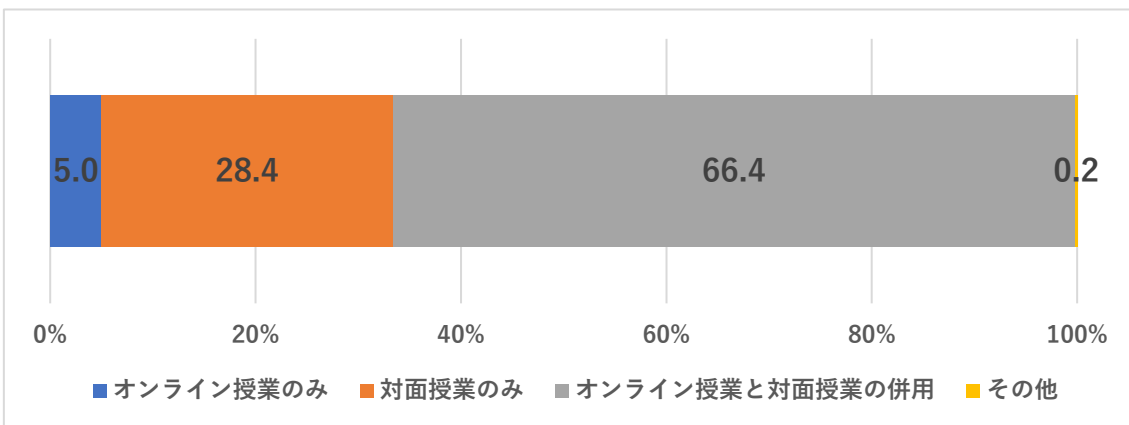


留学生のオンライン授業への満足度は、特に1年生で「満足」と回答した学生がおらず、不満足度が高い。年次の低い学年での不満足の高さは、基本調査の結果とも一致する。一方、「やや満足」と回答した学生は、日本人学生等よりも多く、1年生でも4割を超える。このことは、出入国の制限等の状況があり、オンライン授業が実施されたことで、授業が受講できた学生が存在することや、感染の危険性への高い不安等を反映していると考えられる。3年生で、「満足」と回答した学生が、基本調査の結果と比較すると少ないことは、専門への進学によって新たに人間関係を構築することが、留学生の方がより難しく、後期課程への進学とオンライン授業が重なったことによって、孤立した状況が生まれたことなどが要因として考えうる。

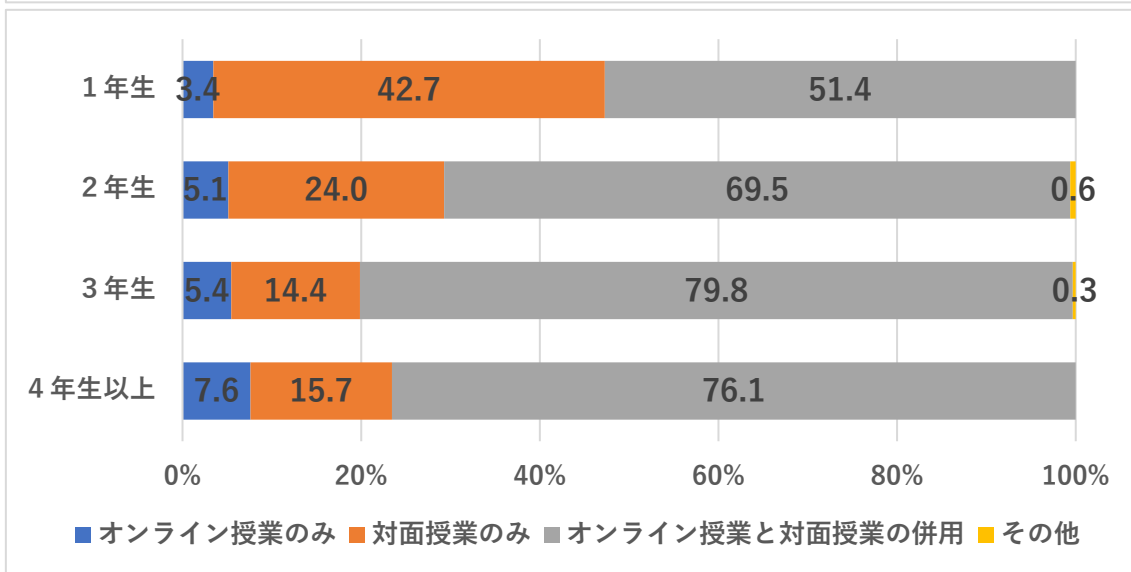
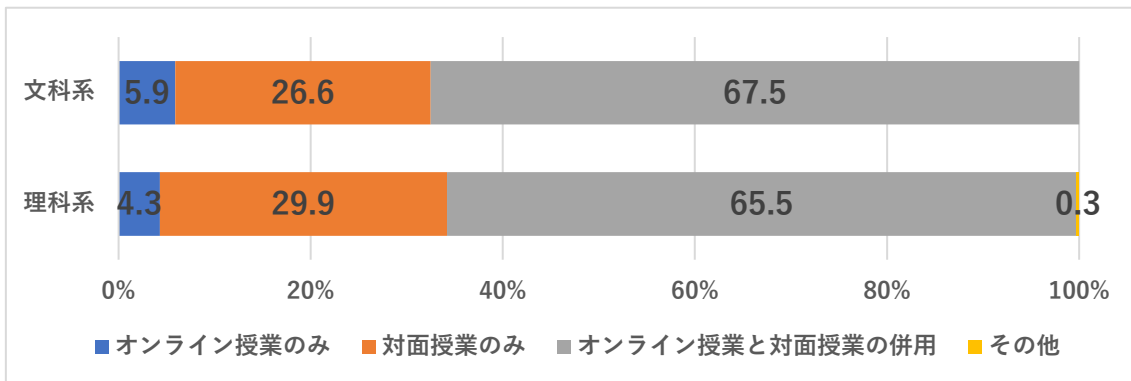
## 18. コロナ収束後の希望授業形態

- 新型コロナウイルス収束後の授業形態「オンライン授業と対面授業の併用」が最も多い
- 1年生のおよそ40%は「対面授業のみ」を希望

18. 新型コロナウイルス感染症が収まり、感染の心配がなくなったとしたら、あなたはどの授業形態を希望しますか。あてはまるものを1つ選んでください。



新型コロナウイルス収束後の授業形態は「オンライン授業と対面授業の併用」が最も希望されており、66.4%であった。学部別にみても傾向は大きくは変わらず、60~80%程度が「オンライン授業と対面授業の併用」を希望していた。教養学部・前期課程が「オンライン授業と対面授業の併用」を希望する割合が最も低く、56.9%であった。



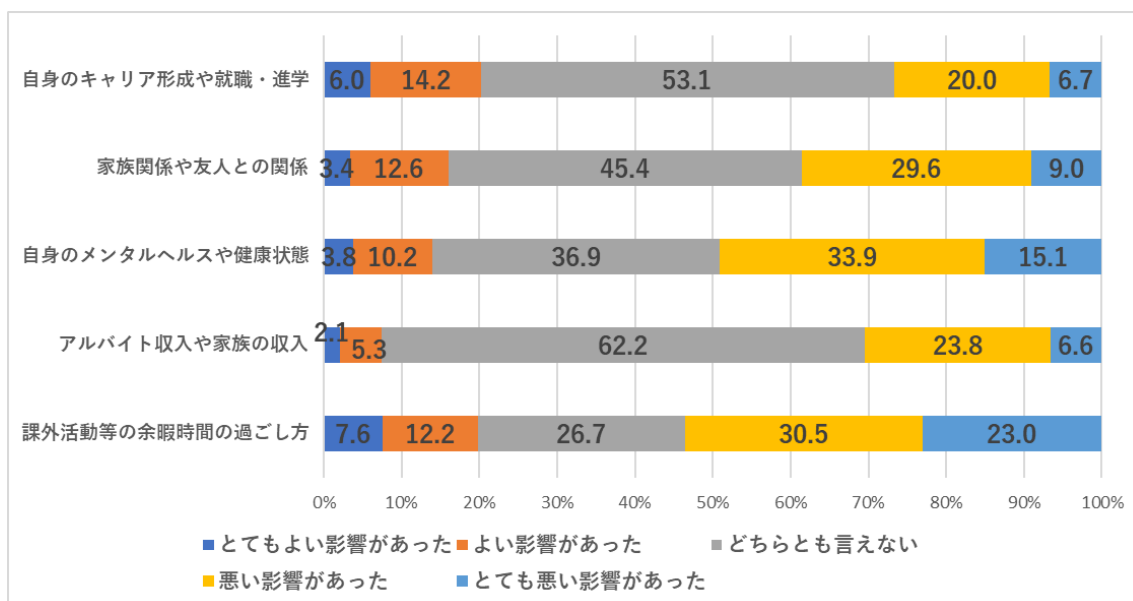
文科系と理科系とで新型コロナウイルス収束後の授業形態希望に差が見られなかったものの、年次によっては差が見られた。1年生は「オンライン授業と対面授業の併用」を希望する割合が最も低く、「対面授業のみ」が最も高い。概して、1年生は対面授業を強く望んでいる傾向にある。

留学生は、希望する授業形態として、「オンライン授業のみ」11.9%、「対面授業のみ」32.1%、「併用」56.0%を選択した。日本人学生よりも「併用」を選択した学生が少ないが、入国できていない学生にとっては、併用は参加が困難なオプションであることが、要因として考えられる。

## 19. 活動制限による影響

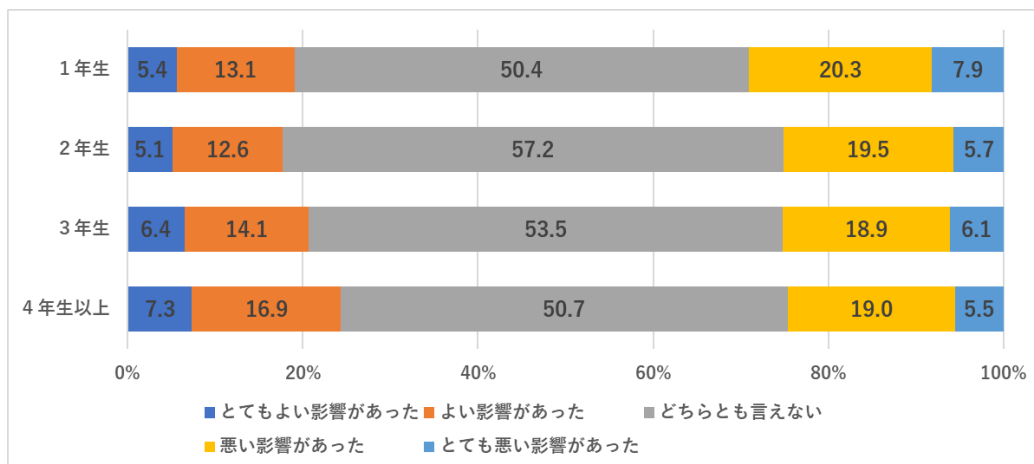
- 活動制限で悪い影響があった項目「課外活動等の余暇時間の過ごし方」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」、「家族関係や友人との関係」

19. 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限は、あなたの生活にどのような影響を及ぼしていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

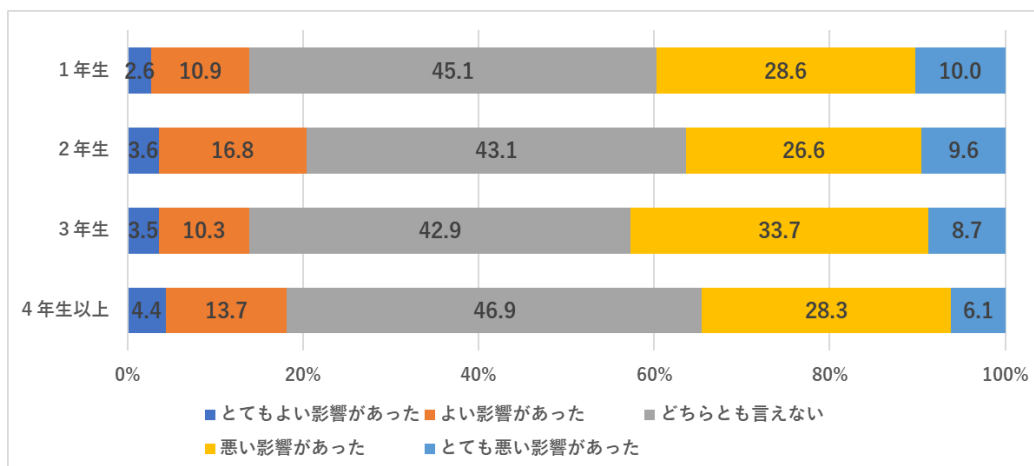


新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う制限は、学生生活に良い影響を及ぼしたとはいえない。各項目に関して「とてもよい影響があった」「良い影響があった」と回答した割合はせいぜい20%程度であり、多くは「どちらともいえない」もしくは「悪い影響があった」と回答している。「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」の合算値は「課外活動等の余暇時間の過ごし方」が53.5%で最も多く、「自身のメンタルヘルスや健康状態」49.0%、「家族関係や友人との関係」38.6%と続く。

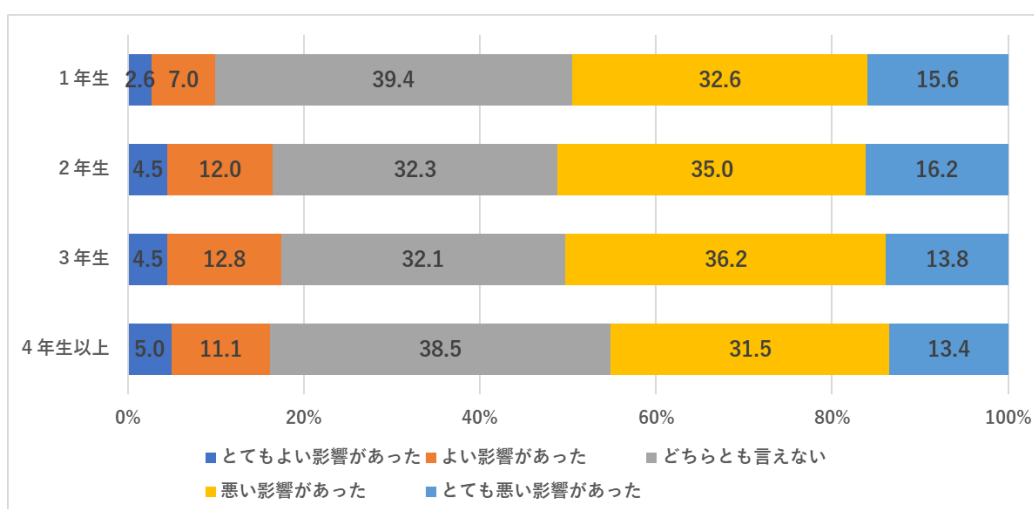
### 自身のキャリア形成や就職・進学



### 家族関係や友人との関係

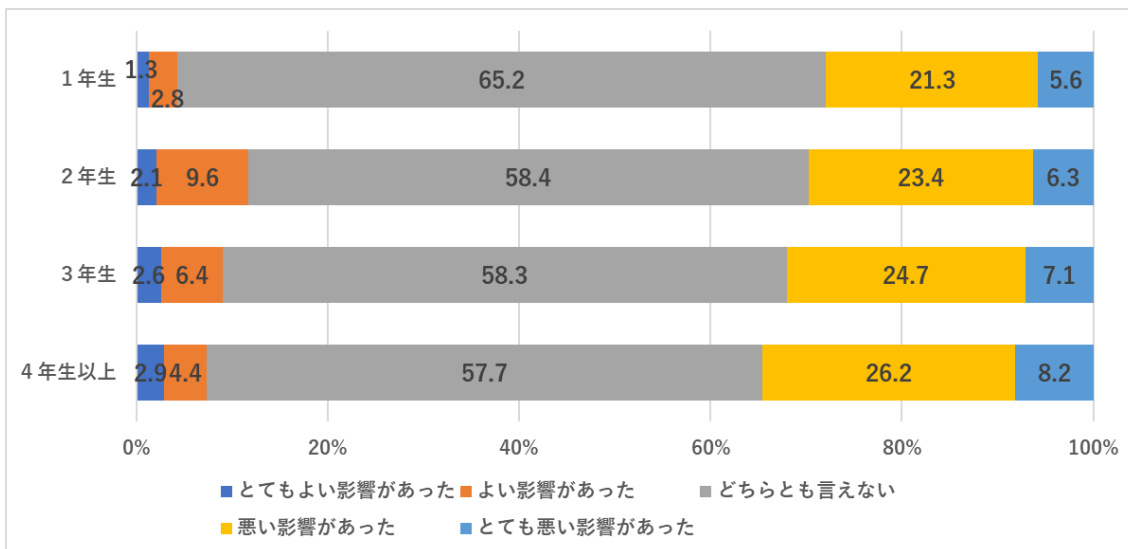


### 自身のメンタルヘルスや健康状態

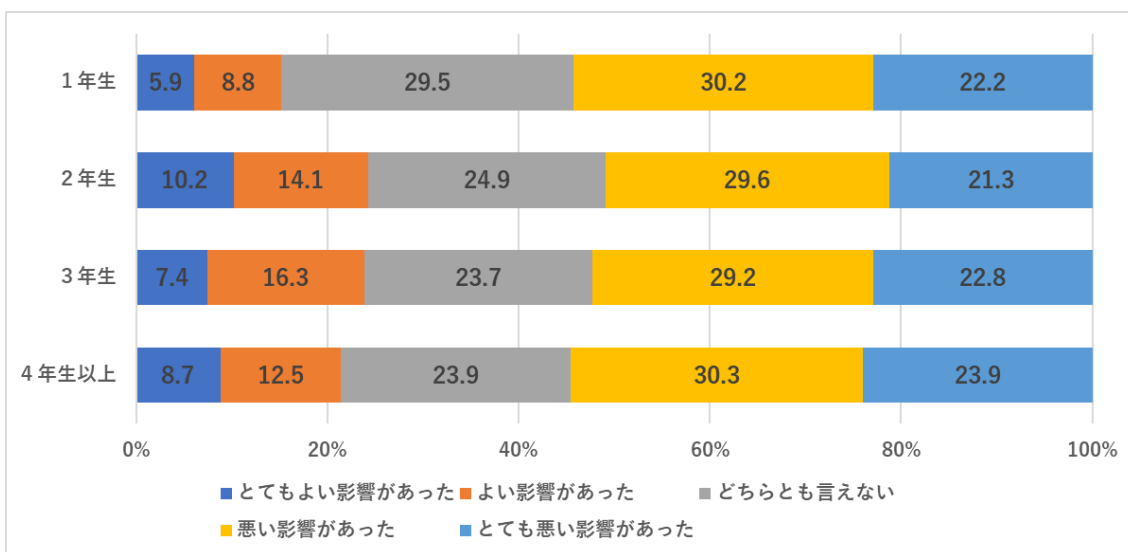




### アルバイト収入や家族の収入

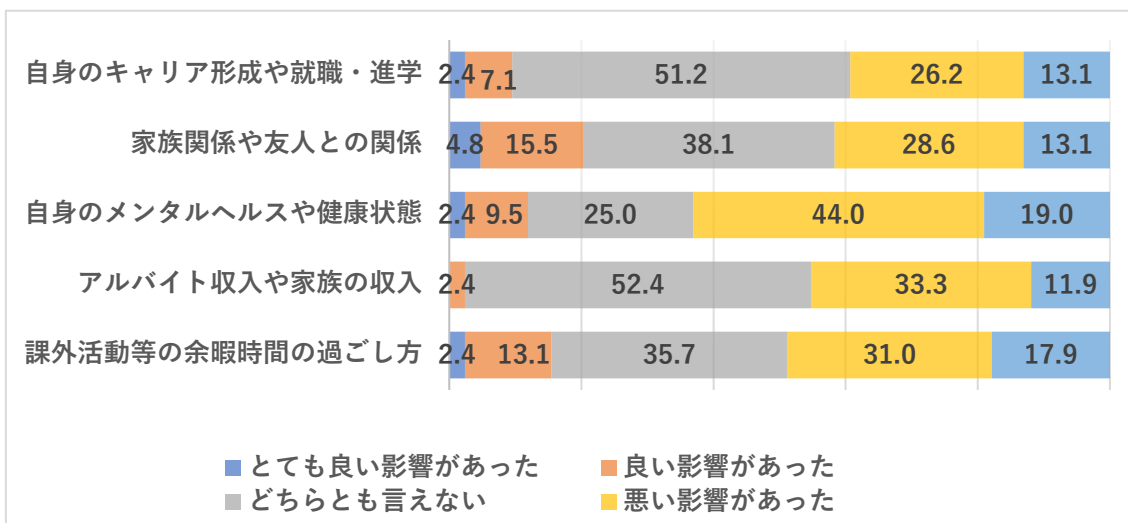


### 課外活動等の余暇時間の過ごし方



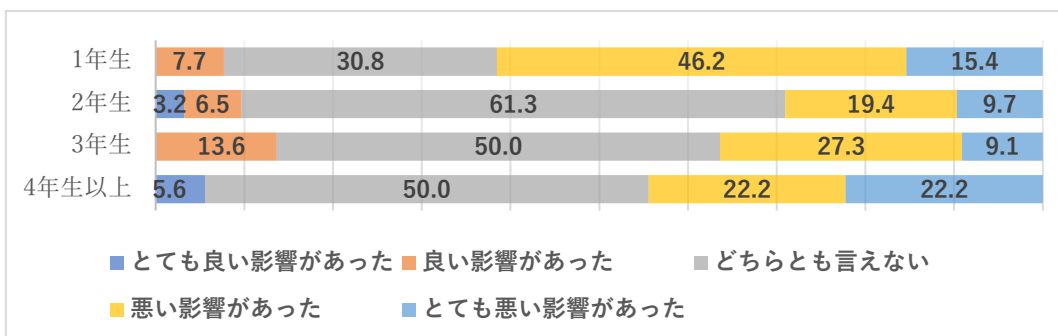
学年によって新型コロナウイルス感染症の流行に伴う各種制限の影響に差がある項目、ない項目がある。例えば、「家族関係や友人との関係」に対する影響は1年生および3年生で悪影響があると回答したものがわずかに多く、2年生および4年生以上でどちらかといえ少くない。進学や学部の配属に伴う友人関係の広がりが十分になされなかったことなどが考えられる。「アルバイト収入や家族の収入」や「課外活動等の余暇時間の過ごし方」は特に1年生で「どちらともいえない」と回答した割合が多い。1年生はアルバイトを始めるかどうか、課外活動を行うかどうかという加入段階での制約となってしまったため、影響を見積もることができないことが理由に挙げられる。

【留学生 活動制限による影響】

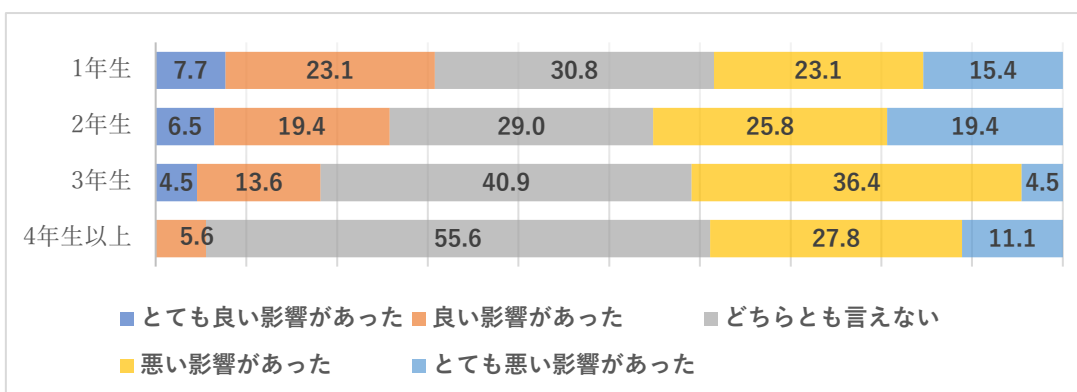


メンタルヘルスへの悪い影響を報告した学生は6割を超えており、日本人学生等と比較しても、悪影響が強く認識されている。また課外活動等に関する影響についても、15%程度は肯定的に評価している学生はいるものの、半数以上は悪影響を感じている。

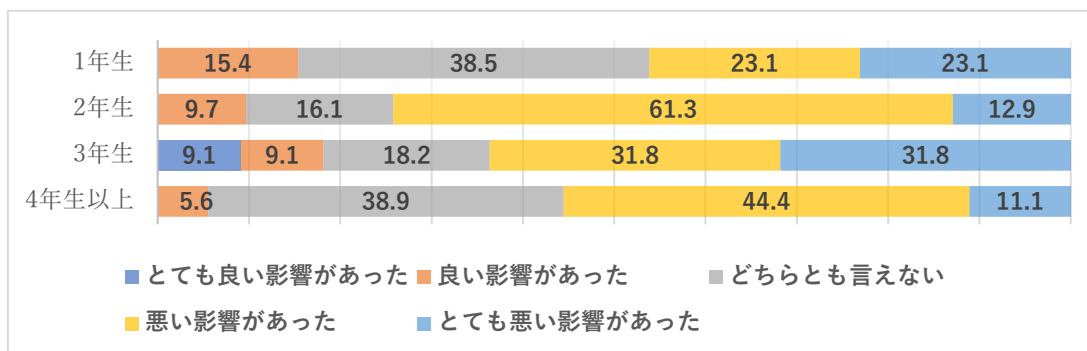
【留学生 キャリア形成や就職・進学】



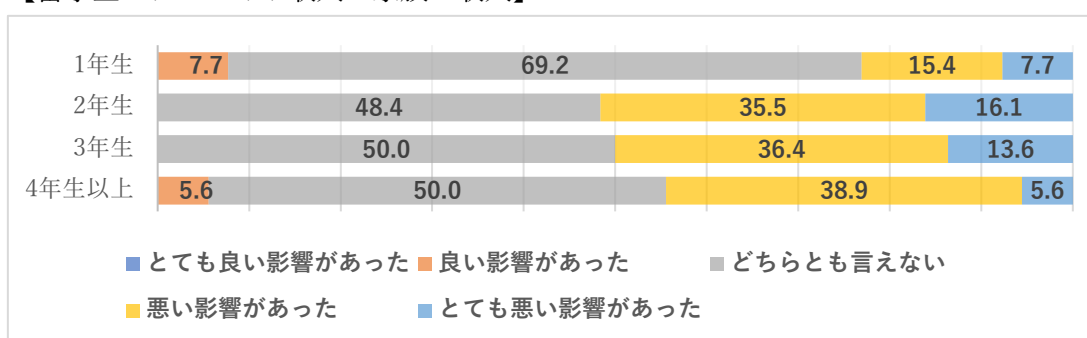
【留学生 家族・友人関係】



【留学生 メンタルヘルス・健康状態】



【留学生 アルバイト収入・家族の収入】



学年ごとにみると、1年生は、キャリアや進学に関して否定的な影響を報告しているが、アルバイトや余暇活動等へのマイナスの影響はあまり認識されていない。また、家族や友人関係への肯定的な影響を上げている学生の割合が高く、健康面への影響は、ばらつきのある反応となっている。日本にいた学生と、母国の家族のもとで過ごしていた学生など様々であり、個々の学生のおかれた状況は様々であったと考えられるが、2年生以上のほうが、1年生よりもメンタルヘルスへの悪影響を報告している。

## 「V.新型コロナウイルス感染症の影響」の分析

2020年4月より本格的に流行した新型コロナウイルス感染症は学生生活に大きな影響をもたらした。東京大学においても、感染拡大防止のための活動制限指針に基づき、授業のオンライン化や課外活動の制限などが推奨された。新型コロナウイルス感染症で「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」項目は「課外活動等の余暇時間の過ごし方」、「自身のメンタルヘルスや健康状態」、「家族関係や友人との関係」であり、40～50%が悪い影響を被ったと回答していた。学年別にみると、特に1年生で「アルバイト収入や家族の収入」や「課外活動等の余暇時間の過ごし方」に影響があったかどうかは「どちらともいえない」と回答した割合が多いなど、学年によって若干の違いが見られたものの、概ね良い影響を受けているとはいえない結果であった。全体としては、「課外活動等の余暇時間の過ごし方」や「自身のメンタルヘルスや健康状態」という点で、悪い影響が出たと捉えられている。

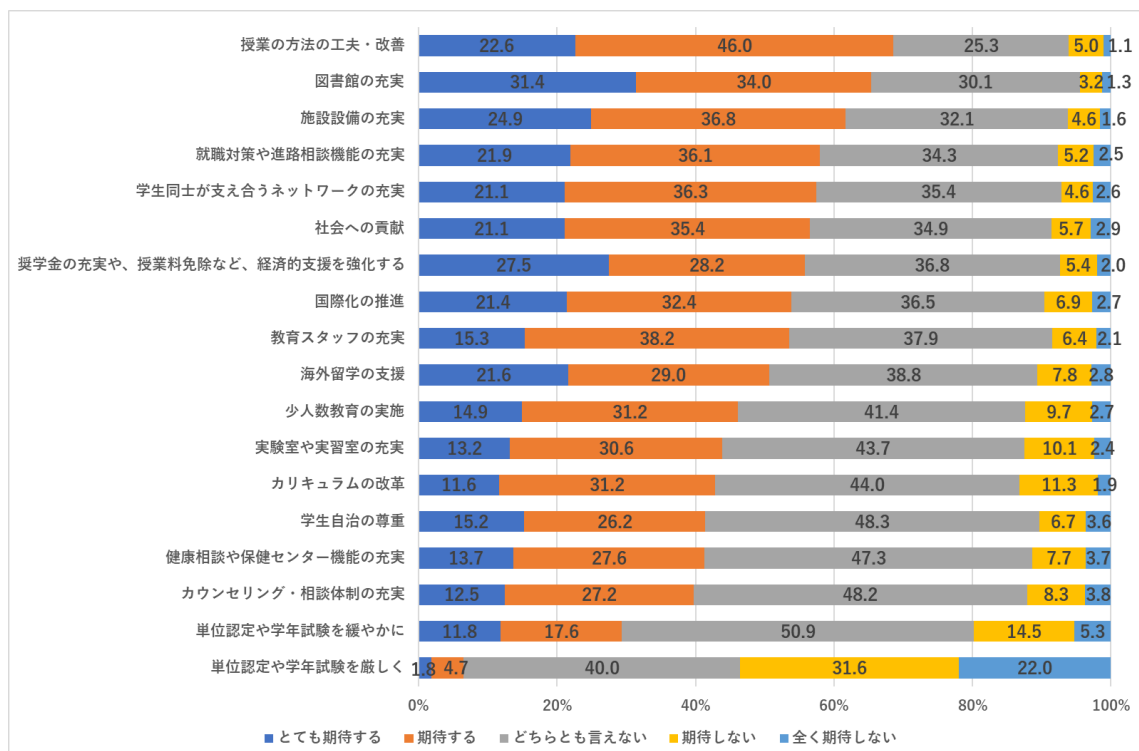
留学生は、2020年3月初旬から1年近く、新型コロナウイルス感染症による出入国の制限の中で学生生活を送っており、調査実施時は、新規入国に再度制限がかかった時期とも重なっている。学部留学生は、実数が少ないことから、細かな属性に分けて、パンデミック下でどのような影響が生じたかを分析していくには限界があるが、日本人学生等と同様のネガティブな影響が、より強く生じたと考えられる。特に2020年に入学した学生や、3年生に進学した学生等は、大学内のコミュニティを十分に築くことが出来ないまま、留学生生活が続ける状態となっており、今後感染が収まった後にも、影響は及ぶものと考えられ、大学側の支援体制が問われる。

## VI.大学への要望

### 20. 大学への要望・期待

- 大学に期待すること「授業の方法の工夫・改善」、「図書館の充実」、「施設設備の充実」
- 前回調査と比べて期待する割合は減少、「どちらともいえない」割合が増加

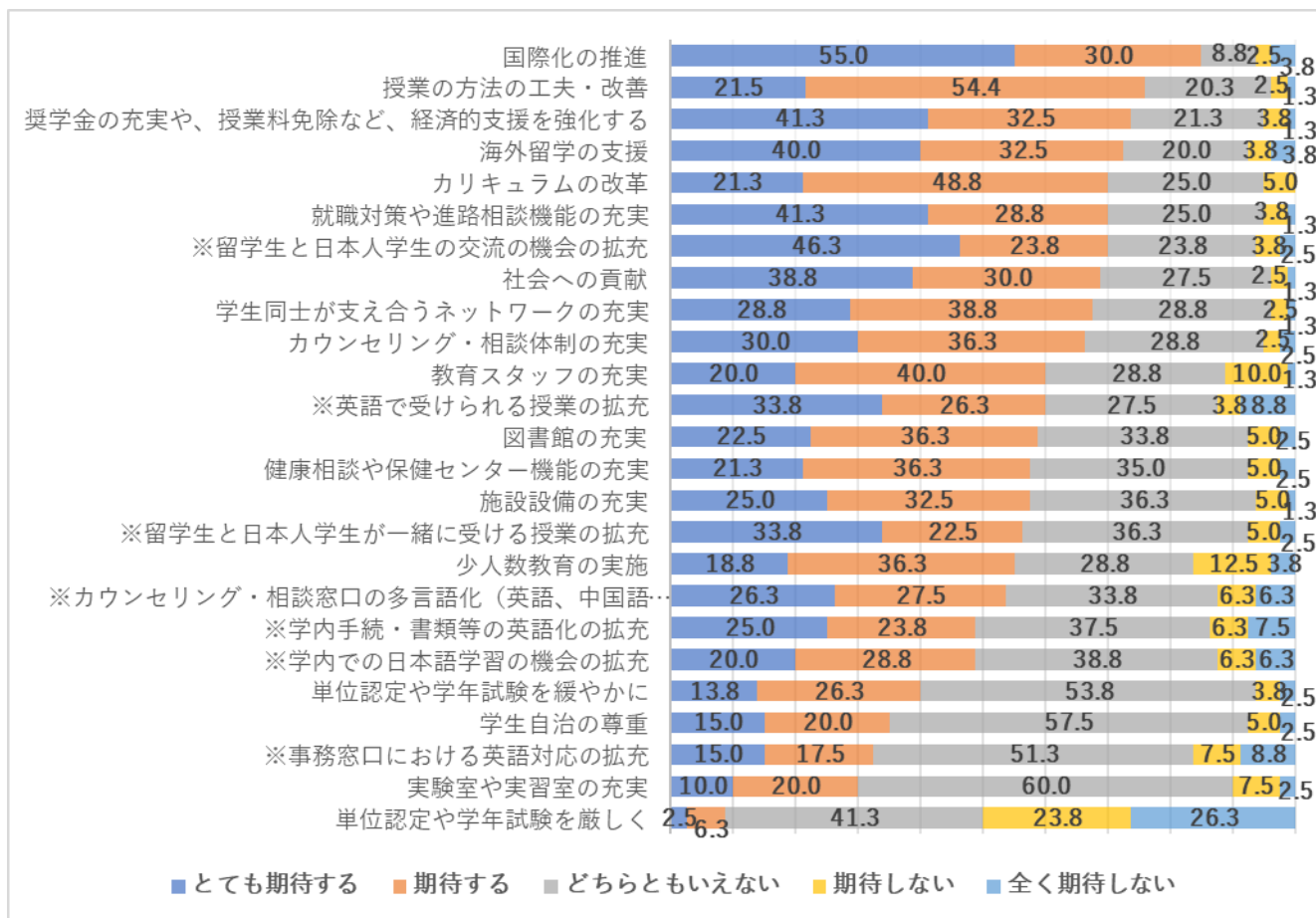
20. 大学へ特に要望したいことや期待することは何ですか。



大学への要望で「とても期待する」と「期待する」を合わせて最も多いのは、上から「授業の方法の工夫・改善」（前回調査 73.4%、今回調査 68.6%）、「図書館の充実」（前回調査 73.6%、今回調査 65.4%）、「施設設備の充実」（前回調査 74.5%、今回調査 61.7%）であった。各項目で期待する割合は減少しており、「授業の方法の工夫・改善」は 4.8%ポイント、「図書館の充実」は 8.2%ポイント、「施設設備の充実」は 12.8%ポイントの減少が認められた。その分、各項目ともに「どちらともいえない」割合が上昇しており、キャンパスへの通学を所与として享受できる図書館などの施設設備に対して、具体的な評価を下すことが難しいことが示唆される。

## 【留学生 大学への要望・期待】

### ※留学生独自項目



「授業の方法の工夫・改善」「カリキュラムの改革」などは期待が高く、授業履修を中心とした学部留学生の強い関心領域といえる。また、日本語力の高い学生が多いことから、事務対応等に関しては、英語化を期待する割合は低いが、「英語で受けられる授業」への期待は強い。

さらに、コロナ禍でキャンパスに立ち入ることができなかったことによって、「図書館の充実」（前回調査 8 位→今回 13 位）「施設設備の充実」（前回 5 位→今回 15 位）「実験室や実習室の充実」（前回 15 位→今回 24 位）など、施設面への期待順位が低下していることは、基本調査と同様の結果といえる。一方で、「学生同士支えあうネットワーク」（前回 13 位→今回 9 位）「キャンパスにおける交流機会」（前回 12 位→今回 7 位）や、「相談施設等の拡充」（前回 18 位→今回 10 位）に対する要望割合が高まっており、自粛生活が続く中での、対人的つながりや支援に対するニーズの増加がみられる。

## 「VI.大学への要望」の分析

大学への要望は「授業の方法の工夫・改善」、「図書館の充実」、「施設設備の充実」があげられたものの、全体的に期待すると回答した割合は減少し、どちらともいえないと回答した割合が増加した。

特筆すべきは「授業の方法の工夫・改善」が「施設設備の充実」や「経済的援助の拡充」を押しつけて「とても期待する・期待する」の最上位項目となったことである。コロナ禍により授業が対面からオンラインへ移行せざるを得なくなり、大学としても模索が続いたことの表れだろう。大学の各種施設やサービスは、入構制限や利用制限のため本来の機能を十分に果たせておらず、学生側も評価を留保せざるを得なかった傾向が伺える。

また、こうした結果は、概ね留学生にも共通して生じていた。

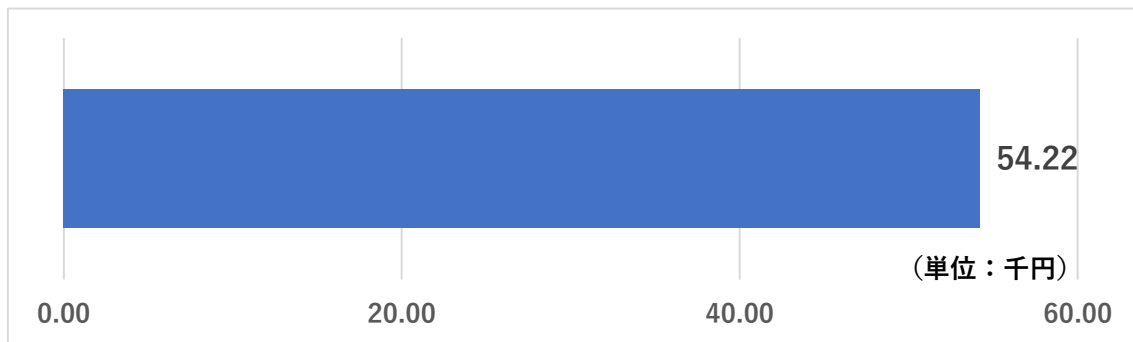
## Ⅶ. 生活費の状況

### 21. 収入・支出・預貯金

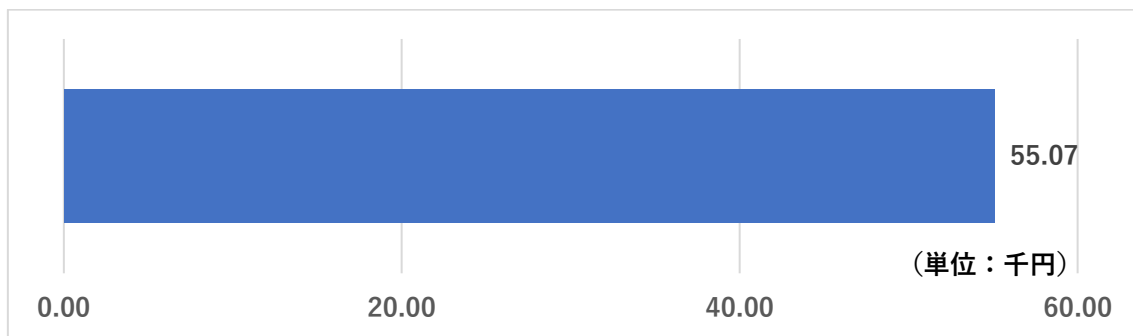
- 収入金額・支出金額ともに5万円台、前回調査より3万円減少し、過去最低金額
- 支出の内訳はいずれの項目でも減少したものの、構成比に大きな変化はなし

21. あなた自身の生活費の状況について、右の各欄に金額(単位:円)を記入してください。  
(最近3ヶ月の実績から、平均1ヶ月の収支額を、該当しない場合は「0」を記入してください。)

収入合計

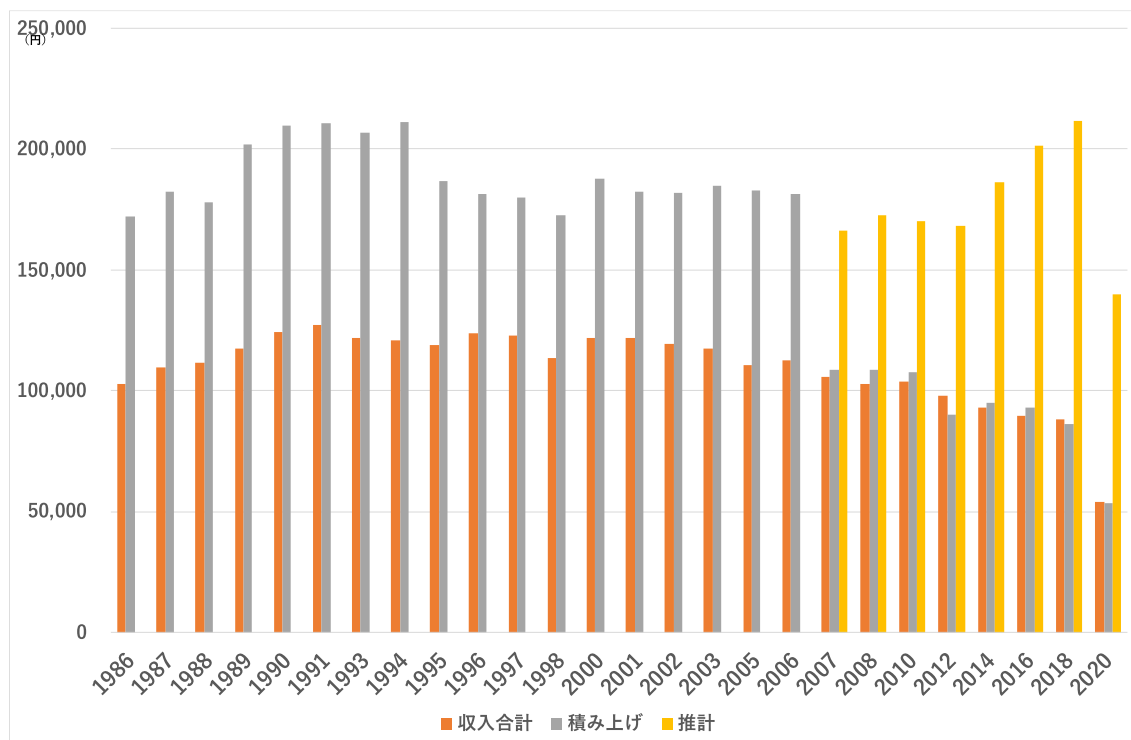


支出合計





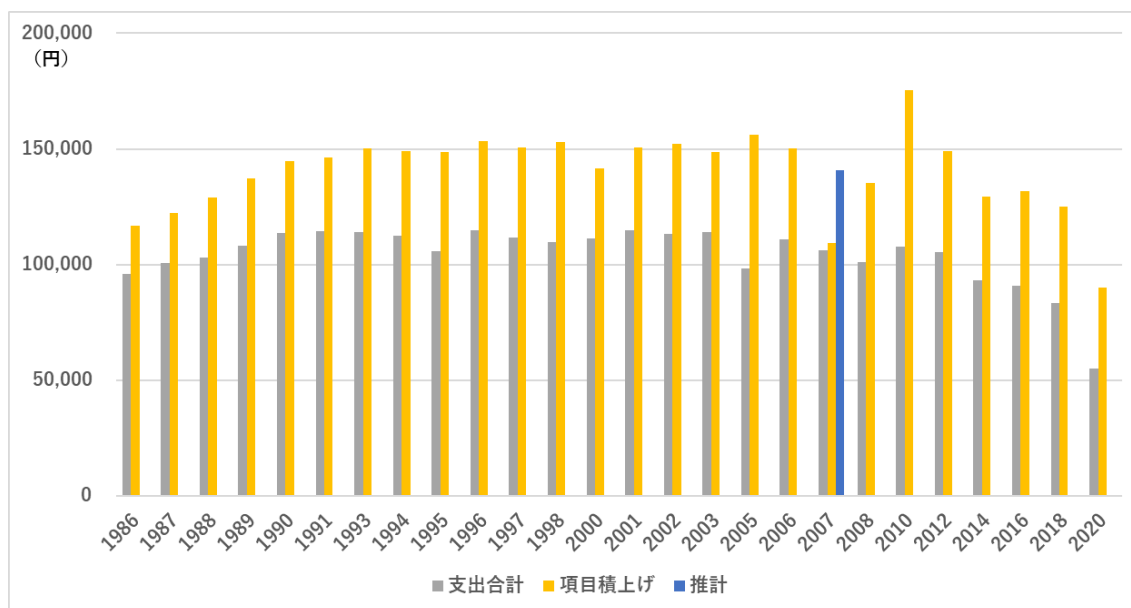
## 収入合計の経年変化



2006年までの調査では、各項目別の収入は該当者のみの平均額としていたが、2007年以降は全回答者の平均額に記載を変更したため、経年変化をみるグラフでは「推計」を出して補正している。

- 収入合計・・・「収入合計」全回答結果の平均額（2020年度調査では設問21（6））
- 積み上げ・・・「家庭からの仕送り・小遣い」「奨学金」「アルバイト・雑収入」「ローン・クレジット・借入金」「その他の収入」それぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計（2020年度調査では設問21（1）～（5））
- 推計・・・「奨学金」、「アルバイト・雑収入」、「ローン・クレジット・借入金」、「その他の収入」は、それぞれ該当者のみの平均額を計算し、「家庭からの仕送り・小遣い」は全体の平均額のままとし、これを合計した推計値を推計額としている。

## 支出合計の経年変化

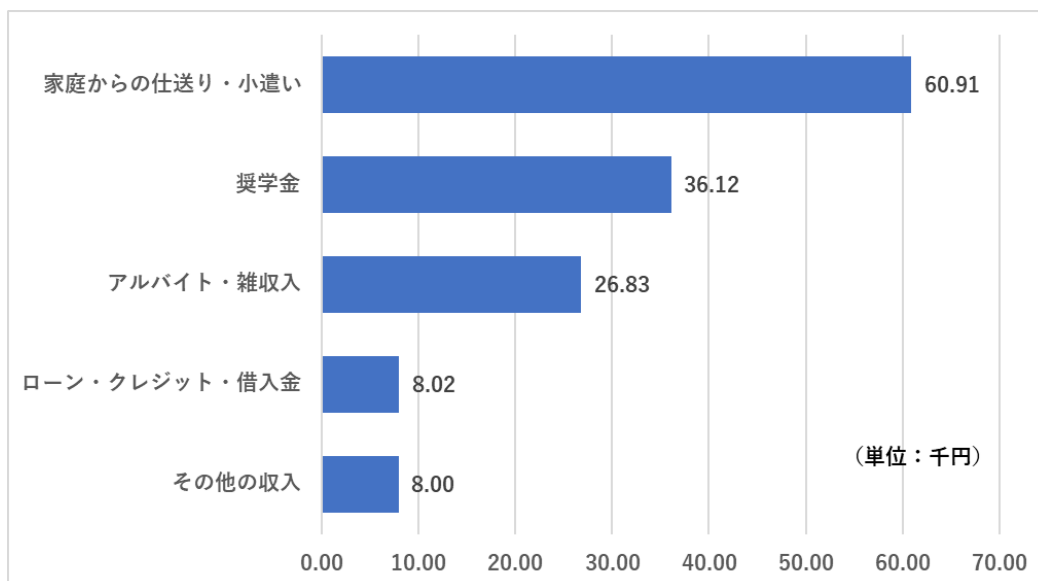


- 支出合計・・・「支出合計」全回答結果の平均額（2020年度調査では設問21（14））
  - 項目積上げ・・・「衣料費」「食費【自宅生は外食代】」「住居費【自宅外生のみ回答】」「奨学費」「教養・娯楽費」「通学費」「雑費」のそれぞれの回答結果（非該当「0円」も含む）の平均額合計（2020年度調査では設問21（7）～（13））
- ※ 2007年の「推計」

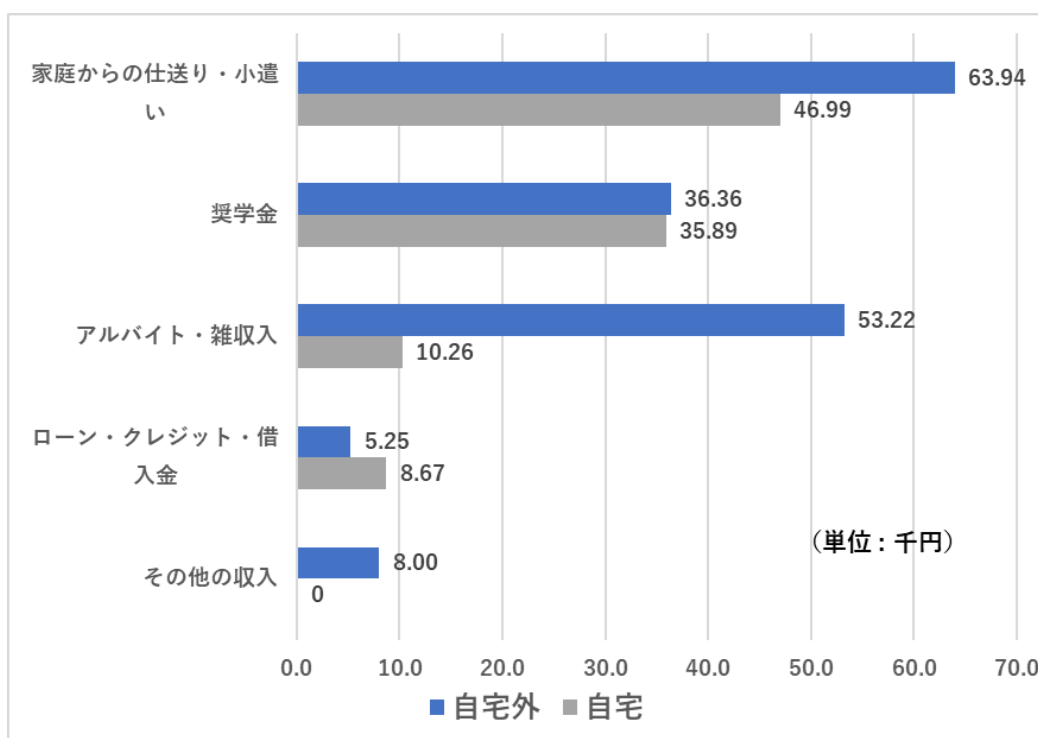
当該年調査において、住居費を「全学生の」平均額と誤って算出してしまったと推察されることが調査報告書発行以降に発覚した。そのため、2015年の報告書以降のグラフでは、自宅外学生のみ平均額に差替えたものを推計値として掲載している。

今回調査の収入合計は 54,220 円、支出合計は 55,070 円となり、前回調査の収入合計 83,260 円と支出合計 88,280 円と比べて、およそ 3 万円の減少が確認された。これまでの調査では収支ともにおよそ 9 万円～12 万円を前後しており、前回調査ではじめて 9 万円を下回ったものの、今回調査ではさらに 3 万円低い金額となり、1986 年調査以来最も低い。収支合計と収支項目の積み上げ値、さらに推計値とともに過去最低となった。なお、推計とは「奨学金」、「アルバイト・雑収入」、「ローン・クレジット・借入金」、「その他の収入」の項目に関してそれぞれ該当者のみの平均額を計算し、「家庭からの仕送り・小遣い」を全体の平均額のままとし、各項目を合算した値を示している。

## 収入内訳

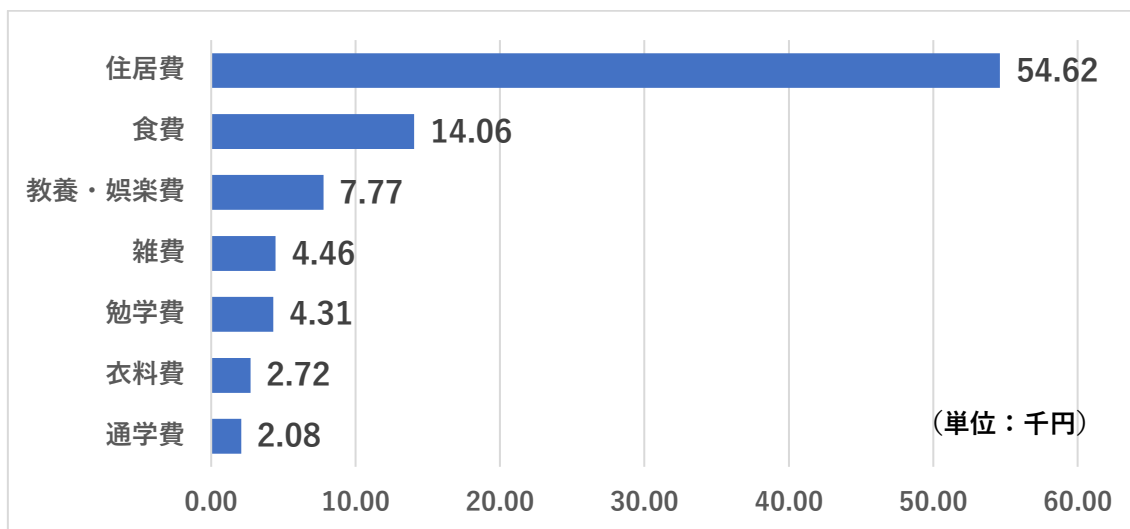


## 収入内訳 (自宅・自宅外)

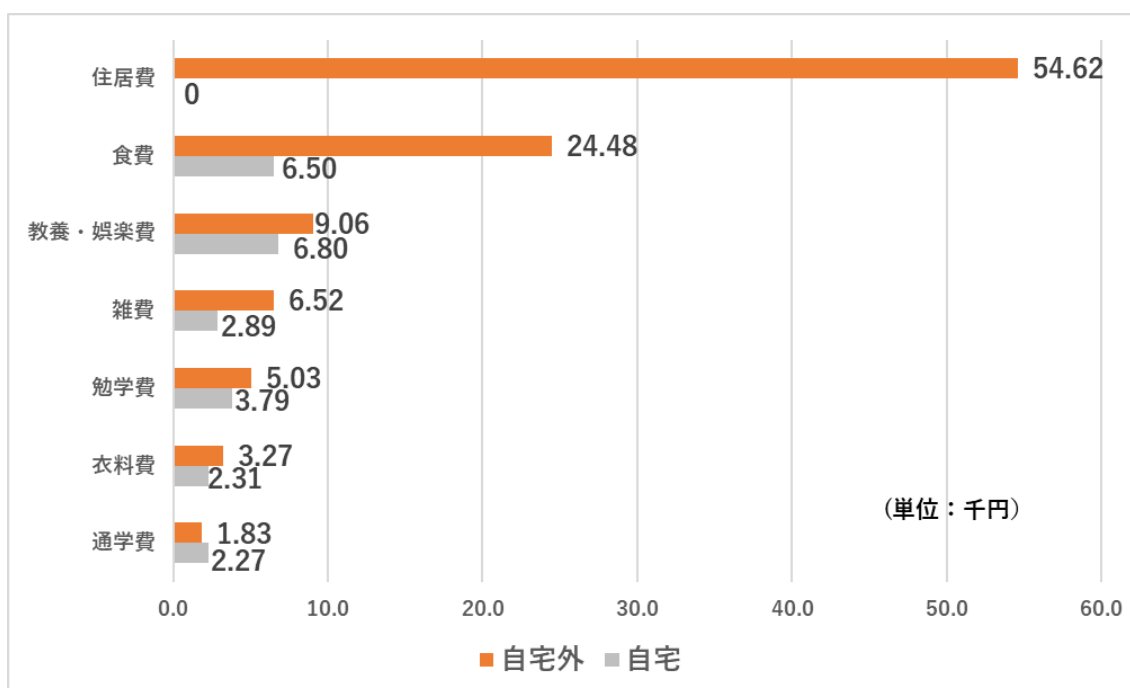


収入内訳は、「家庭からの仕送り・小遣い」が最も高く 60,910 円、「奨学金」36,120 円、「アルバイト・雑収入」26,830 円と続く。金額自体はいずれの項目でも減少が認められる。家庭からの仕送り・小遣いはおよそ 13,000 円の減少、奨学金はおよそ 700 円の減少、アルバイト・雑収入はおよそ 17,000 円減少している。

## 支出内訳



## 支出内訳（自宅・自宅外）



## 支出内訳の推移

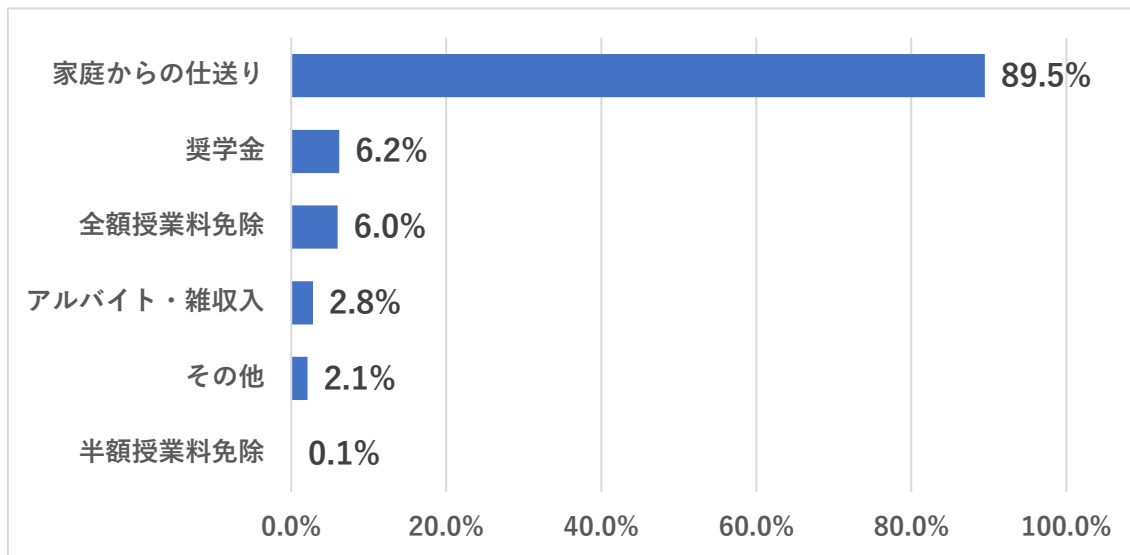


支出内訳は「住居費」が最も高く 54,620 円、「食費」14,060 円、「教養・娯楽費」7,700 円と続く。金額自体はいずれの項目でも減少が認められる。住居費はおよそ 6,000 円の減少、食費はおよそ 8,000 円の減少、教養・娯楽費は 7,000 円減少している。そのほかの項目も、一貫して金額の減少が認められる。構成比としては前回調査と大きくは異なる。また、「自宅生」と「自宅外生」を比較すると、通学費を除いたすべての項目で自宅外生が上回っている。

## 22. 授業料負担

- 前回調査同様「家庭からの仕送り」が9割程度

22. 大学の授業料はどのように負担していますか。あてはまるものを全て選んでください。



授業料の負担は「家庭からの仕送り」が9割近くを占め、次いで「奨学金」「全額授業料免除」と続く。前回調査とほとんど同じである。

## 「Ⅶ. 生活費の状況」の分析

生活費は収入・支出ともに過去最も低い 5 万円台を記録し、具体的な内訳についても押し並べて金額は減少した。この結果についても新型コロナウイルス感染症の影響を無視することはできないと思われるが、結果の解釈には留意が必要である。収入だけでなく支出も同時に減少していることから、全体的な傾向だけで見れば必ずしも支出が維持されたまま収入が減少したわけではないことが示唆される。例えば、オンライン授業に伴い、本来であれば一人暮らしをはじめの予定であった層が一人暮らしをしなかったためなど、金額の減少に対するいくつかの理由が想定される。より詳細な分析が待たれる。また、授業料負担は前回調査の傾向を踏襲する結果となった。

なお、留学生の生活費の状況については、留学生調査報告書において報告を行う。

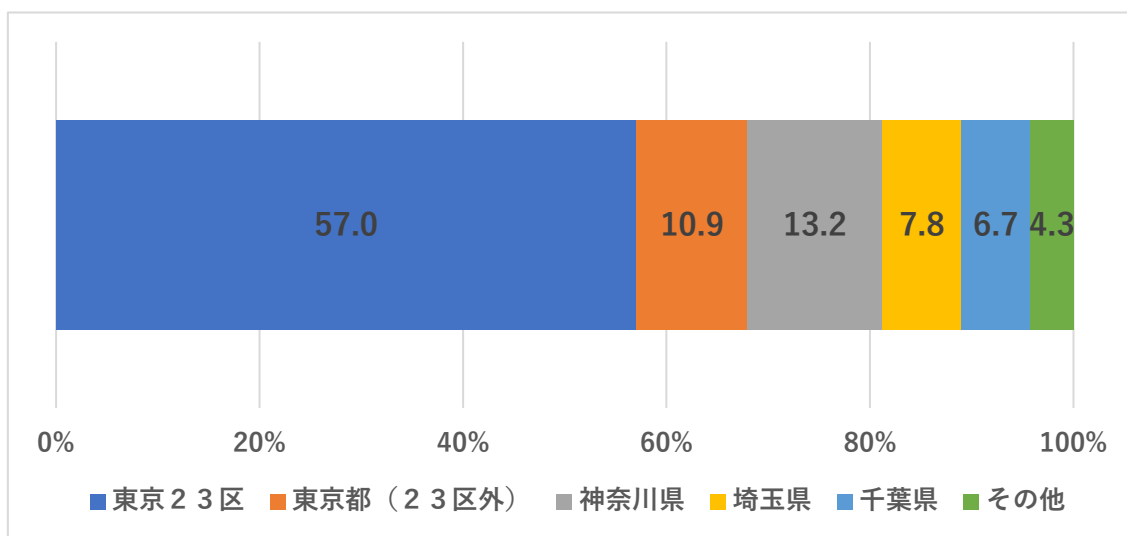


## Ⅷ.通学・住居

### 23. 居住地

- 現在の居住地上位3項目「東京23区」、「神奈川県」、「東京都（23区外）」
- 「その他」が前回0.9%から今回4.3%に増加

23. あなたは、現在どこに住んでいますか。あてはまるものを1つ選んでください。

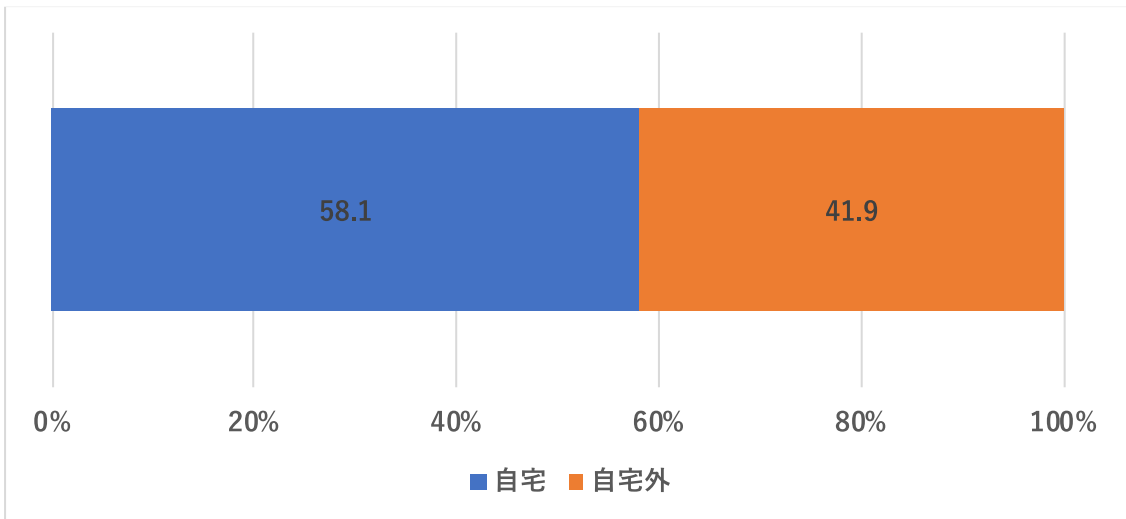


現在の居住地は「東京23区」57.0%（前回調査58.4%）、「神奈川県」13.2%（前回調査15.8%）「東京都（23区外）」10.9%（前回調査11.7%）となり、前回調査とほとんど変わらない。ただし、「その他」が前回調査では0.9%であったのに対し今回は4.3%と増加した。

## 24. 居住形態（自宅／自宅外）

- 半数以上が「自宅」に住んでいるものの、前回から減少

24. あなたの居住形態はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。

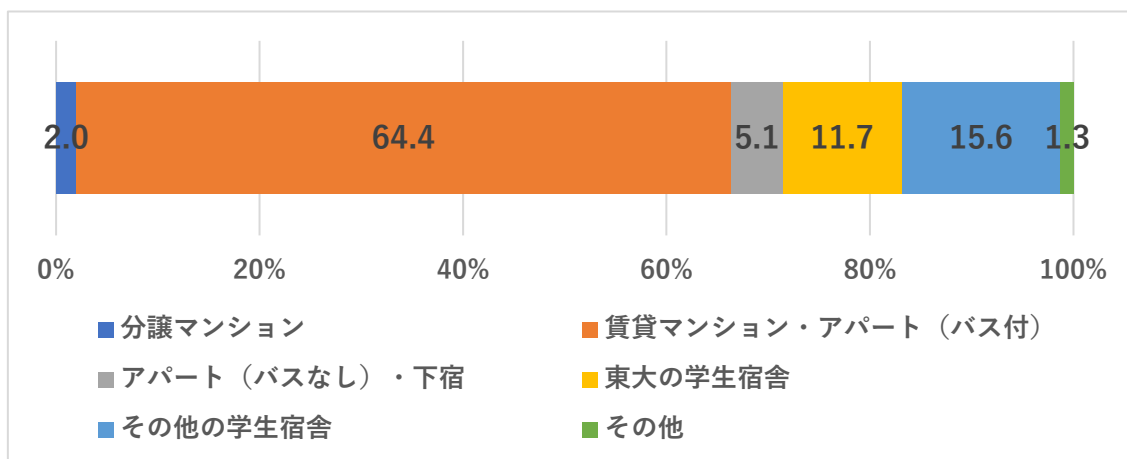


現在の居住形態は自宅が58.1%（前回調査63.5%）、自宅外が41.9%（前回調査36.5%）であった。前回調査と比べて、自宅外の割合が増加している。

## 25. 居住形態（自宅外選択者への設問）

- 居住形態上位3項目「賃貸マンション・アパート（バス付）」、「その他の学生宿舎」、「東大の学生宿舎」
- 「東大の学生宿舎」が前回調査より増加

25. 設問24で【居住形態が「2. 自宅外」】を選んだ方にお伺いします。現在あなたが住んでいるのはどれですか。あてはまるものを1つ選んでください。



自宅外に住んでいる者のうち、64.4%が「賃貸マンション・アパート（バス付）」に住んでおり最も多い。次いで「その他の学生宿舎」「東大の学生宿舎」と続く。「東大の学生宿舎」が前回調査の6.7%から増加しているほかは概ね前回調査と同様である。

## 「Ⅷ.通学・住居」の分析

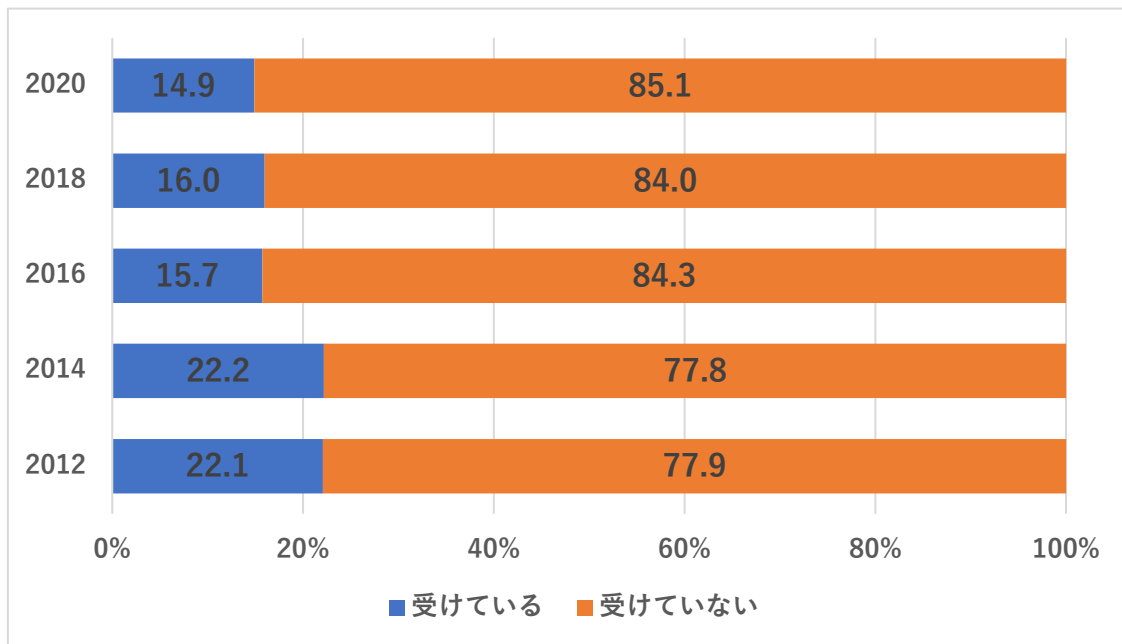
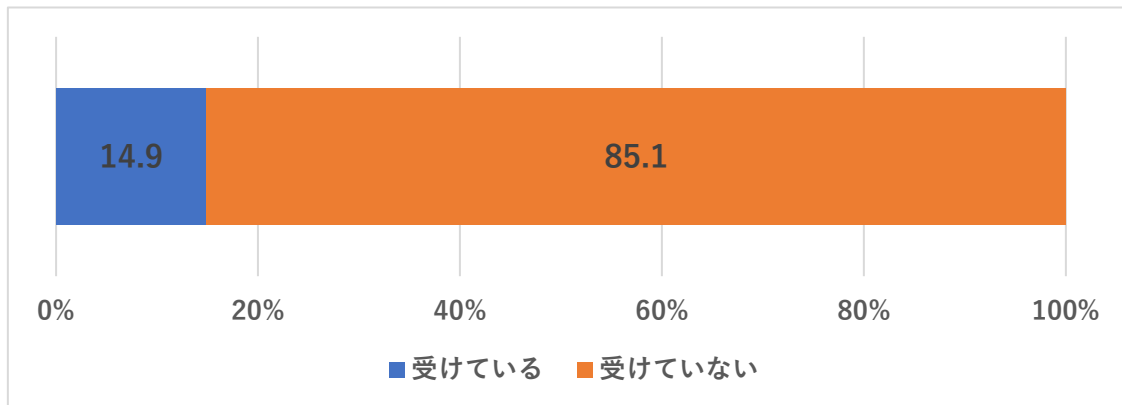
居住地は「東京 23 区」、「神奈川県」、「東京都（23 区外）」が上位 3 項目を占める一方で「その他」が 4.3%と増加した。また、居住形態は「自宅外」が前回調査より増加し、具体的には「東大の学生宿舎」が増加した。2019 年 9 月より「目白台インターナショナル・ビレッジ」が開寮し、三鷹学生宿舎・豊島学生宿舎以外の選択肢が増え、増加につながったことが推察される。より詳しい検討が待たれる。

## IX.奨学金

### 26. 奨学金受給の有無

- 前回調査同様 8 割以上が定期的な奨学金を「受けていない」

26. 現在、定期的な奨学金を受けていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

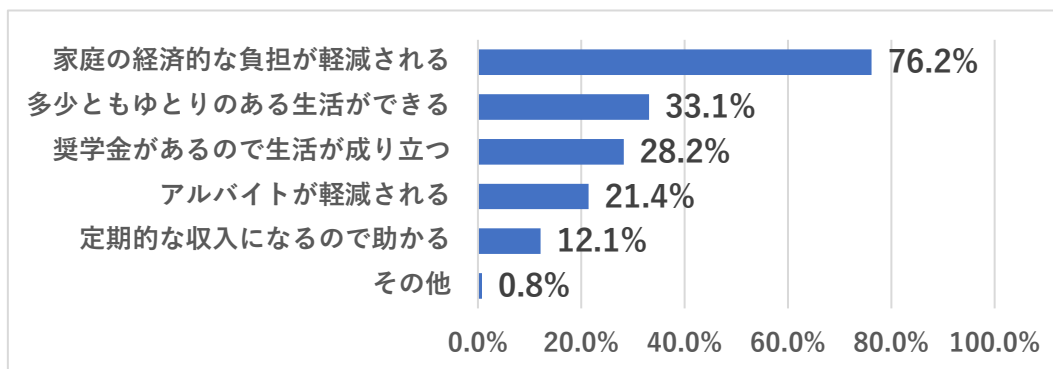


定期的な奨学金は 85.1%が受けていない。この結果は 2016 年以降ほとんど同じである。

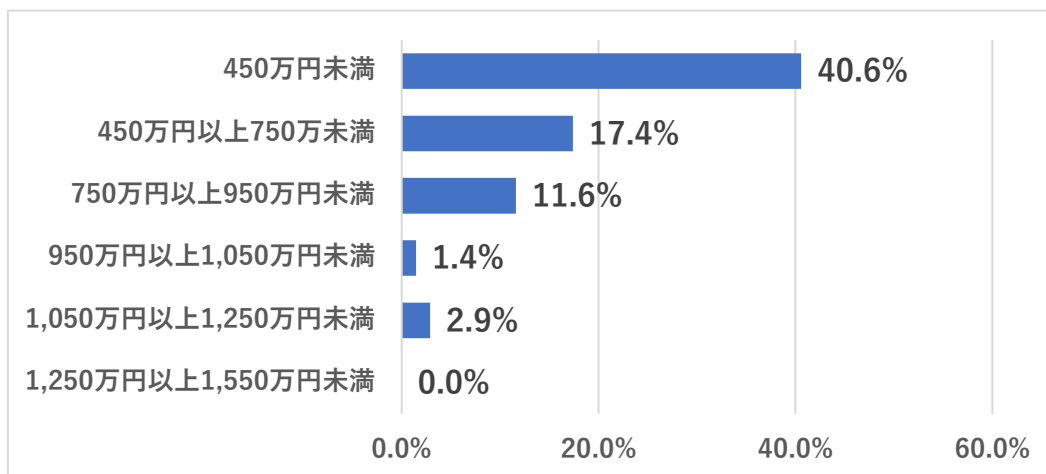
## 27. 奨学金の役立て方

- 奨学金の役立て方「家庭の経済的な負担が軽減される」、「多少ともゆとりのある生活ができる」、「奨学金があるので生活が成り立つ」

27. 設問26で【奨学金を「受けている」】と答えた方にお伺いします。奨学金はどんな面で役に立っていますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。



奨学金が役に立つ面は「家庭の経済的な負担が軽減される」が最も多く76.2%、「多少ともゆとりのある生活ができる」33.1%、「奨学金があるので生活が成り立つ」28.2%と続く。日本学生支援機構の奨学金とほかの団体の奨学金を分けて尋ねていた前回調査と直接的に比較はできないものの、「家庭の経済的な負担が軽減される」ことが役に立っている面として最も選択されていることは前回同様である。

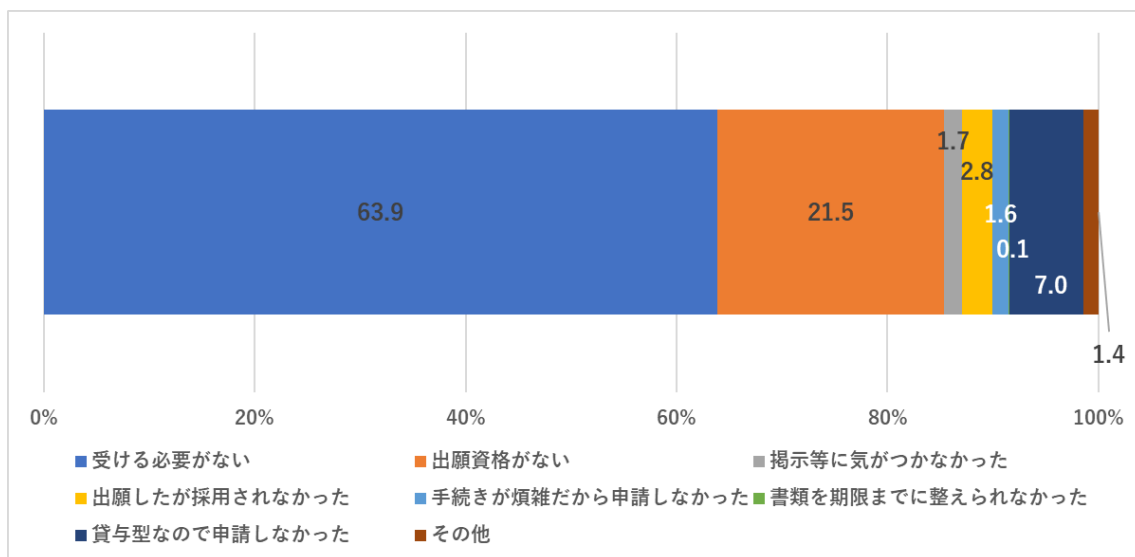


「奨学金があるので生活が成り立つ」の回答割合を所得階層別に確認したところ450万円未満の者は全体と比べて10%ポイント以上の増加が認められた。所得階層が低くなるほど生活が奨学金によって支えられていることが示唆された。

## 28. 奨学金不受給理由

- 奨学金不受給理由「受ける必要がない」、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」

28. 設問26で【奨学金を「受けていない】と答えた方にお伺いします。その理由はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



奨学金不受給理由は「受ける必要がない」が過半数を占め、「出願資格がない」、「貸与型なので申請しなかった」と続く。日本学生支援機構の奨学金とほかの団体の奨学金を分けて尋ねていた前回調査と直接的に比較はできないものの、概ね全体的な傾向としては前回と同じである。

## 「IX.奨学金」の分析

前回調査までは奨学金を日本学生支援機構とほかの団体とで分け、それぞれの受給の有無や役立て方、不受給理由などを尋ねていたのに対し、今回調査は団体の種類を問わず受給の有無や役立て方、不受給理由を尋ねた。そのため、比較対象が2種類であった前回調査との直接的な比較には留意する必要があるものの、概ね同様の傾向が見られた。例えば、全体では、およそ80%以上が定期的な奨学金を受給していないこと、受給者にとっては、奨学金は「家庭の経済的な負担が軽減される」といったメリットがあり、所得階層が低い層では生活を支える役割を果たしていることなどは、前回同様の傾向を示していた。

なお、留学生の家計状況や奨学金受給状況などについては、留学生調査報告書において報告を行う。

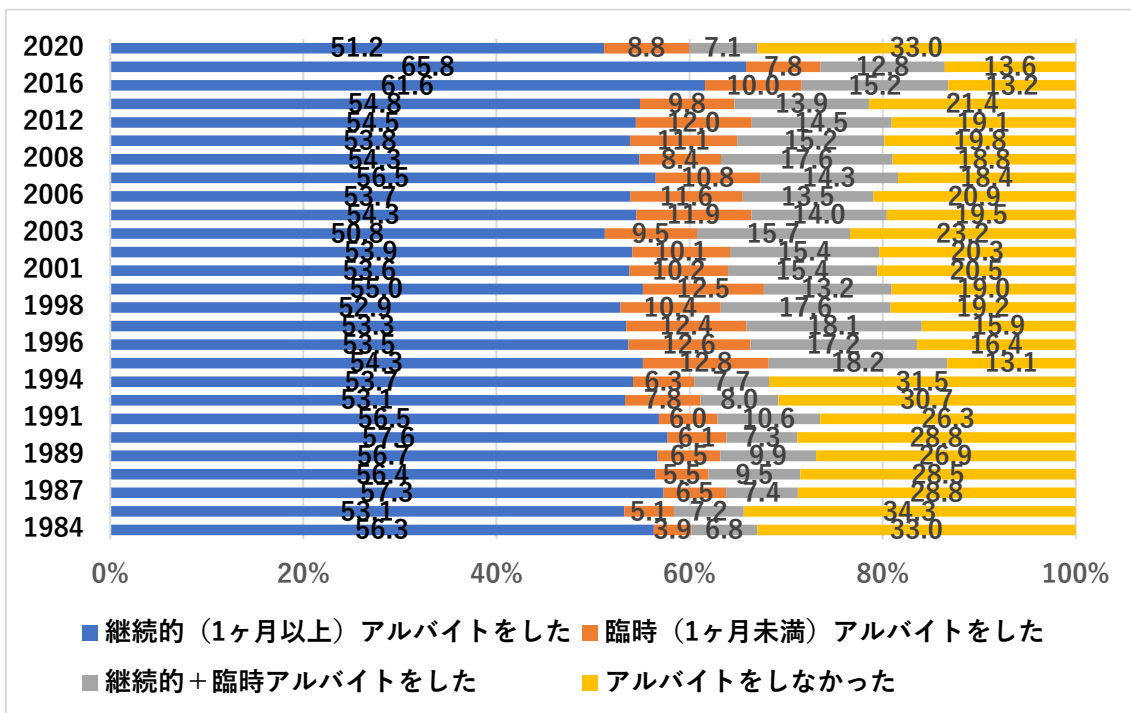
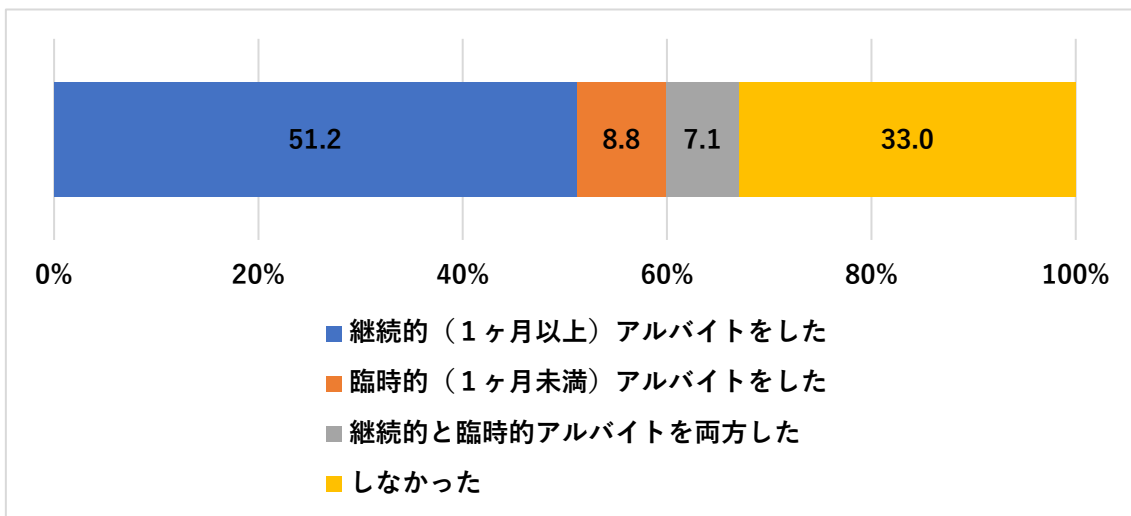


## X. アルバイト

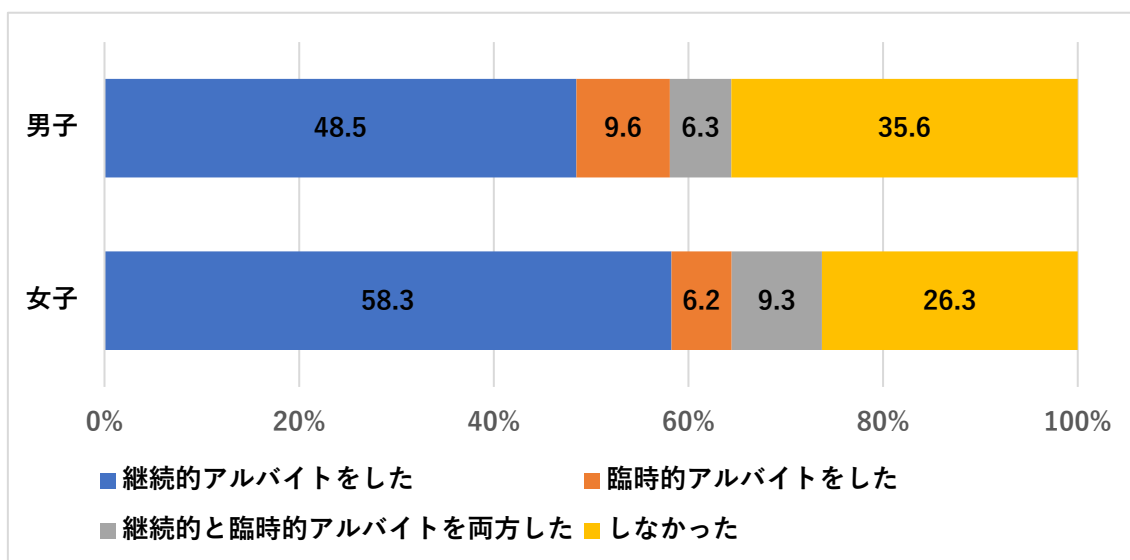
### 29. 過去1年間のアルバイト実施状況

- 過去1年間に「アルバイトをした」19.3%ポイント減少し、67.1%
- 男子より女子でアルバイトをしている傾向

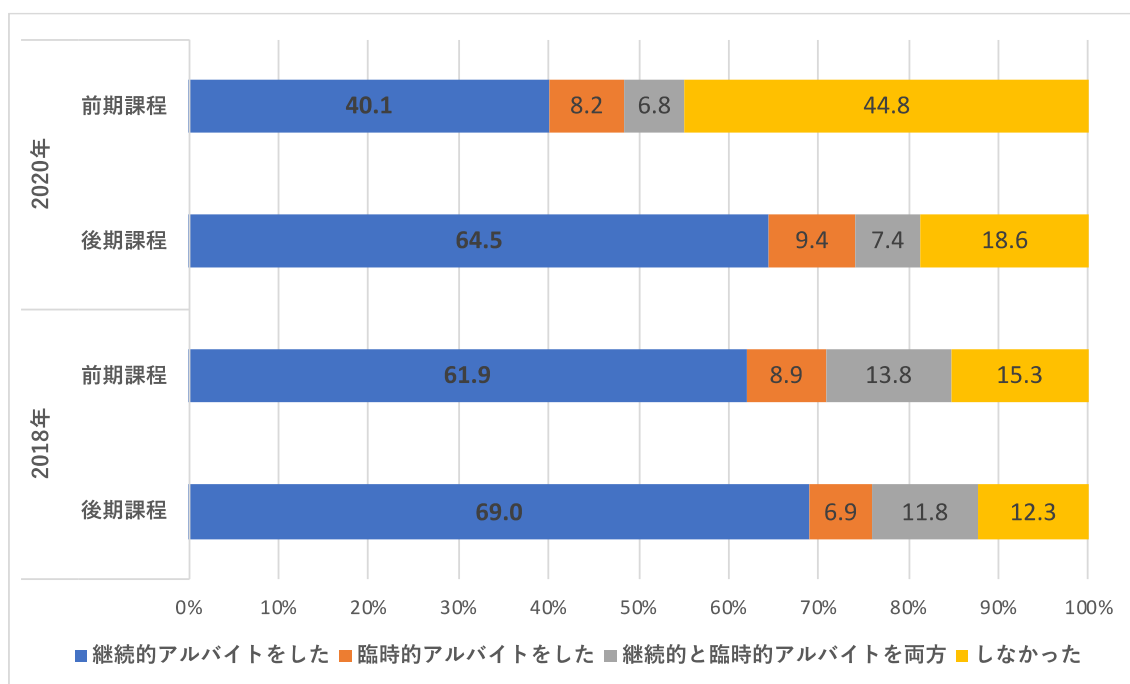
29. 過去1年間にアルバイトをしましたか。あてはまるものを1つ選んでください。



2014年以降増加傾向にあったアルバイト従事率は今回調査で大きく減少し、「アルバイトをしていない」は前回調査の13.6%から33.0%と、29.4%ポイント増加している。



男女間でアルバイト実施の有無に差があり、概して男子よりも女子のアルバイト実施率が高い。「継続的アルバイトをした」、「臨時的アルバイトをした」、「継続的と臨時的アルバイトを両方した」の合算値は男子で64.4%、女子で73.5%で9.1%ポイントの差が認められる。ただし、男女ともにアルバイト実施率は前回調査と比べて減少している。

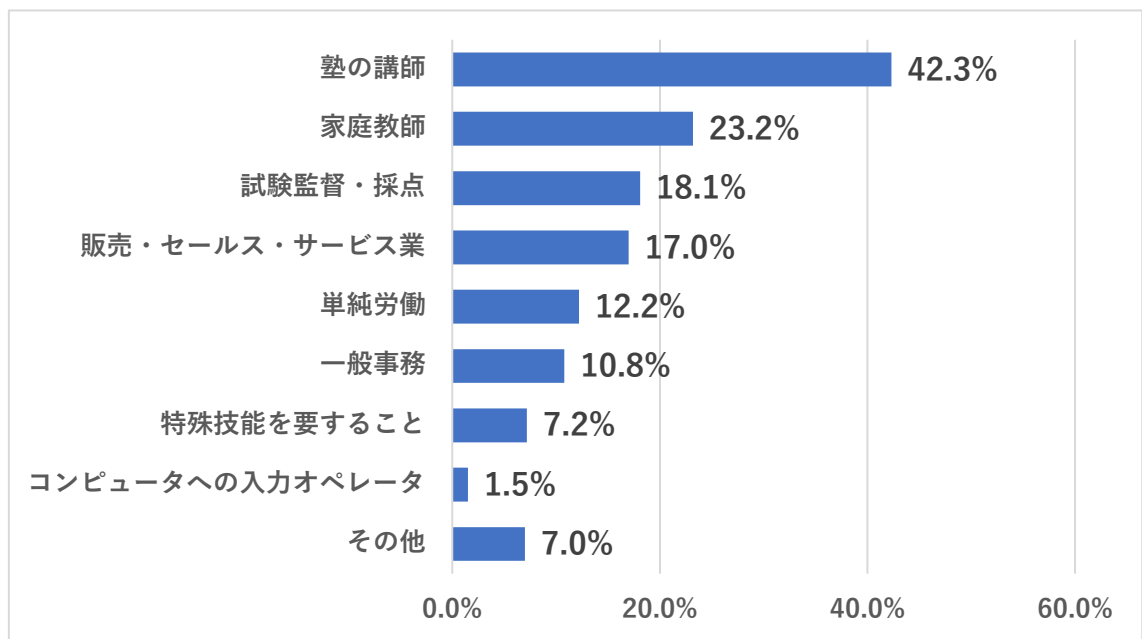


前期課程・後期課程でアルバイト実施に差があり、前期課程の学生の44.8%がアルバイトをしていないと回答している。前回調査の前期課程と比べて29.5%ポイント、今回調査の後期課程と比べて26.2%ポイント多い。また、今回調査の後期課程学生に関しても、前回調査と比べてアルバイトをしていない者は6.3%ポイント増加している。

## 30. アルバイトの種類

- アルバイトの種類は前回調査同様「塾の講師」、「家庭教師」、「試験監督・採点」

30. 設問29で「過去1年間にアルバイトをした」と答えた方にお伺いします。そのアルバイトの種類はどれにあたりますか。主にあてはまるものを2つまで選んでください。

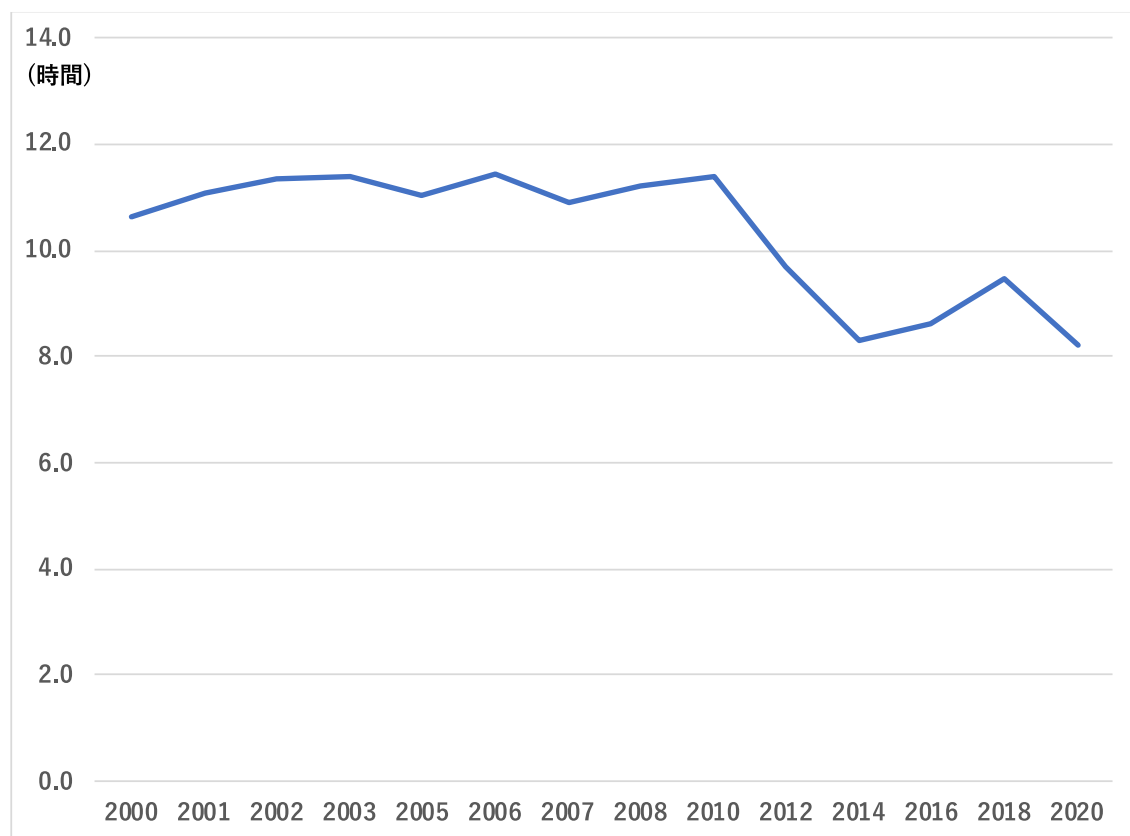
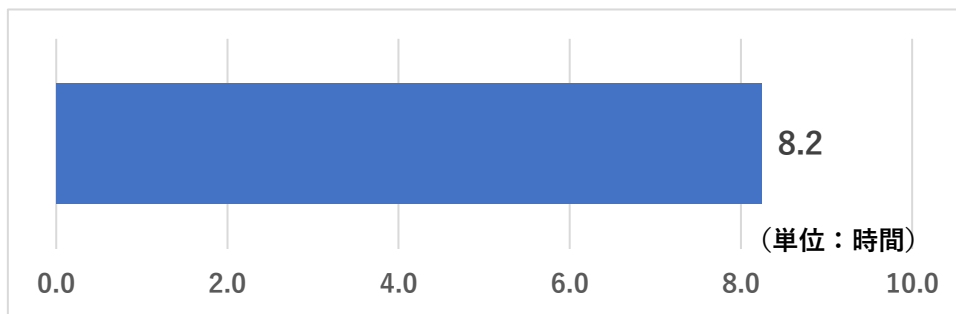


アルバイトの種類は「塾の講師」が最も多く 42.3%（前回 44.2%）、「家庭教師」23.2%（前回 23.6%）、「試験監督・採点」18.1%（前回 21.4%）と続く。前回調査と概ね同じ割合で分布している。

## 31. アルバイトの時間

- アルバイトの時間は週およそ 8.2 時間、2014 年以降の微増傾向から一転して減少

31. アルバイトに費やした時間はどのくらいでしたか。(往復時間を含め、一週間あたりの平均時間)

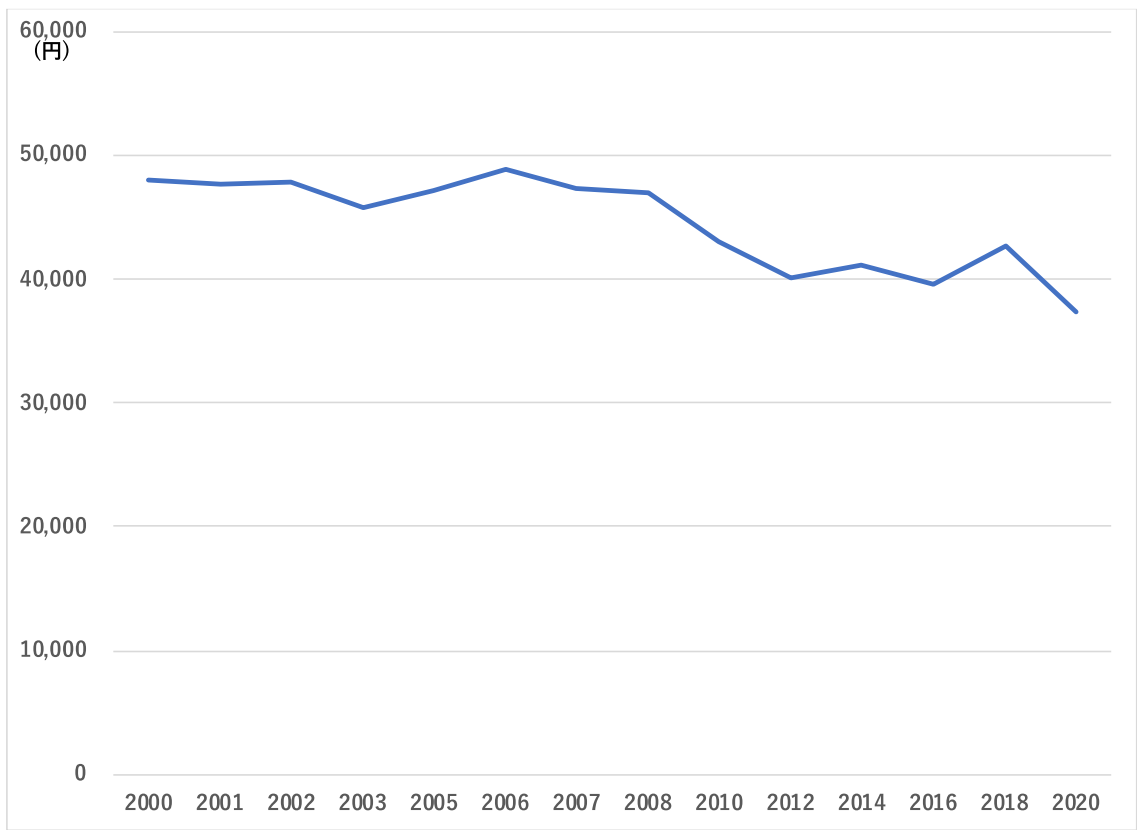
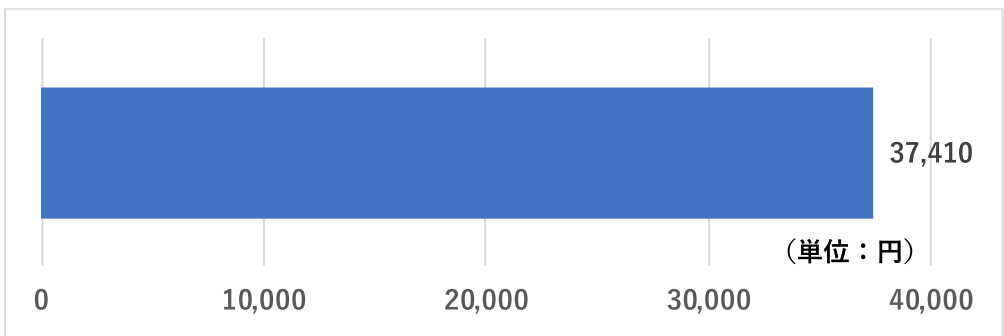


アルバイトに費やした時間は 8.2 時間であり、前回の 9.5 時間から 1 時間減少している。2010 年から 2014 年に減少して以降微増していたものの、今回調査では再び減少に転じた。

## 32. アルバイトの収入

- アルバイトの収入額は過去最低の 37,410 円、減少傾向を維持

32. アルバイトの収入額はどれくらいでしたか。(1ヶ月当たりの平均 単位：円)

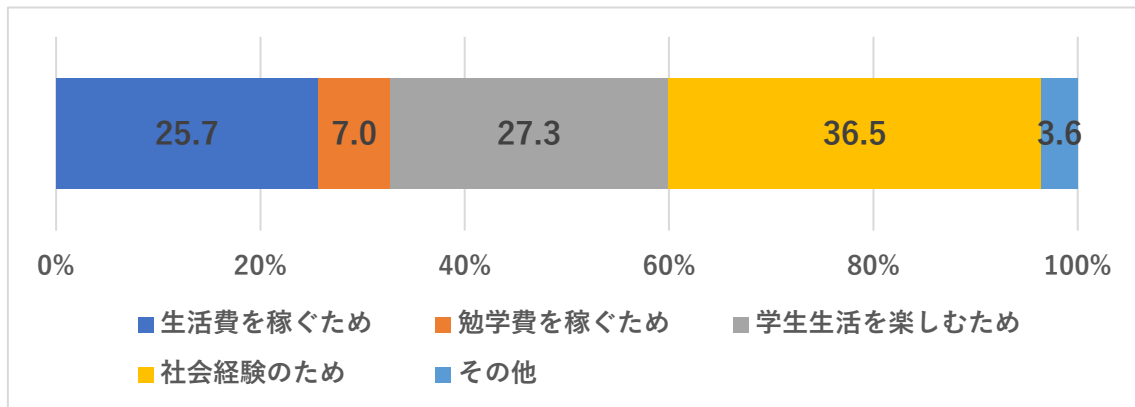


アルバイトの1ヶ月あたり収入額は 37,410 円で、前回調査より減少した。2000 年以降、緩やかではあるが収入額は減少している。調査以来最も低い金額となった。

### 33. アルバイトの目的

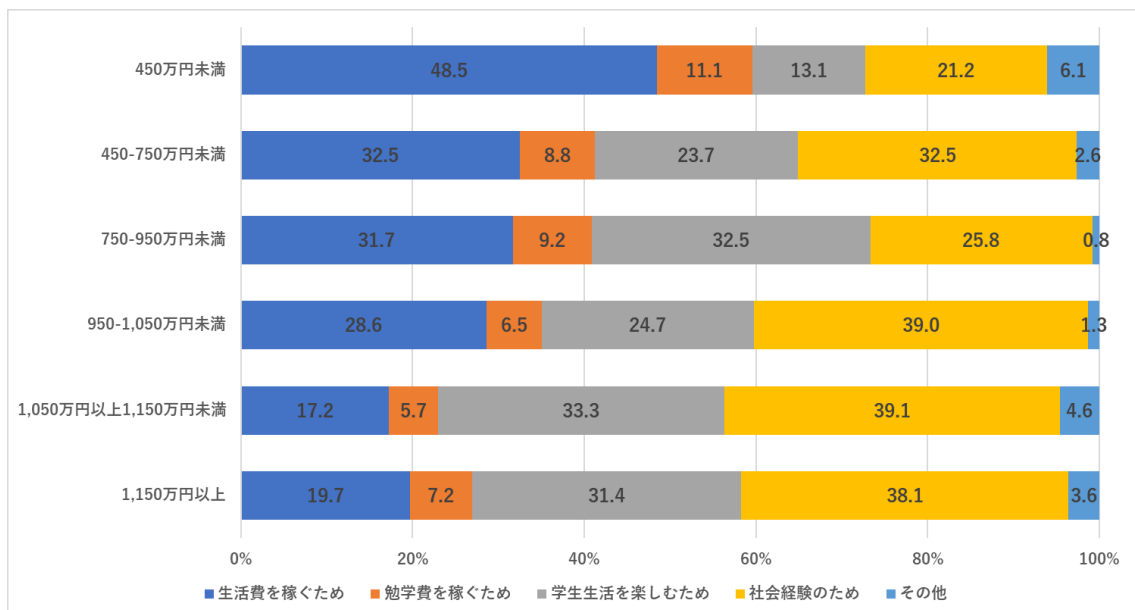
- アルバイトの目的「社会経験のため」が前回調査より約10%増、「学生生活を楽しむため」が約10%ポイント減で順位が逆転
- 所得が少ない者の約半数が「生活費を稼ぐため」にアルバイトを行っている

33. アルバイトをした目的はどれにあたりますか。あてはまるものを1つ選んでください。



アルバイトの目的は「社会経験のため」が36.5%で最も多く（前回23.7%）、「学生生活を楽しむため」27.3%（前回39.8%）、「生活費を稼ぐため」25.7%（前回29.1%）と続く。前回調査より「社会経験のため」が12.8%ポイント増加し、「学生生活を楽しむため」が12.5%ポイント減少し、順位が逆転した。

アルバイトの目的（所得階層別）

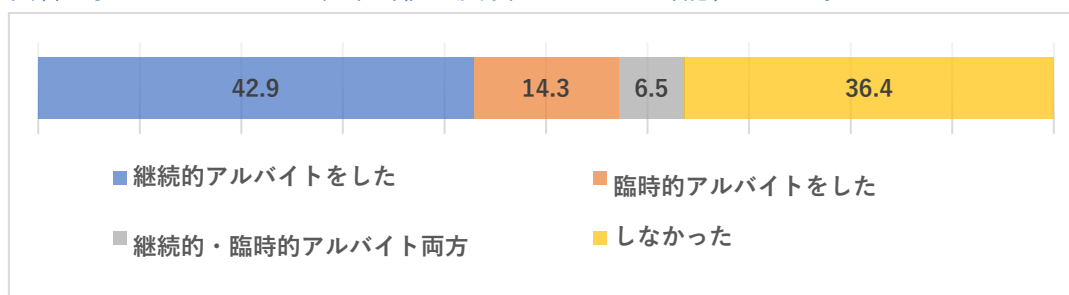


アルバイトの目的を所得階層別にみたところ、450万円未満の層では「生活費を稼ぐため」

が48.5%と最も多く（前回調査52.1%）、半数近くが生活費のためにアルバイトをしていることがうかがえる。

### 【留学生 アルバイト実施状況】

留学生のうち、継続的バイトを実施した学生（42.9%）、継続的・臨時的アルバイト（6.5%）であり、日本人学生等よりも、若干少ないものの、約半数の学生が継続的なアルバイト実施経験がある。行ったことのあるアルバイトは、塾講師が最も多く、54.5%であった。またアルバイト時間は、週平均8時間であり、前回調査（11.4時間）よりも減少している。平均収入は、月4万4737円であり、前回調査よりも若干上がり、また日本人学生等よりも高くなっていた。70回調査においては、アルバイトをしなかった学生の割合が高くなっていることや、日本人学生等調査が1年生回答割合が高いのに対して、留学生版調査は、1年生の回答が少ないことなどが、平均値に反映されている可能性がある。

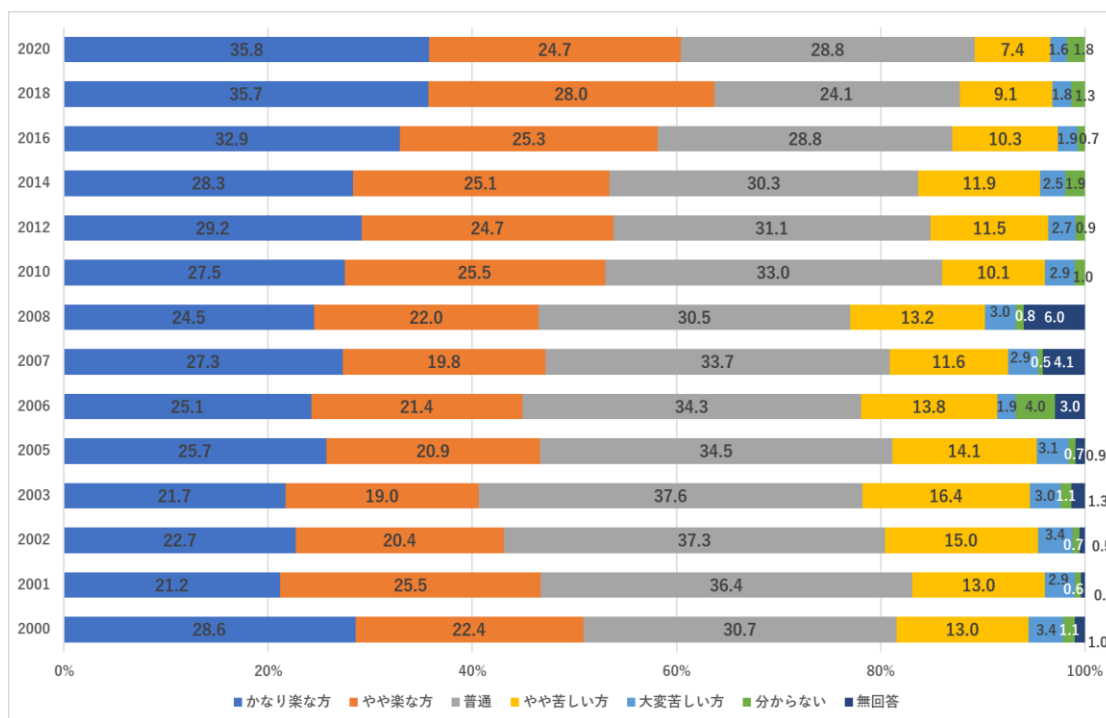
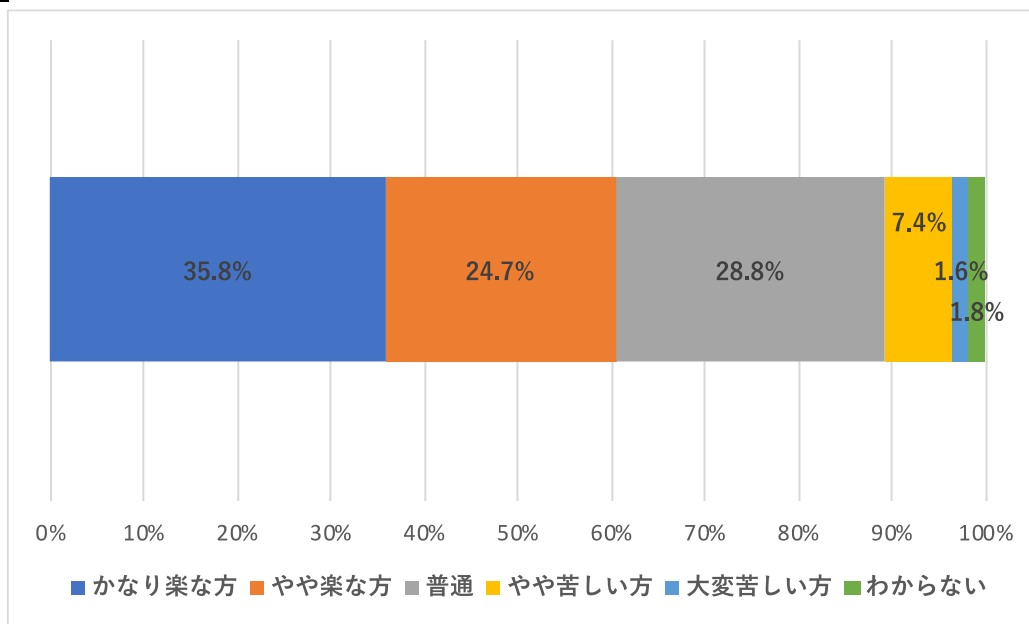


留学生のアルバイトの目的は「生活費を稼ぐため」53.2%が最も多く（前回42.9%）、「社会経験のため」を選択した学生は、25.5%であり、日本人学生等と比較すると、「生活費」のために働く学生が多い。「学生生活を楽しむため」を選択した学生は、12.8%であり、前回の22.4%から減少しており、日本人学生等と同様の傾向であり、コロナ禍の影響がみられる。

## 34. 現在の暮らし向き

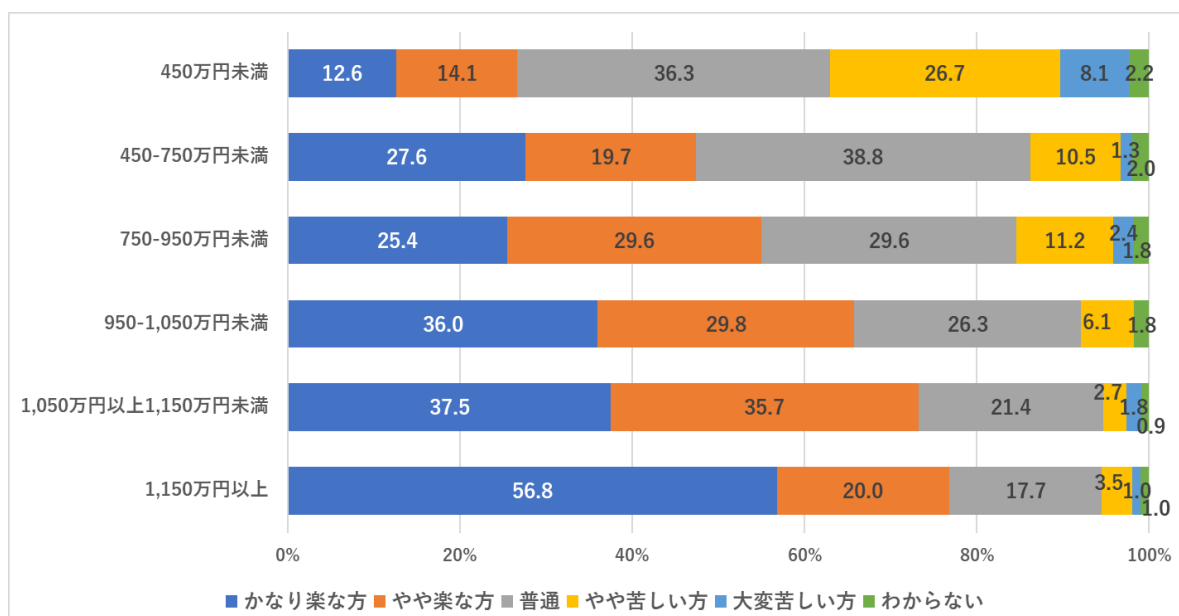
- 暮らし向き「楽な方」60.5%、前回調査から据え置き
- 所得が450万円未満の層は「楽な方」の割合が低く、「苦しい方」の割合が高い

34. 現在の暮らし向きについてどうお考えですか。あてはまるものを1つ選んでください。



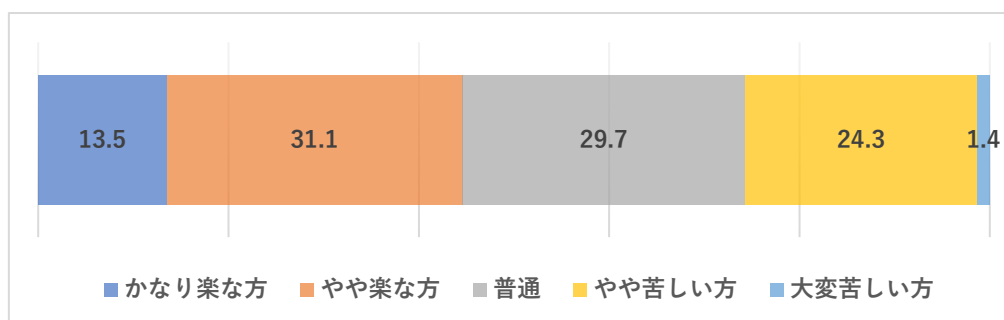


主観的な暮らし向きは2003年以降緩やかに増加していたものの、今回調査でさらなる増加をみせたとはいえない。「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は今回調査では60.5%となり、過半数が楽であると回答したものの、前回調査より減少し、2016年調査と同水準となった。



所得階層別に暮らし向きに違いが見られた。暮らし向きが「かなり楽な方」「やや楽な方」の合算値は450万円未満の層では26.7%、「やや苦しい方」「大変苦しい方」の合算値は34.8%となった。全体と比べて33.8%ポイント楽な暮らし向きの割合が低く、25.8%ポイント苦しい暮らし向きの割合が多い。

### 【留学生 暮らし向き】



暮らし向きについて、「かなり楽な方」13.5%、「やや苦しい」24.3%であり、日本人学生等と比較すると、「かなり楽」な学生は限られ、主観的に苦しく感じている学生が多い。

## 「X. アルバイト」の分析

アルバイトもまた新型コロナウイルス感染症の影響を被っている。過去 1 年間にアルバイトをしたことがある者は 67.1%で、34 年ぶりに少ない数値となった。特に前期課程の学生の実施率の低下が著しく、これは、新型コロナウイルス感染症に伴い飲食店の一時休業などが相次ぎ、1 年生などの新規アルバイト従事が減少したことが要因の一つと考えられる。一方、アルバイトに従事している者を対象に、その具体的な内容を尋ねていったところ、種類・収入額・時間などはそれほど大きな変化は認められなかった。ただし、アルバイトの目的は「社会経験のため」が前回調査より増加し、「学生生活を楽しむため」が減少するなどの一部変化も認められた。暮らし向きは大きな変化は見られず、半数以上は楽な方と回答していたものの、所得階層別によって差が見られる。

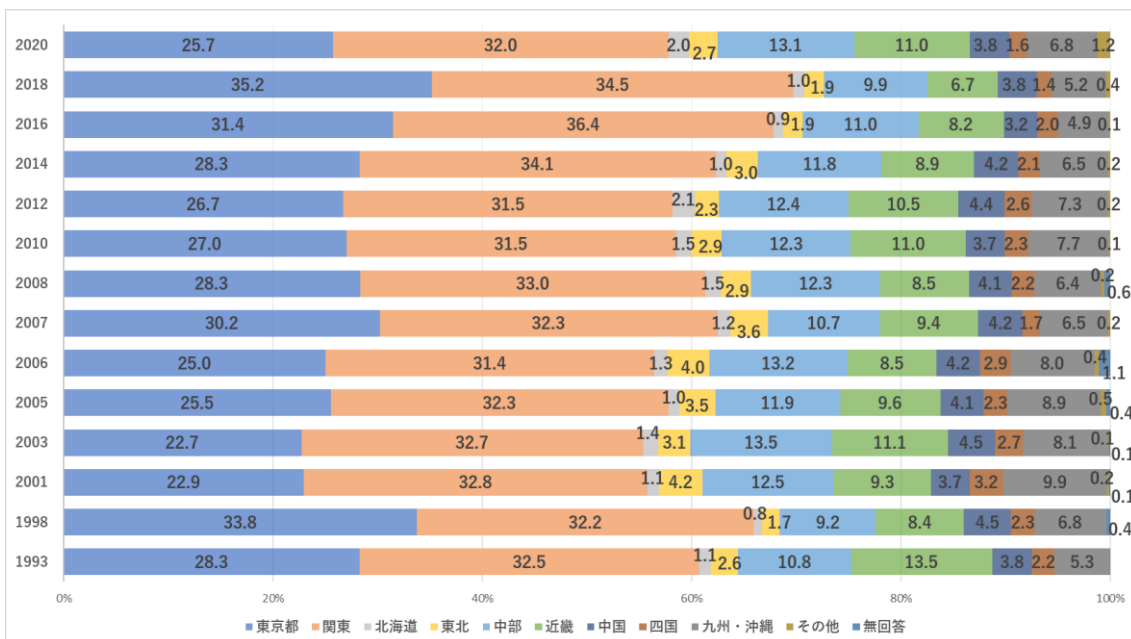
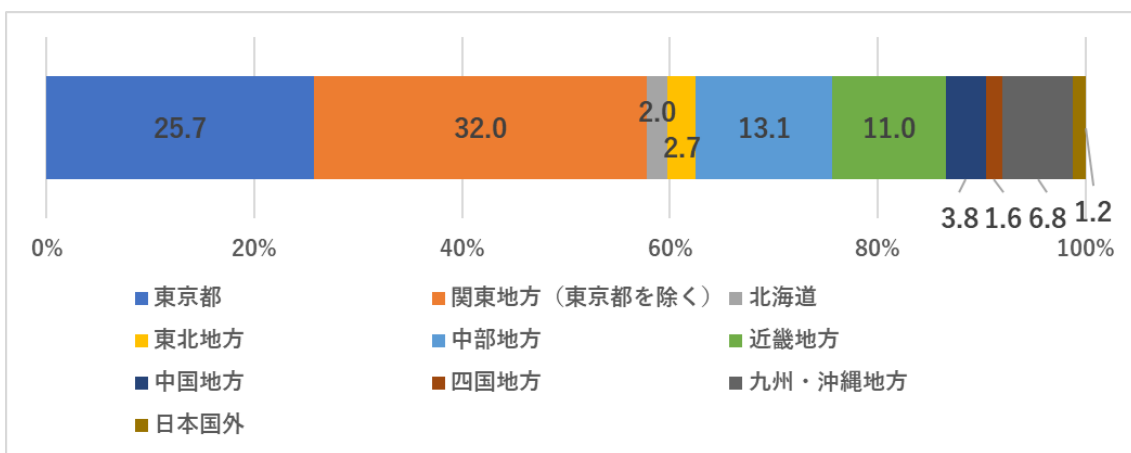
留学生は、日本人学生等よりも、アルバイトを「生活費のため」に行い、暮らし向きが苦しいと感じている学生が多く見られた。奨学金の受給状況や仕送りを行う母国家族の経済状況によって、留学生の日本での経済状況は非常に多様であり、実態に沿った施策が難しい側面があるが、安心して学ぶことが出来るよう経済的な支援策は重要である。

## XI. 家庭の状況

### 35. 高校時代の居住地

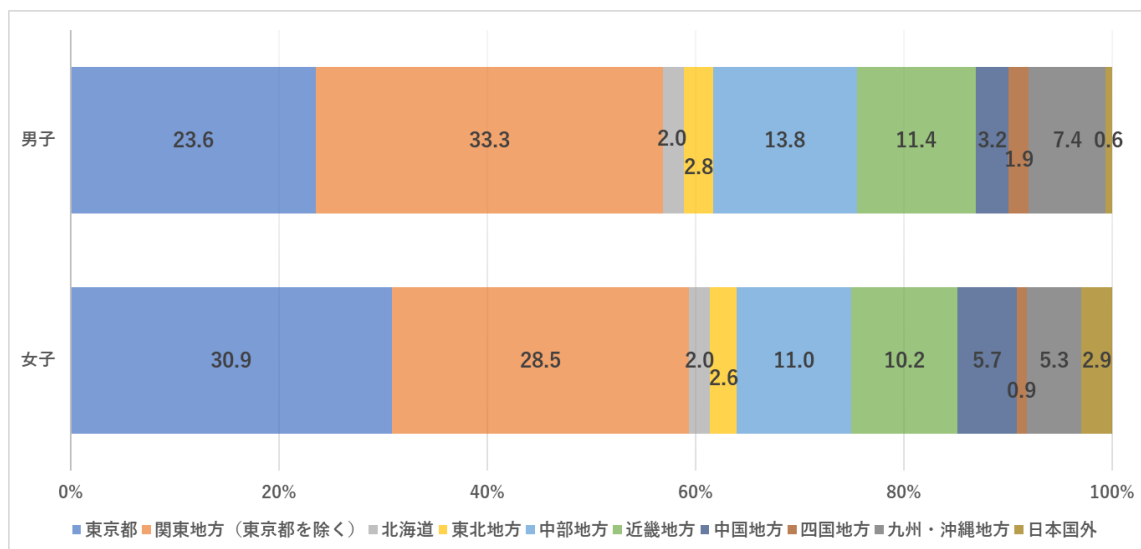
- 高校時代の居住地「関東地方（東京都を除く）」、「東京都」、「中部地方」
- 「東京都」が前回調査より10%ポイント近く減少

35. あなたが大学入学前の高校時代（その年齢当時）に住んでいた地方を1つ選んでください。



高校生相当の年齢のときの居住地は「関東地方（東京都を除く）」が最も多く「東京都」、「中部地方」と続く。ただし、東京都は前回調査から9.5%ポイント減少しており2000年代前半の水準となった。比して、「中部地方」が前回調査から3.2%ポイント、「近畿地方」

が前回調査から 4.3%ポイント増加している。ただし、前回調査までは「実家の所在地について、当てはまる地区の番号どれか1つに○をつけてください」と、実家の所在地として尋ねていたため、比較には留意が必要である。

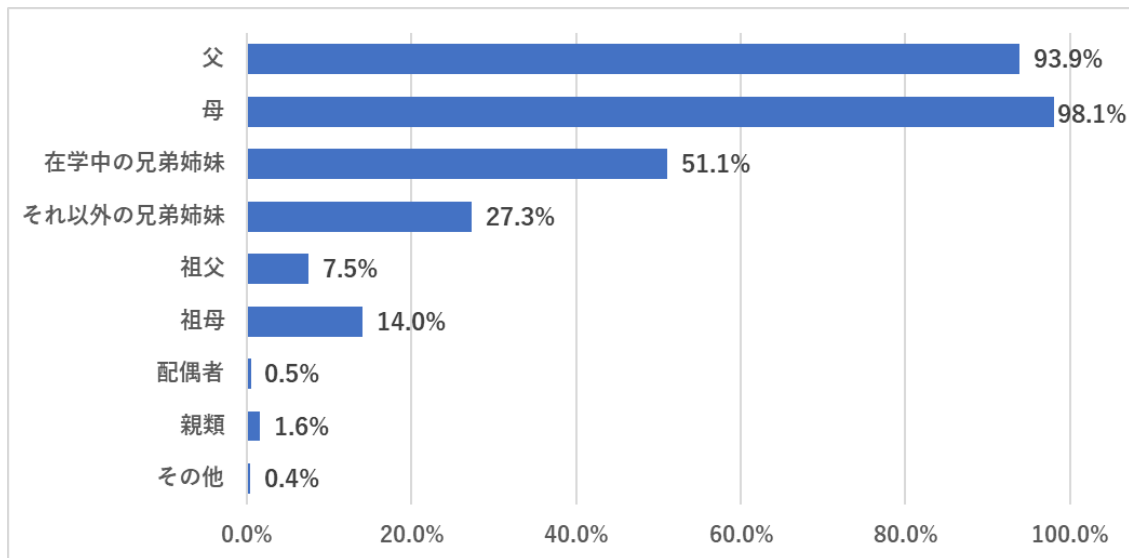


男女間の高校時代の居住地は、どちらかといえば男子は「関東地方（東京都を除く）」が多く、女子は「東京都」が多いものの、全体的な傾向としては大きくは異なる。

## 36. 家族構成

- 家族構成は前回調査と概ね変わらなかったものの、「在学中の兄弟姉妹」が増加、「それ以外の兄弟姉妹」が減少

36. 家族構成について、あてはまるもの全てを選んでください。

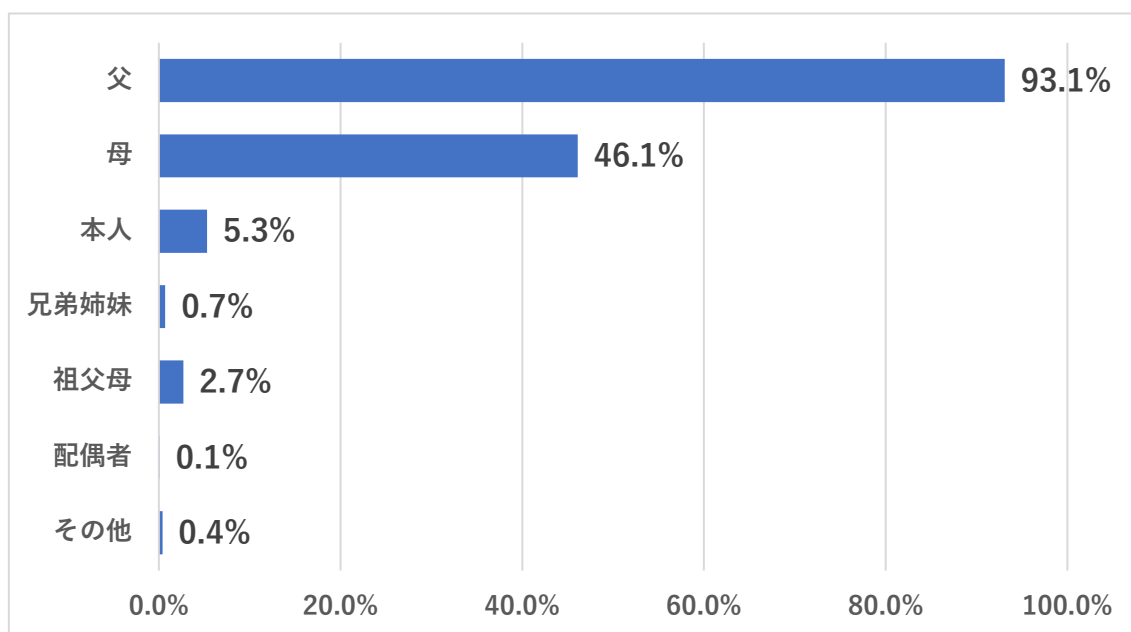


家族構成は前回調査と概ね変わらず、「父」「母」が多数を占め、「在学中の兄弟姉妹」「それ以外の兄弟姉妹」と続く。「在学中の兄弟姉妹」の割合が前回調査の 39.0% から 51.1% ポイント増加し、「それ以外の兄弟姉妹」が前回調査の 38.4% から 27.3% ポイント減少している。

## 37. 生計維持者

- 主たる生計維持者は「父」93.1%
- 「母」がおよそ7%ポイント増加

37. あなたの現在の生計を主に支えている方について、あてはまるもの全てを選んでください。



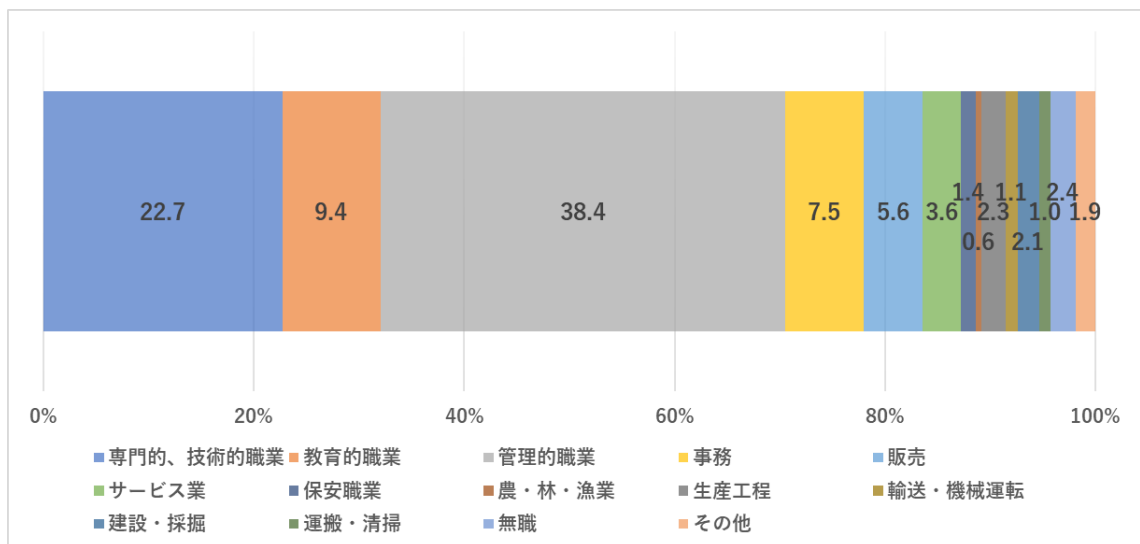
生計を主に支えている者は「父」が93.1%（前回93.5%）で大多数を占め、「母」46.1%（前回調査39.0%）、「本人」5.3%（前回5.6%と続く）。前回調査より「母」が7.1%増加しているものの、傾向としては前回同様の結果となった。

留学生の生計の維持者は、「父」が60.8%、「母」54.4%、「本人」51.9%であった。仕送りを受けておらず、奨学金を受給している学生が一定数いることから、「本人」の割合が高いのが、留学生の特徴といえる。

## 38. 父親の職業

- 父親の職業「管理的職業」、「専門的、技術的職業」、「教育的職業」

38. あなたの父親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。

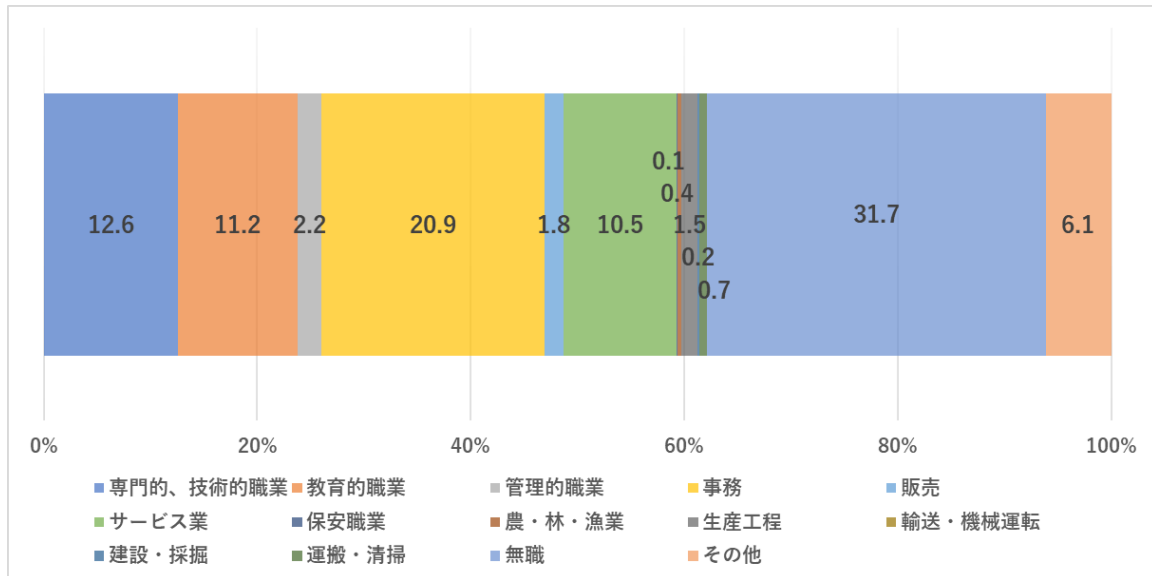


父親の職業は「管理的職業」が38.4%と最も多く（前回42.3%）、「専門的、技術的職業」22.7%（前回23.0%）、「教育的職業」9.4%（前回8.1%）と続く。概ね前回調査と同様の傾向にある。

## 39. 母親の職業

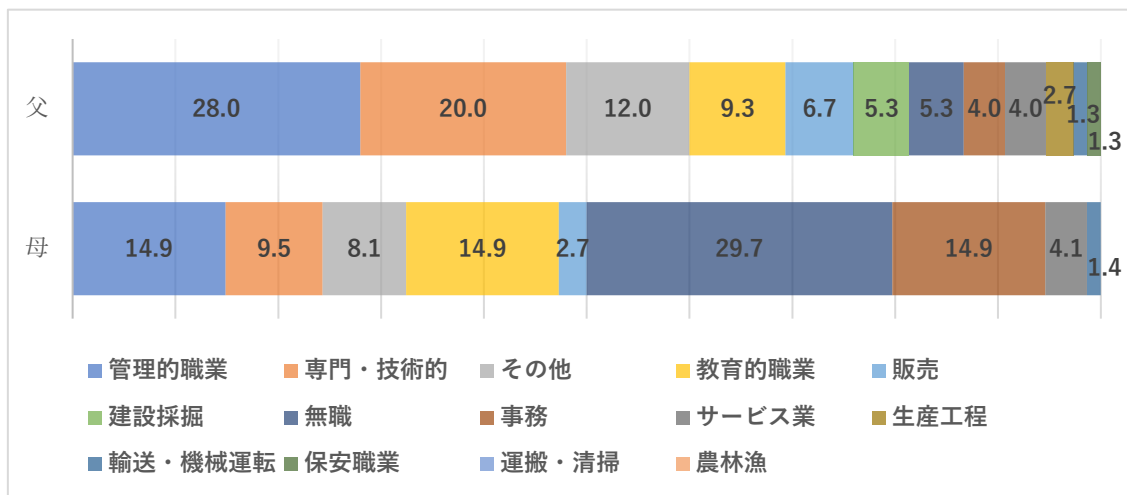
- 母親の職業は「無職」、「事務」、「専門的、技術的職業」

39. あなたの母親の職業について、あてはまるものを1つ選んでください。



母親の職業は「無職」が最も多く 31.7% (前回 34.2%)、「事務」20.9% (前回 19.8%)、「専門的、技術的職業」12.6% (前回 10.7%) と続く。ほとんど前回同様の傾向にある。

### 【留学生 父母の職業】



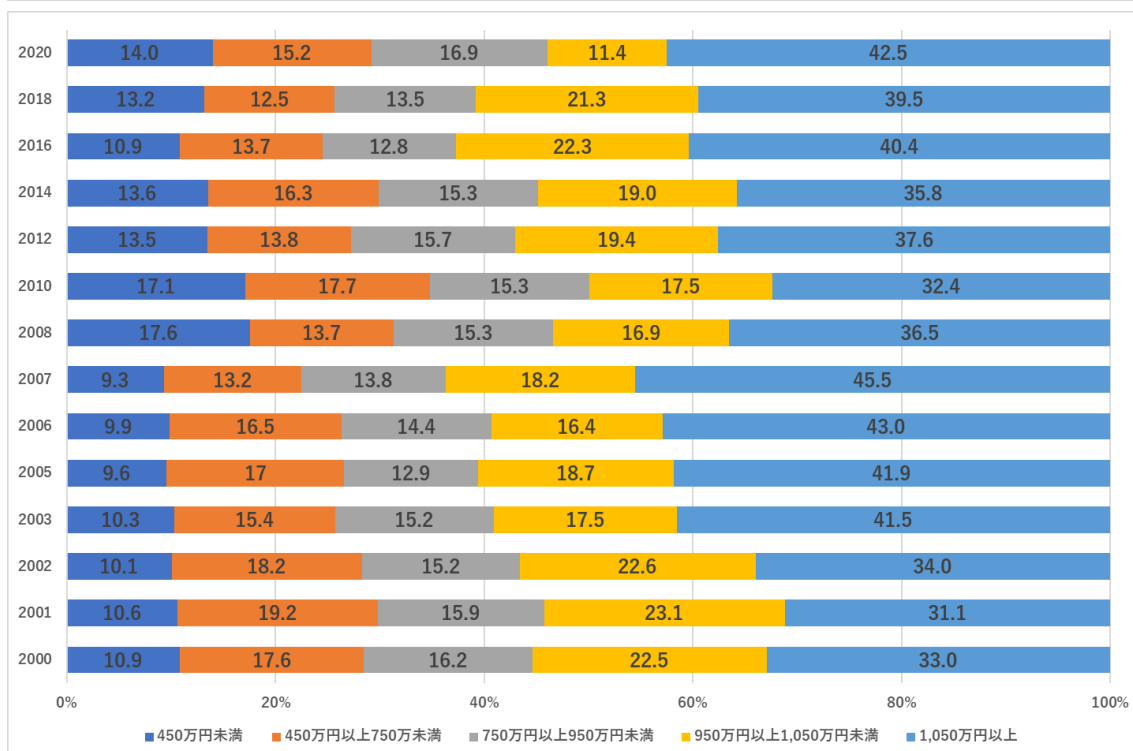
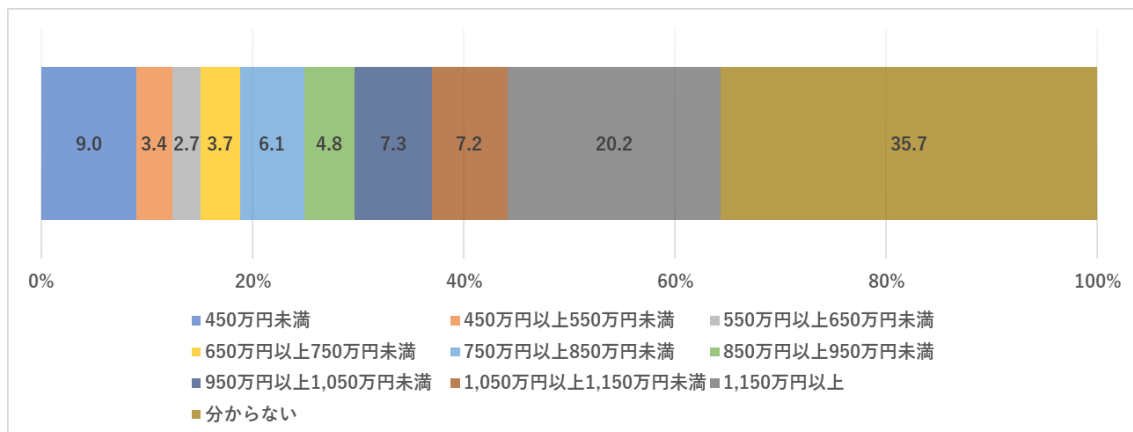
留学生の父親の職業は、「管理的職業」「専門・技術的職業」で約半分を占める。基本調査の結果と比較すると、留学生の父親のほうが「教育的職業」の占める割合が高い。母親の職業に関しては、「無職」が29.7%を占めるが、「管理的職業」に従事する母親の割合が、基本調査の結果と比較すると高いことが特徴である。



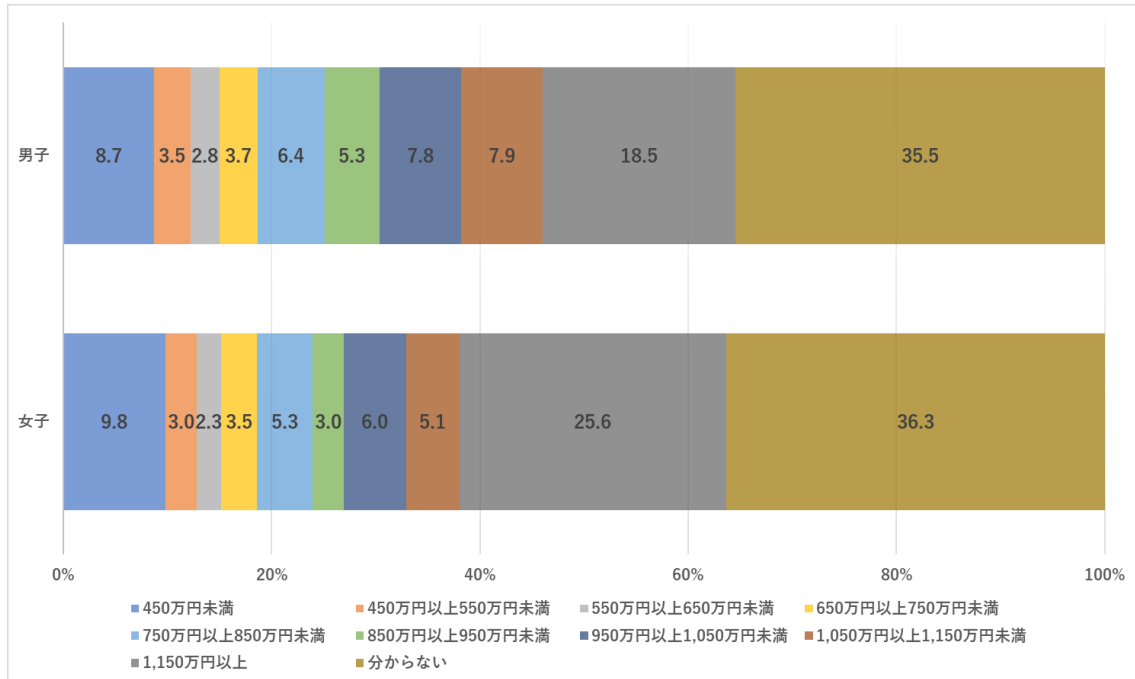
## 40. 世帯収入

- 世帯収入は概ねこれまでの傾向を踏襲
- 前回調査同様、男子よりも女子で世帯収入が高い割合が多い

40. あなたの現在の生計を支えている方の昨年（2020年1月～12月）の年間税込み収入はどれくらいですか。



生計を支えている者の昨年の年間税込収入は、これまでの傾向と概ね整合的である。「950万円以上1,050万円未満」の層が減少し、そのほかの層が全体的に増加した。



世帯収入は男子よりも女子で「1,150万円以上」と回答した割合が7.1%ポイント高いほかは、明確な違いは見られない。この分布は前回調査と大きくは異なるない。

## 「XI. 家庭の状況」の分析

「IV. 不安・悩み」の調査結果の通り、心の悩みやアルバイト状況など、新型コロナウイルス感染症の影響によって分布が変化した項目がいくつかあったものの、家庭の状況は本調査においては大きな変化はそれほど見られなかった。例えば、高校生相当の年齢の居住地で東京都の割合が大きく減少する、家族構成のうち「在学中の兄弟姉妹」が増加し、「それ以外の兄弟姉妹」が減少するなど一部の变化も認められたものの、ワーディングや調査方法の変更、今回調査では前期課程所属の者が若干多いことなどの新型コロナウイルス感染症以外の変化も考慮する必要があるだろう。生計維持者や親の職業、世帯収入などは、概ね前回調査の傾向を踏襲する結果となった。

## 総合分析 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限 が学生に与えた影響

新型コロナウイルス感染症は、人々の生命や健康に影響を与えるだけでなく、経済活動や社会生活などに対しても影響を与える。2020年度の学生生活実態調査においても、新型コロナウイルス感染症が学生の生活や健康にどのような影響を与えているのかを明らかにするために、従来の質問項目に加えて「オンライン授業への満足度」「新型コロナウイルス感染症が収まった後の希望する授業形態」そして「様々な制限の影響」についてたずねられている。今回の総合分析では、様々な制限の影響に注目し、どのような学生に特に影響が大きかったのかを明らかにする。

「様々な制限の影響」については、「新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限は、あなたの生活にどのような影響を及ぼしていますか」という質問で、「自身のキャリア形成や就職・進学」「家族関係や友人との関係」「自身のメンタルヘルスや健康状態」「アルバイト収入や家族の収入」「課外活動等の余暇時間の過ごし方」という5つの項目のそれぞれについて、「とてもよい影響があった」「よい影響があった」「どちらとも言えない」「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」という5つのカテゴリで回答してもらう形式になっている。カテゴリのままで分析することも可能であるが、ここでは簡単に結果を解釈できるように、「とてもよい影響があった」を2点、「よい影響があった」を1点、「どちらとも言えない」を0点、「悪い影響があった」を-1点、「とても悪い影響があった」を-2点として分析を行う。

図 1 は対象者全体の得点の平均値を示したものである。ポジティブな影響が多ければ平均値はプラスに、ネガティブな影響が多ければ平均値はマイナスになる。図 1 の結果を見ると、どの項目についても「とてもよい影響があった」「良い影響があった」と回答する割合よりも「悪い影響があった」「とても悪い影響があった」と回答する割合のほうが多いため、平均値はマイナスの値をとっている。つまり、どの項目についてもネガティブな影響が多いといえる。特に影響が大きいのは「自身のメンタルヘルスや健康状態」と「課外活動等の余暇時間の過ごし方」であった。次にネガティブな影響が大きいのは「家族関係や友人との関係」と「アルバイト収入や家族の収入」である。「自身のキャリア形成や就職・進学」についてはネガティブな影響があったものの、他の項目に比べれば影響は小さいと言える。

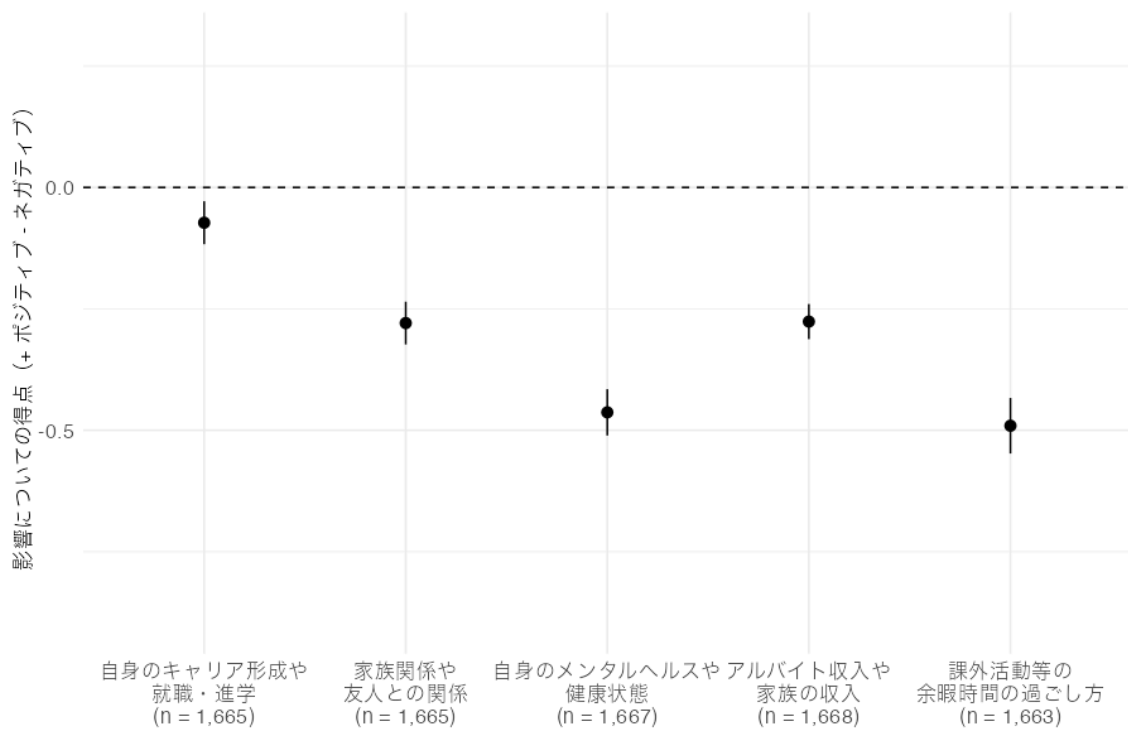


図 1 新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響 (全体)  
(平均値と 95%信頼区間)

図 2 は学年別に影響を見たものである。学年間で大きな差があるわけではないが、全体として1年生で悪化の傾向が強い。

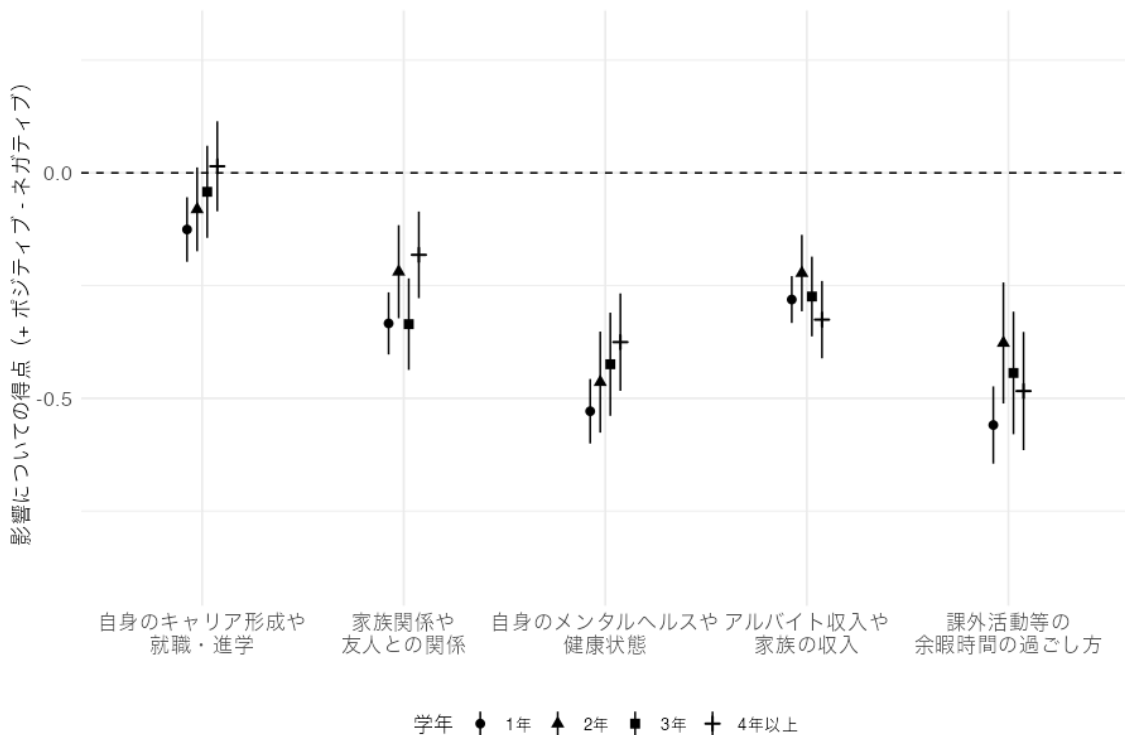


図 2 学年と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連 (平均値と 95%信頼区間)

図3は男女別に影響を見たものである。基本的には男女ともにすべての項目についてネガティブな影響があったといえる。また、「自身のキャリア形成や就職・進学」「自身のメンタルヘルスや健康状態」「課外活動等の余暇時間の過ごし方」において男性よりも女性へのネガティブな影響が大きい。同じくらいの年齢の女性で特にメンタルヘルスの悪化が大きいことは藤原（2021）でも明らかにしているが、同様の傾向が観察された。

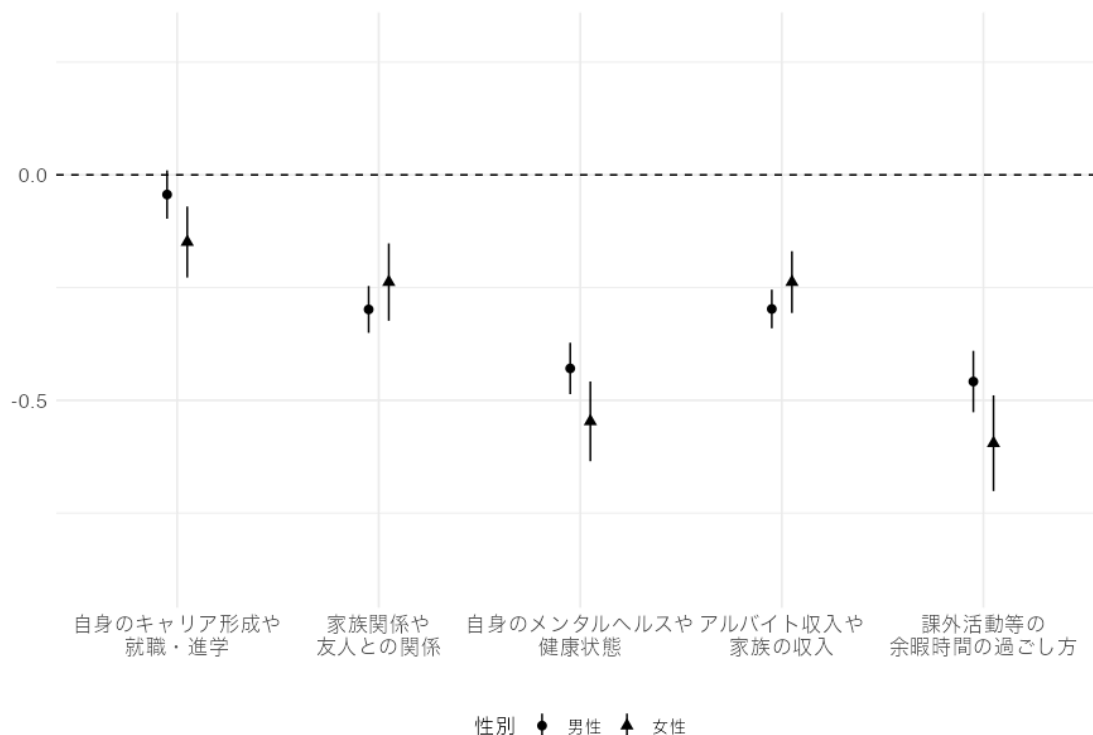


図3 性別と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連  
(平均値と95%信頼区間)

図4は生計を支えている人の年収(2020年1月から12月)別に影響を見たものである。新型コロナウイルス発生前の年収ではないため、解釈は慎重になる必要があるが、最も年収が低いグループ(450万円以下)で、アルバイト収入や家族の収入に大きなネガティブな影響があったといえる。他の項目については大きな違いはないといえる。

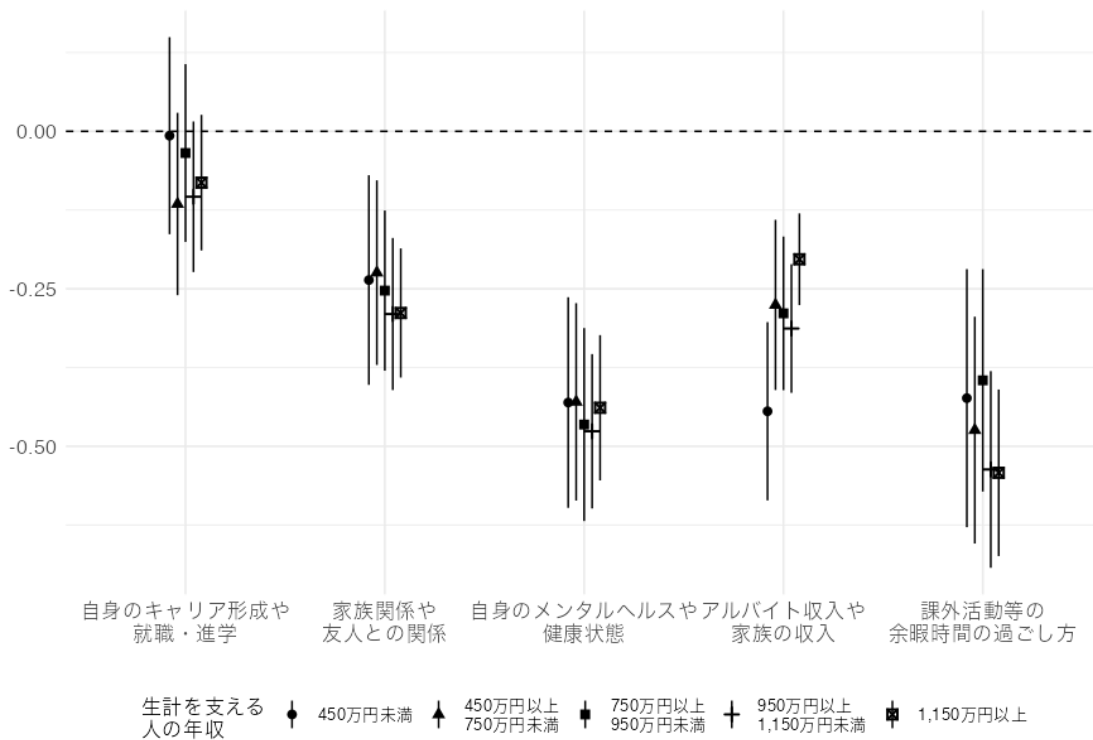


図4 生計を支えている人の年収と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連(平均値と95%信頼区間)



図5と図6は父親と母親の職業別に影響をみたものである。父親が専門・技術・教育・管理とその他の職業（無職・不在・不明を含む）の2つにわけて分析を行ったところ、専門・技術・教育・管理に比べ、その他の職業でネガティブな影響が大きいことが分かった。母親の職業については専門・技術・教育・管理とその他の職業で大きな違いはない。

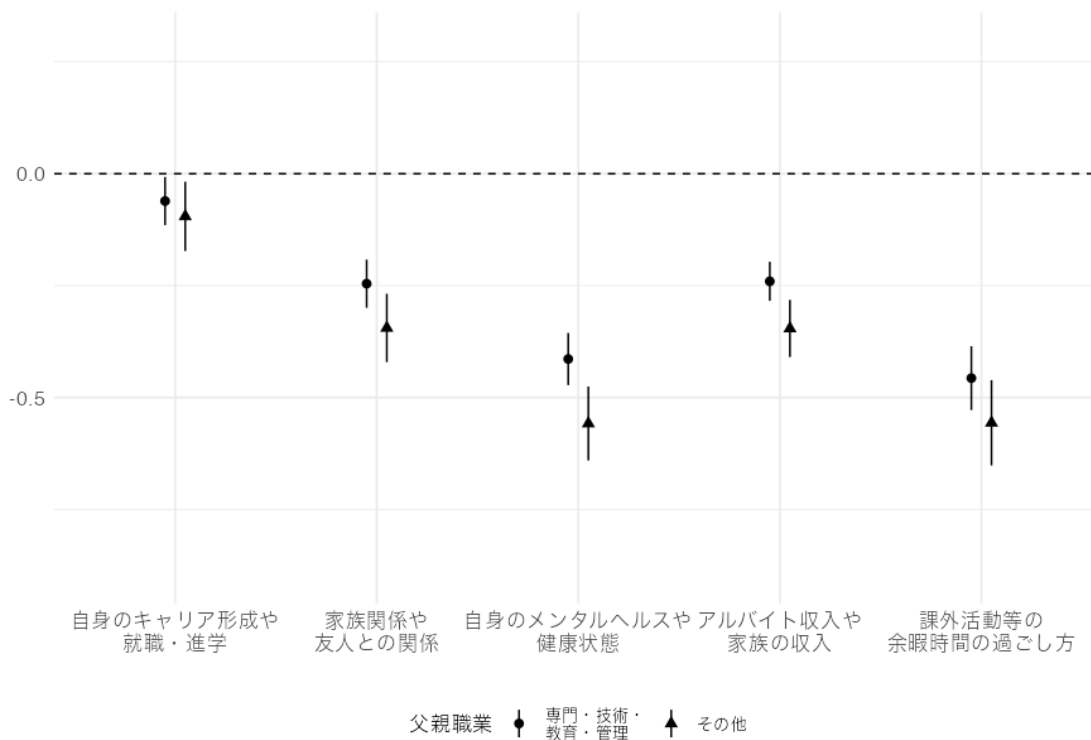


図5 父親の職業と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連 (平均値と95%信頼区間)

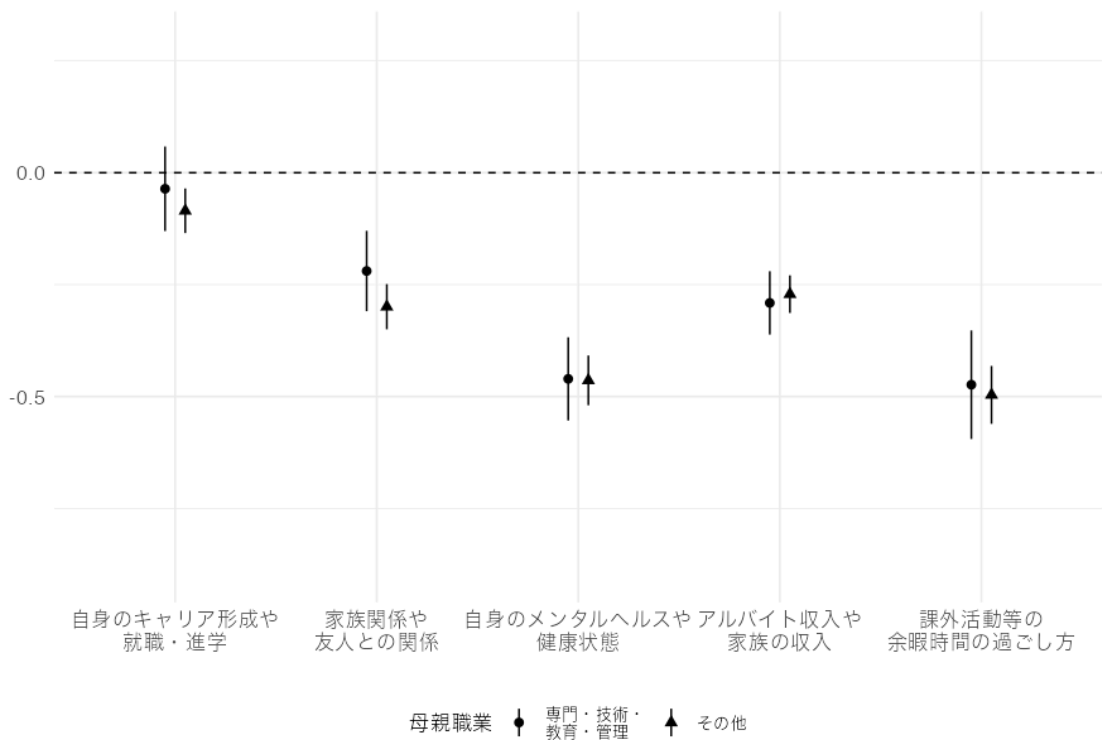


図6 母親の職業と新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連  
(平均値と95%信頼区間)

最後に、暮らし向きと活動制限の影響について分析を行う。暮らし向きは「かなり楽な方」「やや楽な方」「普通」「やや苦しい方」「大変苦しい方」「わからない」という選択肢でたずねられているが、ここでは「かなり楽な方」「やや楽な方」を「楽な方」、「やや苦しい方」「大変苦しい方」を「苦しい方」として、「楽な方」「普通」「苦しい方」の3カテゴリで分析を行う。「わからない」は分析からのぞいた。図7をみると、暮らし向きが「苦しい方」と回答したグループで、「家族関係や友人との関係」「自身のメンタルヘルスや健康状態」「アルバイト収入や家族の収入」に特に大きなネガティブな影響があったことがわかる。「アルバイト収入や家族の収入」への影響と暮らし向きの関連はかなり大きくなっている。もちろんその影響の結果、暮らし向きが悪くなることもあるため、解釈は慎重になる必要があるものの、経済的な状況によって活動制限の影響が異なることが示唆される。

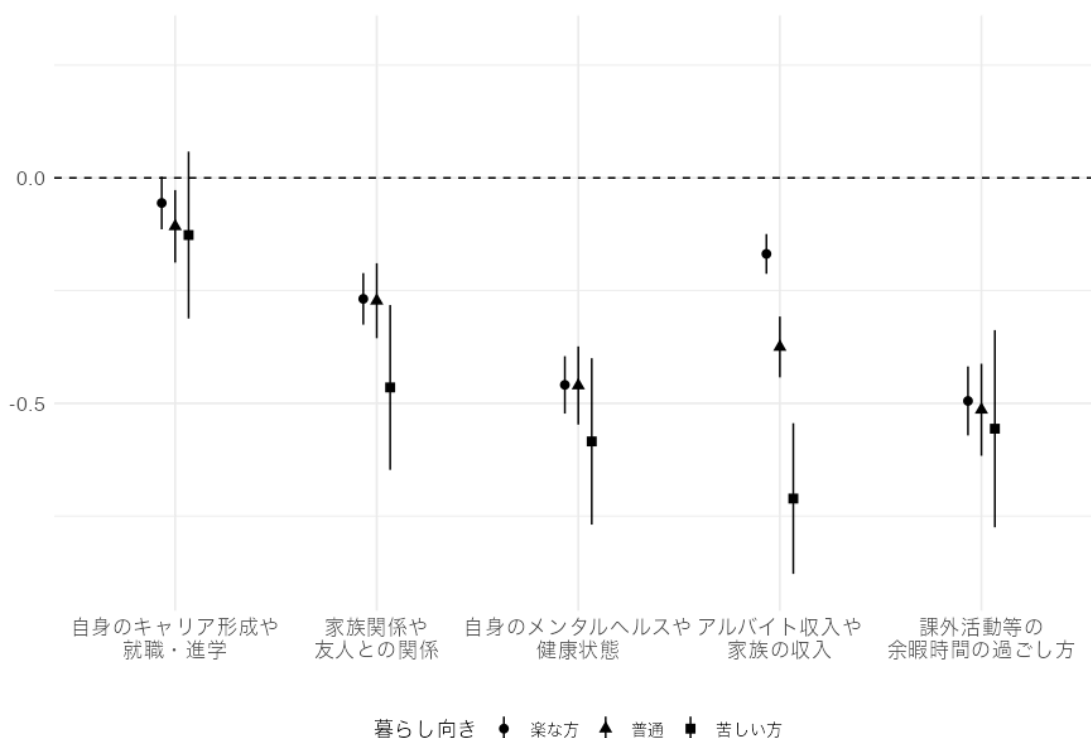


図7 暮らし向きと新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響の関連  
(平均値と95%信頼区間)

以上、簡単な分析から、様々な集団別に新型コロナウイルス感染症拡大下での様々な制限の影響を確認してきた。学年、性別、父親の職業、暮らし向きによってその影響は異なり、1年生、女性、父親の職業が専門・技術・教育・管理ではない場合、暮らし向きが苦しい場合に、ネガティブな影響がより強いといえる。こういった人々に対するより重点的な配慮が必要である一方で、注意しなければならないのは、基本的にはネガティブな影響はどの集団でも確認されているという点である。

本調査は隔年で学生を対象に調査を行っており、時点間の比較も可能である。そこで観察される時点間の変化が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によるものかを識別することは困難であるものの、時点間の比較という点からもアプローチすることが必要だろう。

#### 参考文献

藤原翔. 2021. 「中学生と母親パネル調査からみる COVID-19：若者の仕事、教育、健康へのインパクト」『社会科学研究』73(1):107-128。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssiss/72/1/72\\_107/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssiss/72/1/72_107/_article/-char/ja/)

## 学生委員会学生生活調査WG

2022年1月現在

座長	古澤泰治	(大学院経済学研究科・経済学部)
	加藤貴仁	(大学院法学政治学研究科・法学部)
	小紫公也	(大学院工学系研究科・工学部)
	高橋嘉夫	(大学院理学系研究科・理学部)
	加藤晃史	(大学院数理科学研究科)
	宮尾祐介	(大学院情報理工学系研究科)
	山川雄司	(大学院学際情報学府)
	軸丸真二	(大学院公共政策学教育部)
	藤原翔	(社会科学研究所)
	大西晶子	(グローバルキャンパス推進本部)
	高野明	(相談支援研究開発センター)
	佐藤稔晃	(本部部長(教育・学生支援部))
	手塚安澄	(本部課長(教育・学生支援部))
	渡邊千尋	(本部課長(教育・学生支援部))
事務担当	本部学務課総務・企画チーム(教育・学生支援部)	
	本部国際支援課企画チーム(教育・学生支援部)	
協力	新田真悟(大学院人文社会系研究科博士課程1年)	
	村山いまり(大学院学際情報学府修士課程1年)	